
導乎草子～草子シリーズ2～

空野妃紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

導平草子／草子シリーズ2／

【NZコード】

N4761D

【作者名】

空野妃紫

【あらすじ】

草子シリーズ第一段。紅菜の師匠＆姉も登場。紅菜を育てた一
人に昂摩は気に入られるのか

赤い地平のもと一方的な約束の証にとほうにくれる。友は自分の信念のためにわが子をたくしていったのだ。

わが子を殺すかもしない相手の手のもとへ。

そんな友に「殺す」とつげても友は「あなた達なら、大丈夫」と微笑むだけだった。

絶大な信頼をよせられることがこれほどつらかったことはなかつた。そのあと友は罪人としてこの世からいなくなつた。わが子の成長をみることもなく。

たくされた赤子の名は紅菜。くれな 世界から忌みきらわれてうまれてきた者。

この子さえいなければ、友をうしなうことはなかつた。というおもいは時のうつりとともにやわらぎうすれて友の言葉が頭によぎる。愛で育ててあげて、愛という至上の幸せをかんじさせてあげて。愛をしらない者には愛をあたえることはできないから。道をふみはすすことのないよう、愛という光りの筋をあたえてあげて。もう私にはできないから

赤い空、赤い地平が語りかける。友の願いをかなえてやれと。ときには強く、ときにはささやくよう。

そして、時のながれは友の願いを愛へとかえる。

友が命をかけた愛児に身をていして愛をかたりはじめる。愛児の魂を守り導く番人となる。

それは、友が信じたものその者になる。

覚悟のすえ、未来にあるものが友の信念であつたと信じながら。

春爛漫。色とりどりの花たちがところかまわず咲き乱れる春の野。例外なく紅菜の屋敷にも花々が我が一番だといわんばかりに誇らしげに咲いている。黄色や薄桃色、若葉のみめ鮮やかな息吹はさらに春めかしく眩い光をはなつていた。すべての植物が主役のような顔をしている春の野山。鳥も煌びやかな花たちにのせられて陽気に歌うは春の歌。

雪どけ水に船をうかべ紅菜は水面にふれる。春の陽射しは紅菜をゆつたりとした気持ちにさせる。流れてきた赤い椿は紅菜の手にしばしとどまりふたたび流れしていく。

紅菜は水面から手をはなすと船のうえにあおむけになつた。紅菜の目につつるのは春の陽射しをうける桜の枝。空に網目状に広がる枝は春の主役になるときをまつているのかもしれない。

陽射しに誘われ紅菜は目をとじる。まどろむには四季のなかではやはり春が一番だ。ゆつたりと流れしていく紅菜は春の贅沢を堪能していた。このまま寝てもべつになんの支障もない。

崇高な術者と誉れ高い紅菜はけつして何者にもつかず何者にも流されはしない。そのことが権力者たちにはときに畏怖として感じどきに頼らざるおえないことになる。都は神仏や術者によつてその形をとどめているのだ。

都にいる陰陽師に紅菜のかわりができるないことは半年前におこつた事件で証明されている。紅菜の評判もかなりその事件によつてかわつていて。鬼を従えた妖かしのような術者と恐れられていたが、いまま何人たりともならぶことはできない崇高な術者と称えられる。都の女たちにいたつては“紅菜様”と熱心な恋文がとどくほどだ。

昴摩は船をあやつりながら春を堪能している紅菜を見る。目をつぶる紅菜の姿はいい警えることができない花のようだった。どんなに

春の花々が自分たちの優美さを競い自慢してもけつして紅菜には勝つことはできないだう。

本来なものにも縛られることのない鬼の妖かしであり、その鬼族の長の子供である昴摩だが紅菜に使役されている。紅菜に出会い。紅菜に魅せられて妖かしの本能をして紅菜につかえることを望んだ。紅菜があのとき受けいれてくれたからこそ自分はこうしてそばにいられる。そのときにはそれで満足した紅菜へのおもいは年々時をかさねるほどにつくなるばかりで際限はない。そう欲するのは妖かしであるからか。それとも生きている者の性なのだろうか。

紅菜はなにもわからないような無邪気な顔をして春の陽射しに祝福されている。どんなものたちの祝福をうけるよりも独占したいものがここにあつた。これ以上の立場を望むことは許されないとしきながら。

船を操る水面の音が鳥の奏でる音と調和してのどかに流れていく。そのまま雪だけの川をくだつていくといつまにか紅菜は眠つてしまっていた。おだやかに眠る紅菜の姿には年相応の少女の顔があつた。この姿をみたものはこれがあの噂にきく者とは誰もおもわないだろう。

昴摩は船をとめると紅菜を抱きあげる。紅菜はそれでもやすやすと眠りつづけていた。紅菜が眠るのは信頼の証である。他人の前であつても眠ることはあるが、警戒をしていてこんなふうに穏やかにただ眠つていることはない。いまだに思い出すと飛び跳ねるほど嬉しい。

あのときはあまりの感激にいつまでもいつまでもおだやかになんの警戒もせず眠る紅菜の顔をあきずみていた。いまでは毎夜、紅菜のそばで眠ることを許されている。それはものすごく幸運なことであるのだが、それだけでは足りないとおもつのはやはり妖かしの本能なのだろうか。

紅菜の信頼を得、いかなるときも紅菜のそばにいられることは昴摩にとって星や月をつかむことよりも困難なことであった。この世に

あるどんな宝よりもすばらしいものを手にいたとゆつのこと、ときがたてば、そばにちがづくほど欲はどんどんと深くなつていく。

紅菜を抱いたまま桜の木のしたにすわつた。春の陽射しはほんとうにおだやかで眠りをせのつ。自分がこんなおだやかな時間を愛するようになるとはおもつてもいなかつた。

もともと昴摩は妖かしである。こんなおだやかな世界とは無縁の生活をおくつてきたのだ。欲望のまま殺戮をくりかえし、血に染まる夜の闇が昴摩の生きてきた世界だつた。紅菜に出会うままでそれが自分の最高の舞台だと信じて疑わなかつた。

腕のなかの紅菜からはなんの警戒も感じない。自分のすべてを昴摩にゆだねているといつことがわかる。そのことが昴摩にはなによりも重大なことのように感じる。どんな幸福よりも満たされる瞬間。でも、もっともっと紅菜のそばにいたい。紅菜に求めて欲しい。誰よりも自分だけがちかくにいたい。

こんなふつにそばにいるようになつてわかつたこと。それは紅菜がよく眠るとゆつこと。はじめて逢つたときには紅菜はまったく寝なかつたのである。

どうせ今日もこのまま時がすぎるのも忘れてきがすむまで眠りつづけてしまつのだろう。陽のでているあいだならそれもいい。昴摩はそんなことをかんがえながら紅菜の寝顔をみているのだった。

紅菜の力のいきわたつたこの山では不用意に許しなき者がふみいることはない。それでも、まれではあるが認められない訪問者が訪れることがある。理由はそれぞれであるが、訪れる者すべてが紅菜を田あてでくるのである。

紅菜を有害な者たちから守ることそれが昴摩の一番の役目である。それ以外にもしばし紅菜のもとをはなれて紅菜に依頼された仕事をかわりにこなす。紅菜がすすんでこの地からはなれることはあまりなかつた。

(ああ、それにしても春の陽射しが美しい)

春のあいだはひたすら眠い。花々を愛でるのも大好きだがそれ以上にまどろむことが紅菜には最高の幸せだ。花を愛で陽射しをうけて空を見る。春を体中で感じたままそのまままどろむのはどんなに癒されるか。

春に一年間の銳気を養うことは大切なことだ。木々たちが浮かれれば紅菜の気持ちも自然と浮かれてしまう。浮かれ、陽気な春の雰囲気に誘われ、飲む酒もこの季節の楽しみのひとつだ。

「柏、酒がないぞ」

紅菜は杯をかかげて柏にいった。しかし、あらわれた柏は酒をもつてはいない。

「もう、おやめなさい。飲みすぎですよ。毎晩、毎晩、毎晩」
紅菜はぶううとふくれた顔になるとまだ杯にはいつたままになっている。昴摩の酒に目をつける。梅見酒だといって連日のみづづけている。

「昴摩へ、それちょうどだい」

甘えた声で昴摩の名をよび、無邪気にお願いをする。それだけで昴摩はくらくらきてしまった。そして、ついつい杯をわたしてしまった。

「うん、うまい」

紅菜は唇をぺろりと舐めると満足そうにいつ。紅菜のもとにあつめられるものはすべてが高級品だ。紅菜に謝礼としてわたされるものや貢がれているものもある。蒼はとくに貢いでくれている。いま飲んでいる酒だって大陸の名酒だそうだ。蒼がよこしたものだつた。（ああ、でももっと飲みたい）

円融がいればこんなおもいしないですんだ。円融は仕事についている。なんでも家に物の怪がすみついて夜な夜なわるさをするらしい。はなしに聞くだけでも簡単そうな仕事だったの円融がいくことになつた。いつもは昴摩がいくのだが円融がいきたいといったのだ。

陰陽師をしのぐ力があり帝よりも神にちかいとされた一族の生き

のこりである紅菜のもとには國中からこいつして依頼がくる。大半を
昴摩や円融、柏が処理し主である紅菜はほとんどこの屋敷からでる
ことはない。

（こんなことなら柏をいかせばよかつた）

紅菜は自分の浅はかさを呪うように心のなかでつぶやく。べつに
円融と柏の一人がいつてもよかつたのだ。

「なにかいいましたか？紅菜様」

心のなかでおもつていただけなのに柏にすかさずつっこまれ紅菜
はつくるうつようになんでもない顔をしていう。

「なんにもない」

なんでわかるのか不思議だ。

それでもやつぱり物足りない。たおれるまでとはいわないがあと
一升くらいは飲みたい。こんなとき円融がいてくれたら「まあまあ」
といいながらたらふく飲ませてくれるのに。昴摩をちらりとみると
柏に睨まれてきました。柏の顔をしているだけだった。やはり、柏と
対等にやりあえるのは円融しかない。

「紅菜、もう寝たほうがいいぞ」

柏の圧力に負けた昴摩が紅菜にそういうと抱きあげて退散する。
納得のいかない紅菜は昴摩に目でうつたえる。再戦しようと。しかし、
昴摩は目をそらして奥へと退散してしまった。

それから一田たつて円融がもどってきた。まちにまつた円融の帰
りに紅菜は大喜びで円融をむきいれた。

「遅かつたじゃないか。ずっとまつていたんだぞ」

紅菜の言葉ににこにこと笑いながらいつた。

「仕事ははやくおわったんですが、ついつい寄り道をしてしまいました。ひさしぶりの下界でしたからね」

じついう簡単な仕事にいくのはだいたい昴摩がいくことになつて
いる。移動時間に時間がかかるないからだ。柏にいわせると昴摩が
いちばん屋敷のていれや維持に不要だという理由らしい。

「おまえがいなから寂しかったぞ」

「やれやれ、柏にやられっぱなしだったみたいですね。柏、酒をもつてきてください」

円融は楽しそうに笑いながらいった。円融は心得てこようとしていた。しかし、柏はなにももたずにおらわれて円融について。

「だめですよ。昼間から・・・それに紅菜様、昨晩もたくさんお飲みになつたでしょ？」「うう

紅菜はふくれ面になり柏に無言の抗議をするがこたえるわけがない。こたえるよう相手なら円融がいないあいだも田中に酒を楽しめていた。

「まあいいじゃないですか。私の仕事も無事におわったんですね」「円融は“祝いですよ”とでもいつよに柏に酒をもつてくるようになつた。柏は円融の顔をみてかるくため息をつくと仕方なさそうに奥へと酒の準備をしにいった。

紅菜は嬉しくてほくほくとした期待を満面にだす。やはり円融がいふと生活が別段に豊かになる感じだ。ことのなりゆきをみていた昴摩はやはり円融だけが柏に対抗できるとしみじみおもつた。しばらしくして柏が酒を肴とともにもつてきた。紅菜の機嫌がぐんぐん上昇していくのを感じながら昴摩も春の陽射しのなかで酒をのむ。たしかに、春の陽気とともに飲む酒は格別な味がする。円融はそんな紅菜を微笑ましくおもいながらおもう。

（いまのうちですからね）

紅菜は式をつかつて舞を躍らせ春の景色を舞台におおいに楽しんだ。奏でる楽器の音にふわりふわりと優雅に舞い踊る式。夢のような豪華な春の宴は紅菜のきがすむまでつづいていく。

円融が帰つてきてからとこゝもの毎朝、毎晩、休むまもなく飲んで飲んで飲みまくつてている生活をおくつている。朝あきて一杯のみ、昼は白、薄桃、梅色の花びらをもとめて船でながされながら酒をのむ。夜になれば月や星、梅の桜を愛でて飲む。梅はいまが満開の時期だった。

柏ががみがみいってきても円融がいれば怖くはない。

今日も楽しく酒を飲んでいると一人の使者がきた。使者といつても術者が使役する式で用件を伝えると蝶の形になりぱたりと動かなくなつた。用件は村に物の怪があらわれて夜な夜な若い娘をつれさつてしまふから、その物の怪を退治してほしい、といつものだった。

「昴摩、おまえいってこい」

この程度なら昴摩でじゅうぶんだし紅菜としては春のこの宴を手ばなすのはおしい。梅があわれば、桜がまつていて、桜がすぎれば今度は藤がやつてくる。春はいそがしいのだ。

かといつて円融にいかせれば柏の勢力がおおきくなつて制限されてしまう。昴摩ほどの適任はいないだろう。

「オレが？ そうだな。たいしたこともないだろ？」。駿河の国なら一日もあれば帰つてこれる

昴摩はそういうとさつそく準備のために部屋へとさがつていつた。紅菜は満足そうに昴摩の背をみおくつた。そんな紅菜に柏はいつた。

「紅菜様もたまにはお仕事をなさいませ」

柏はといつて紅菜の手から杯をとつてしまつ。紅菜は手をのばしてとりかえそうとしたがあと一步およばない。

「べつにたいした仕事でもないのにわざわざいいだろ？ なあ、円融

「

「そうですね」

紅菜は円融が加勢してくれるよつにはなしをふつた。

「たまには体を動かすのもいいですよ。軽い運動は体によいですか

ら

しかし、円融は裏切つたのだ。

「はい、はい。決まりですね。お支度しましょ？」

柏はそういうて紅菜をつれていつてしまつ。紅菜には反論する余裕もあたえられない。円融で表情で嫌だ、と円融にうつたえたが円融はにこやかに笑いながら手をふるだけだった。

「昴摩、まちなさい」

柏に呼びとめられて昴摩はふりかえる。今回はすこし遠いので妖獸にのつていつとおもい召喚したところだった。普段は自分の足でかけるのだが。

赤と黒の獸に羽根のはえた妖獸は紅菜とあつまえから昴摩が飼いならしているものだ。魔界を散歩していたときに卵をひろつたものをここまで育てたのだ。普段は魔界を自由に走りまわらせているがこうして主人である昴摩が呼べばすぐにあらわれる。

「なんだ？ 紅菜もくるのか」

戦うときには好んできている直衣姿みて昴摩はいった。頭から唐衣をかぶり紅菜はむすつとしている。ひと目で機嫌がわるいとわかつた。

「そうですよ。たまには体を動かさないとわるいですからね」

紅菜がこたえいかわりに柏がこたえる。機嫌のわるい紅菜は無防備に妖獸にちかづいていった。いくら、紅菜でも術で使役しない妖獸に不用意にちかづくのは危険である。

「紅菜っ、危ない！ 玉莉ぎょくりにふれるな」

昴摩はあわてて妖獸の首をおさえつける。そんな昴摩を無視して紅菜は幼獸のまえに無防備にたつとギンツと睨みつけた。紅菜に飛びつこうと態勢を低くしたまま幼獸も紅菜から目をはなそうとはしない。そうして、数分くらいすぎたころだろうか。

幼獸の気配がかわる。体から緊張がとけて殺氣もきえる。そして、甘えるように紅菜に顔をすりよせた。

「さ、さすが・・・」

昴摩はそれ以上言葉がでない。本来ならありえない状況を目に見てそれしか言葉がでなかつた。使役もせず、犬のよつに眼力だけで妖獸を躊躇してしまつた。

これでもこの妖獸の種族は魔界一獰猛で能力的にはたかいが妖かしですらなかなか成獸を躊躇ることはできない。とくに昴摩が手塩にかけて育てたこの妖獸は何人の使用者を食い殺していく、しかも、昴摩の父親も指を食い千切られている。

「さあ、こぐぞ。昴摩」

いつのまにか妖獸にのりこんでしまった紅菜は昴摩をみおろしていった。

「お、おひ」

昴摩はあわてて玉莉にのりこむと柏をのこしてとびたつていった。以前、紅菜の機嫌はわるく、眼下にひろがる山の色はどこまでも春の絢爛さと陽気さをたたえていた。あつとゆつまに柏の姿はみえなくなり屋敷もただの点のようになる。案内役の使役された蝶がひらひらと春の野山のうえを飛びあがる。

空を翔ること一刹たらず。紅菜たちは目的の場所についていた。紅菜がここ駿河の国にきたのはもう何年ぶりのことだらうか。富士のお山をみあげながら紅菜はおもう。はじめこの地にきたときには柏や円融はそんざいしなかつた。もつ、ずいぶん昔のことのように感じる。

「紅菜、あの村らしいぜ」

案内役の蝶が村の中心におりたつた。昴摩もおなじようにその村におりたつ。今まで自分たちを案内していた蝶は一人の青年の肩に羽根を休めていた。

村人たちが怯えながら離れて空から舞い降りた妖獸をかこんでいる。まあ、どうせんだらう。普通の人間にとつて妖獸は妖かしや物の怪とおなじように自分たちの敵でしかない。こんなふうに怯えと殺氣で迎えられることはなれている。

「蝶がつってきたとゆうことは貴方がかの有名な紅菜殿か」

青年は昴摩にむかつていった。お粗末な力しかもつていなその青年陰陽師はどうやら、昴摩を紅菜と間違っているようだ。まあ、無理もないだらう。紅菜は性別も年齢も人であるかさえもわからぬ。ただ、助けを求める者たちはなんとも犯すことは許されない絶対的な紅菜の力をたよるのだ。すがる者からすれば魔に魂を売るような覚悟といえるかもしない。

「おまえが依頼者か。残念ながらオレは紅菜じやない」

そういうつて昂摩はまだ妖獸にまたがつたままの紅菜に目線をおくつた。顔を隠すように頭から唐衣をかぶつていた紅菜はぱらりと顔をだした。春の絢爛さをあらわした錦の衣に隠されていたその顔は錦の衣以上に美しい顔だ。

「さつそく仕事の話しあわせをしよう」

自己紹介もなにもせずに紅菜はいそいでいるとでもいうようにいつた。妖かしに魅入られるように紅菜の美しさに魅入られていた品疎な青年ははつとしたように紅菜に声をかける。

「ではこちらく」

紅菜はもう機嫌がわるくはないようだつたが、邪魔臭いとおもつてるのはよくわかる。基本的に自分の関心があること以外で労力を使うことを嫌うふしのある紅菜は今回のこともまったく興味がない。

昂摩は妖獸に魔界へ帰るように指示すると紅菜のあとにつづく。自分たちを囲んでいた人の輪は途切れわかれていく。そのあいだを歩きながら昂摩は紅菜に見惚れているやつらの顔を瞬時に覚える。紅菜を恍惚とした表情でみているのはなにも男ばかりではない。

直衣に女人の唐衣をまとつた紅菜は男にも女にもつかない。髪は馬の尻尾のようにゆつてあり少年のようでもあるがその表情がありにも大人っぽい。ただでさえ美しい顔は性別がつきにくいというのに紅菜の格好はそのどちらかひとつにまとめられていない。そのことがよけいに人々を惑わせる。

「とゆうことは夜までなにもすることないじゃねえか」

ぱつといつてぱつと帰つてくるつもりだつた昂摩は説明を聞いていつた。この品疎な青年陰陽師のはなしでは物の怪は夜になると一人また一人と村の若い娘をさらつていいくそうだ。しかも、夜にならないとあらわれないらしい。

「今晚が最後というわけだな」

この村にのこつている娘はあと一人。今晚、村にのこるただ一人

の娘をさらいおわつたらもうあらわれないか、最後にこの村を消すかどちらかだろ？

「さらわれた娘はもうあきらめています。ですが彼女までいなくなつたら村にもう子供は望めません」

青年の言葉に昴摩はそんなのほかから調達すればいいだろ？と非人道的なことをおもいながら退屈そうにきいた。所詮、昴摩も妖かしだ。暴れられればそれでいいというところがある。その前後などどうでもいいはなしなのだ。

「昴摩、おまえたちそんなに人を食うのか？」

「いや、人はけつこう腹にくるからな・・・いちどたらふく食うと、そうだな一月ぐらいはもつかな」

紅菜の質問に昴摩は昔人を食つたときのことをおもいだしながらこたえた。妖かしも物の怪も主食は以外にも野山の獣を食べている。人間といつても美味しい者と不味い者がある。美味しい人間は数が少ないし、よつぽど腹がへつてないとそのへんの不味い人間など食わない。

「じゃあ、自分の食べる分ではないかもしれないな」

紅菜の呑みにおもいだしたように昴摩はいった。そういえば昔、若い娘を酒で熟成させた肉を食つたことがある。父親に献上されたものだつたからどんなやつがどうやってつくるのかはしらないが。（ああ、あれは美味かつた）

「そういえば、若い娘の酒づけを昔、食つたことがある。たしか、あれは食べる直前まで生きてたぜ」

「そうか・・・」

そういつて紅菜はすこしうつむきだまつてしまつた。すこしふせられた睫毛が顔にかすかに影をおとして儂げな感じがする。（そういえば、あれは美しい娘であればあるほど美味しいと親父がいつてたな）

そんなことをおもいだしながら紅菜を見る。紅菜の酒づけならこの世のものとはおもえぬほどの美味だろ？しかし、そんなもつた

いないことはできないが。

(たしか、酒の名前は・・・・・)

「・・・・白瞑酒はくめいしゅつたかな」

昴摩は娘をつけていた酒の名前もおもいだした。娘といつしょにそのつけている酒も飲んだのだ。意外と苗のことを細々と細かく覚えているものである。

「では、もしかしたら娘たちは生きているかもしないんですね」
青年は一縷の望みをつかんだような顔でいった。紅菜はなにかを考えるようにおいていた手をはなすとにたりと笑みをこぼした。昴摩はその笑みにいやな予感と冷や汗をかく。このゆう顔をしたときの紅菜のおもいつきはろくなものはない。

「よし、私が囮になら」

(やつぱり)

そういうてるんるんで支度をしにこうとする紅菜の肩をつかんだ。
「まで、それはだめだらけ。もし魔界なんかにいってもしものことがあつたら」

紅菜が負けるとはおもわないが、魔界はやはり魔の者に有利なようになっている。天が天の者たちにとつて心地よいようにできているように。人間のすむこの世はその中間であるから天人のように強く影響をうけるとはおもわないが。人間でも紅菜は天人にもつともちからもしかすると力が弱まつたり体に変調をきたしたりするかもしれない。

「おまえもついてくればいいだろ」

「オレがいたとしても反対だつ！ こつちにきたときには始末してそれで仕事はおわりだらう。いちいち寝床にいく必要はない」

なんでもないようになつと昴摩の手をふりはらう。紅菜は村娘がきていた小袖を紙で用意するとさつさと服をぬぎする。昴摩はあわてて青年の目から紅菜の体をかくす。紅菜はきにすることもなく着がえ終わると、おなじように紙で紅を用意すると唇にひいた。

「だいたい、具合がわるくなつたらどうする一魔界だぞ、紅菜たち

の常識がついてゐるかね？」などねえ。」

（じつは昔からいちど魔界にいつてみたかつたんだ。それに・・・

艶やかな黒い髪をおろし櫛をとおして村娘のよつに束ねた。そして、キャンキャンとわめいている鼎摩にくぬりとふりかえると、つりこり笑つていづ。

「どうだ？ 素朴な感しかけたN!!」
おもわずその顔に昂揚の言葉がきえる。たしかによかつた。
(もうじやなくてシ)

「ダメだ。
絶対に反対だ！」

紅菜は昴摩の言葉の意味をわかつていながらわざと昴摩に見当違
いのこたえをかえした。昴摩はそれからあきらめたように肩をおと
していった。

素朴な感しもいし

その言葉に昇摩は覺悟をもめるしか

菜を守らなければならない。つまつまと浮かれている紅菜ときが重そうにうなだれている昴摩を青年は困惑の瞳でみつめていた。

夜。紅菜は村にのこつたもう一人の娘といつしょに村のそとにいた。やはりこちらは屋敷とはちがいすこし寒い。肩が夜の冷たさにしたたかにふるえる。

「風邪ひくぞ」

そういうて昴摩は紅菜の体を温めるように腕をまわした。紅菜の背中にじんわりと昴摩のぬくもりがつたわつてくる。いたわるよう

「まあ、風邪ひいて殺されるのはおまえだろ?」「ひー

昴摩は紅菜のその言葉に一本の角をはやして鬼よりも怖い顔をし

て怒つている柏の姿を想像してしまった。そして、寒さではないふるえを感じる。

「紅菜、そんな薄着をするな」

そういうて自分の衣のなかにすっぽりと紅菜をいれてしまつ。そんな一人を真つ赤な顔でみているのは村娘と青年陰陽師だ。二人はきまずそうに視線をはずしている。一人にとつては普通なことでも屋敷から一步でれば普通ではなくなる。

昴摩はいつもの服装のうえに紅菜がかぶっていた唐衣をかわりに頭からかぶっている。紅菜がせっかく用意してやつた村娘の衣装にけつして袖をとおせなかつた昴摩はせめてそれをかぶることになったのだ。

紅菜としては面白半分で紅をひき女装をした昴摩をみてみたかつたが、本人が断固嫌がるのではしかたない。性格の大半が優しさでできている紅菜には無理をしいるといふことはできなかつた。

（はあ、残念）

昴摩は妖かしらしくととのつたきれいな顔をしているからきっと女装させたら美女になるだらうとおもうのだが。それにかわいらしく着飾つた昴摩をからかいながら愛でるのは楽しそうだつたのにほんとうに残念である。

そんなことをかんがえていると突然、空気がかわつた。闇の色がこくなる。

「きたな」

昴摩の言葉にぐつとまわりの雰囲気が緊張したものになる。紅菜は心からわきあがるわくわくとした高揚感がとめられない。昴摩もすつと自分の気配をけして正体を隠すように衣をまとつた。

これでもかという演出であらわれたのは火車に乗つた豚の物の怪。物の怪は地上にいる紅菜たちの姿をちらりとみると田のまえにおりてきた。青年は紅菜たちの前にたち物の怪にむかつていつた。

「今宵こそはそなたを退治する」

しかし、物の怪はいともたやすく青年をはねのけてしまつた。言

葉と実力がともなつていないので青年の悲しいところである。物の怪はでぶんとした腹と醜い豚の顔で紅菜たちにせまつてきた。

紅菜は怯えたように「あやー」と悲鳴をあげる。そして、自分の顔を蒼白にそめてあまりの恐怖に氣絶する。村娘はあまりの恐ろしさにぶるぶる震え声もでないようである。かわいそつなほど怯えその目には涙がたまつていた。

「おお、これは美しい。ひそしぶりに上物が味わえる」

豚の物の怪は紅菜の顔をみて呴くとまっさきに紅菜をつかみあげた。そして、大事そうに小脇にかかる。続けて昂摩を肩に抱え上げ、村娘を荷物をもつようにつかむと車におじこめた。そして、車は天へと駆けあがつていぐ。

紅菜はわくわく、どきどきがおさまらない。祭りがはじめるまえの子供のような高揚感をつのらせていた。

紅菜たちは鉄格子の檻のなかにいれられた。そこにはたくさん娘たちがとじこめられていた。田を配ればもつすでに酒につけられてしまつていい娘たちもいた。それと白瞑酒もある。

「こじが魔界か。たいしたことなさそだな」

自分の体になんの異変も感じていない紅菜がいう。

「ここは魔界の門のまえだ。だから、魔界じゃねえ」

昂摩のこたえにがっくりと肩をおとした。しかし、氣をおとしてばかりはいられない。もうひとつ目的はなんなくこなせそうだ。でも、慎重にやらないと失敗はゆるされない。

「あの豚、物の怪では上の上だな。まあ、オレには糞みたいなもんだがな」

鉄格子ごしに昂摩は豚の物の怪をみていった。この鉄格子もなんてことはない代物だし、これなら簡単に片付きそうだと算段をたてる。

あたりは魔界隨一とうたわれる美酒、白瞑酒のつよい香りがたちこめている。普通の人間ならこの匂いだけで酔つてしまつ。案の定、

」の檻にこじる娘たちは匂いで完全に酔っ払っていた。いま素面でいるのは昴摩と紅菜ぐらいだらう。

魔界の門のまえといつても紅菜の体調が心配だ。なんともなさそうにはしていいるがもしものことがあってからじや遅い。昴摩は紅菜の横顔を再三みる。そして、血色のよきそうな顔をみて安心するのだった。紅菜のことがきがきではなくおちつけない。

（一刻もはやくおわりせん）

昴摩がこんな茶番をおわいせんたりあがわいとしたとき。

「紅菜つ

紅菜の名をよんでも抱きついてきた。

「こんなにうで会うなんて」

そいつは紅菜の体をぎゅうつと抱きしめてあらうとか紅菜の頬に口づけている。しかも、何回も何回もだ。

昴摩が力ずくでそいつをはがそうとしたが、睨まれて体が動かなくなる。

（なつ、なんだ）

昴摩は困惑をしながらそいつをみる。派手な柄の衣を肌蹴てきていて胸には雲と龍の印がある。その女は昴摩を嘗めまわすように観察するとふんと馬鹿にするようにわらった。

「紅菜、ほんとにこんなので満足なの？」

紅菜の頬にふれながらあやしい眼差しをむけていった。大人の色香をただよわせて紅菜の頬から顎へと指が滑つていぐ。紅菜はされるがままだ。

（ぎやー、紅菜がくわれるつ）

声もないので昴摩は心のなかでできるかぎりかけんだ。そんな

昴摩を尻目に紅菜はため息をついていった。

「やめてください。師匠」

そのころ、生野の屋敷では夜の梅を愛でながら柏と円融が散歩をしていた。梅はやはり昼がいいなどおもいながら梅を愛でる。

柏はあと悩ましくため息をついた。梅の美しさにおもわずため息がでたわけではない。

「心配しすぎですよ」

憂い顔でため息をつく柏に円融はいった。そして、諭すよつよつ。

「大丈夫ですよ、心配しなくても。なにも魔の巣窟におくりだしたわけではありませんし」

「でも……」

柏は円融の言葉にそつこつとしながら、おもいなおしたよう自分にいきかせる。

「そうね。紅菜様に書を及ぼすことはないでしょ」

「そうですよ。の方が間違つてもそんなことはしません」

柏の言葉に安心させるように円融は言葉をかさねた。そのとき、一人の男があらわれた。その男は柏や円融たちには馴染み深い男だ。人間でこの地に容易にたちいることのできる数少ない男。

「よひ、帰つたぜ」

気安くはなしかけてきた男に円融はにひつとほほ笑む。柏もおなじように親しみぶかい表情をつかべてあらわれた男にいつ。

「やつと帰つてきたんですね。このあいだ盛智が唐にいつておつしゃつっていましたよ」

男は「おう」とこたえて二人に聞いた。

「紅菜はどこにいる？土産がたくさんあるんだ」

そうじつて懐から一枚の紙をだす。紙には『袋』とかかれている。紅菜からわたされたもののひとつだ。紅菜特製のその紙をペラペラさせながら楽しそうにわらひ。

「蒼殿、残念ですけど紅菜様はいませんよ」

円融の言葉に意外そうに蒼はこたえる。紅菜がこの敷地からでることはめつたにない。だから、いつでもここにくると紅菜にあえるのだが。

「めずらしい。どこいったんだ？」

「仕事ですよ。たまには体を動かせないと飲んでばかりですからね」柏の言葉に蒼はおかしそうにはつはつと笑う。あいかわらずらしい。しかし、せつかくの帰還なのだ紅菜の顔をみないで去るのはなじりおしい。それにでかけているあいだに紅菜が飼つた鬼もみてみたい。

「そりや残念。翁がいつた紅菜の飼い魔もみてみたかったんだ。いるだろ?」

蒼がいつた『翁』とは盛智のことである。ここにくるまえに盛智のところへよつてきたのだ。ほんとうは紅菜の屋敷にいり、またどこかへふつらとこくつもりだつたが、盛智に鬼のことをきいて興味がわいたのだ。

「昂摩のことですか? いつしょにいっていますよ。紅菜様と」

柏の返答に蒼はふくんと興味ぶかげにいつた。その顔をみて円融は(ああ、この人は)とおもう。紅菜に懸想を抱いていることをしていた。しかし、どんなに紅菜につたえてもそれをうけとつてはもらえないことも蒼はしつっている。

やはり、ここまできて帰るのは惜しい。じつせ、また旅にでるのだ。紅菜の仕事先にいくのもおもしろいかもしれない。仕事先には紅菜の飼い魔もいるのだ。

「どこいったんだ。紅菜に会わないと帰れないだろ?」

(また、めんどうなことに)

蒼のこたえに柏はおもつ。ただでさえ、昂摩と蒼の直接対峙はさけたいのにいまはあの方までいる。ややこしくなるのは必至であつた。柏がこたえられずにはいと円融がかわりにこたえる。

「いくのはよいですが、駿河国ですよ」

駿河国ときいて蒼の口元がゆがむ。口をぴくぴくさせていつた。

「ま、まさか・・・」

その態度に柏も自分が失念をしていたことにきづく。蒼はけつしていま紅菜がいるところにはいけないのだといつこと。

「そうです。螢蘭様のところです」

「融はせりつ」といった。蒼はその名をあくだけで体がつすべのを感じた。そして、蒼白な顔になる。

「あの方のところへ」

「うつぶやいた。蒼がはじめて螢蘭にあつたのは一五のときだつた。はじめてあつたあのときから逆らつてはいけないものを感じたが、あの決定的でござがおきてから蒼は御方のお名前すら発することができなくなつた。聞けばそのときの悪夢がこともたやすくよみがえる。

紅菜は螢蘭をおしかえしてたちあがると情けなくもかたまつたままの昂摩の背中をぱしつとたたいた。すると不思議にも体が動くようになる。

「はつう」

紅菜が師匠とよんだ女は不服そうに紅菜のした行動をみていた。昂摩の頭にはただただ困惑しかつかばず、どうしていいのかわからない。

へんな術だつた。術をかけた本人の力をまったく感じない。感覚的には自然とそつ、じく自然と体が動かなくなつたといつ感じだつた。それに紅菜に師匠がいたなんて初聞きだ。

「それより、師匠はどうしてここに」

いつもとちがいどこか丁寧な口調の紅菜。おしかえされたといつのにめげずに紅菜にひつきながら螢蘭はくすつと不敵にわらつた。そして、視線を瓶にやる。

「もちろん、白瞑酒がめあてにきまつてるじゃない」

そして、豚の物の怪みてつづけていつ。紅菜はぐりつと螢蘭を自分からはがした。

「あの豚から白瞑酒のいい匂いがするんだもん。そうじゃなきや、あんな醜いのといつしょにいるわけないでしょ。私は醜いものはきらじなの」

螢蘭の言葉になんとなく紅菜とおなじ匂いを感じる。

（でも、なんかもつと似ているやつがいたよつな）

螢蘭は昴摩をじろじろみてみる。昴摩の顎に手をかけてもつかたほうを腰にあてて昴摩の顔をみていていった。

「ふさいく」

昴摩はその言葉に衝撃をうける。それほど美貌に執着があるわけではないが妖かしである以上、ふさいくの汚名をうけいれることはできない。妖かしにとつて美しさは一種の武器なのである。人間をかどわかすのはやはりこの美しさがあつてこそだ。

「な、なんだつ・・・」

動搖しつつも昴摩はつぶやいた。たしかに螢蘭はうつくしい顔をしている。印象的なおおきな瞳は見る者をすいこんでしまいそうなほど瞳に力があつた。だが、あんなふうにいわれるのはない。

「紅菜には似あわないわよ。こんな飼い魔。私がもつといいのを捕まえてきてあげる」

「師匠、あまりいじめないでください。これでも私は気にいつてるんですから」

飼い魔あつかいされた昴摩は紅菜の言葉がきこえなかつた。飼い魔といえば妖獣につかう言葉で魔界でいちばん位のたかい妖かしにつかう言葉じやない。あまりの侮蔑に昴摩はぶるぶると体がふるえた。

「だ、だれが・・・・飼い魔・・・・だと」

昴摩の気配が剣呑としたものにかわったのをじちはやく察知した紅菜は昴摩にむかつていつた。

「昴摩もいちいち師匠の言葉に反応するな」

今にも噛みついてしまいそうな昴摩に紅菜はちかよつておさえる。吼えている犬の首輪をおさえるようにしていいる感覺だ。昴摩はガルルルと喉を鳴らしながら紅菜にしがみついている。

「ああ、紅菜の飼い魔がこんなぱーちくりんなんて、師匠かなしい

（

「師匠」

昴摩を挑発してからに皿葉をかける螢蘭を紅菜はいためた。

(ああ、この人のこいつめのところはなおしてほしー)

たしかに術者として螢蘭以上の人はないと紅菜もおもづ。自分などまだまだ螢蘭のあしもともおよばないところの自覚があるほどだ。

螢蘭はゆいいつの弟子である紅菜を溺愛しているし、基本的に男は嫌いだ。だからか男とあつとこいつもこんな感じになる。蒼とあつたときもこんな感じでこの人はつんつんしていた。でも、それ以上のことはしないし、悪い人でもないのだ。

「なに騒いでる、ぶひつ」

豚の物の怪が騒いでいる紅菜たちに鉄格子を蹴つておどした。まあ、三人にひとつはなんともないのだが。

「つぬせえー！この豚ッ」

昴摩はとうとうぶちきれて本性をあらわしてしまつ。そして、豚の物の怪がしたように鉄格子を蹴つた。結果は豚とばちがい鉄格子がそのままぶつとんでいった。とうぜんのよつに豚の物の怪のうえにその鉄格子がかぶさる。

「てめえのせいでこんな不機嫌なおもいしなきやなんねんだぞ！ええ、わかつてんのかッ。ああんッ」

完全に怒りを豚にぶつけている昴摩はさておき、紅菜はつかまつていた娘や酒につけられている娘を助けることに奔走する。うちあわせどおりに外で待機しているだろう村の青年にひきわたしていく。そして、それらがあわると紅菜は使用されていない白瞑酒のはいつた瓶の味見をする。その味は噂に負けず劣らずの美味だった。うつとりとして瓶のなかの液体をみつめていると螢蘭もその瓶の味をみにきた。

「ああ、やつぱり白瞑酒ねー。しみわたるわ

(師匠、飲んだことあるんだ)

「紅菜、準備はいい」

そういうて長方形の紙に『袋』とかかれた札をだした。そして、

その札を瓶のうえにのせる。瓶はあつさりと紙のなかにきえていった。この術は便利だからと一番はじめに教えてもらつたものだ。

螢蘭に負けないよう、紅菜も瓶を回収していく。ふたりは名酒とも美酒とも贊美される魔界の酒を回収することにやつきになる。紅菜の頭のなかでは屋敷に帰つて桜のしたこの名酒に舟を浮かべて飲むことまで浮かんでいる。もう、しつかりすつかりと豚のことを忘れてしまつていて。

一人の頭からすつかりと豚の存在がきえさつてしまつていたとき、その忘れさらっていた豚が螢蘭の足をつかんだ。みじかくごつごつとした醜い指が螢蘭の白く美しい足にふれる。

「た、たすけて……」

螢蘭はそのあまりな光景にぶちぎれた。醜いものと男が大大大大嫌いな螢蘭の体に豚のそれも、醜いオス豚の指がふれているのだ。許されるはずもない。

「愚者」ときがなんの許しをえて私にふれる

「へ？」

豚の物の怪は迫りくる昂摩にたいしての恐怖を一瞬忘れたように螢蘭を見る。螢蘭は昂摩なんてくらべものにならないぐらいの怒りの炎がうずまいている。

「その罪、命だけでは償えないとしつての狼藉か

ドカ！

バキ！

グシャヤ！

「この雄豚ッ！醜いくせに生きやがつて！」

ドスツ！ドスツ！

ガガガッ！

「おまえたちなど食われる以外になんの価値があるー。」

グシャヤッ！

ドンツ！

「だいたい、醜いくせに紅菜にも触れやがつてッ！死ね！這いつく

ぱって無様に死ね！はははは

ベシヨツ！

ゴンソツ！

昴摩は魔王よりも怖い螢蘭の姿にさつと頭の血がひいていく。そして、このままではいけないと本能がつづて、紅菜に助けを求めるよつにいった。

「く、紅菜、おまえの師匠をとめつ」

しかし、紅菜はまつたくはなしをきいていなかつた。完全にこの美酒のことなどらわれてまつたくこの惨事を認識していない。すぐ横では惨事はくりかえされ、ともて音声しかつたえることができない。豚の物の怪はもう死んでいるのとかわらない状態だつたがそれでも螢蘭の攻撃は休まることがない。

ミシミシッ！

ドッカン！

かえり血をあびて殺戮のかぎりをつくしている螢蘭をみつめ、もし紅菜にとめられていなかつたら自分が豚のたち位置だつたことに驚愕を覚える。紅菜がとめてくれなかつたらあの豚の苦痛や恐怖が自分の身にふりかかつていたのだ。

「師匠、もうおわつた。帰ろう？」

やつと口をひらいた紅菜の言葉にぐるつと人が一八〇度かわる。にこにこ人のよさそうな笑いをうかべていう螢蘭はその身にあびたはずのかえり血すらきれいさつぱりきえている。神業としかいえないような変り身だつた。

「ああん、紅菜もつすべで回収しちやつたの？あとで私にもわけてね」

急に人のかわつた螢蘭に昴摩はあぜんとするしかなかつた。一瞬前、ほんの一瞬前まで残虐、惨殺のかぎりをつくしていた者とはおなじとはおもえない。

「紅菜、あの人・・・・」

そのことを紅菜にいおつとしたら螢蘭のあの殺意にみちた瞳がガ

ンツと昴摩をみすえた。昴摩はこれ以上いつたら殺されると感じ口をつぐんだ。

「なんだ？なんかいつたか？」

「なんにもない」

たずねてきた紅菜に昴摩はひくひくとひきつりながらじたえた。紅菜は「そうか」というと螢蘭に肩を抱かれていつてしまふ。紅菜は完全に豚の物の怪の存在も忘れているようだつた。

（き、きづいてねえ）

どうやら紅菜は自分の師匠の本性をきづいていよいようだつた。しかし、ばらすことはできない。ばらやすとすれば、ばらされるまえに確實に殺られる。豚の死骸をみてふるふると震えた。

「紅菜～、これから私の家にいらつしゃいな。積もるはなしもあるし。なによりこんなに愛らしい紅菜をこのまま帰せないわ」

そういうて螢蘭は蹴鞠のよくな胸に紅菜の顔をおしつけてくる。紅菜はなんとかその胸から脱出すると螢蘭にいつた。

「やうだな。お邪魔します」

「や～ん、そこそこなくつちや。ああ、いきましょ～。こきましょ～」
るんるんで螢蘭は紅菜の手をひく。出口までくると螢蘭は雲と龍の印に一本の指にふれ唇にあてる。ちゅ～とした音が指と唇のあいで鳴つたと同時に印から龍がでた。比翼の翼をもつた龍は主人に甘えるように鼻先をこすりつけている。

「さあ、紅菜のりなさい。久しぶりでしよう花凜にのるのは」

紅菜は態勢をひくくしている花凜にとびのると龍は嬉しそうに鳴いてこたえる。つづて螢蘭も龍にとびのつた。そして、紅菜にばれないよう昴摩に冷たい視線をむける。

「あんたは走つてきなさい」

ぽかんとしている昴摩に螢蘭はそういうと龍にとぶように首をたたいた。そんな師匠に紅菜はあわてていった。妖獸でも花凜に追いつくことはできない。花凜がそのきになれば国の端から端まで一日かからない。修行の終盤になつたときには花凜の背にのせられて国

中を見て歩いたくらいだ。

「師匠、そんなこといわないでください。はい、はやく昴摩も」
そういうて手をのばしてきた紅菜のまえにとびのると螢蘭とむか
いあつようになつてしまつた。田がばつちりとあつ。蛙と蛇のよ
うな構図になつてしまつた。そんな二人にはきづかず紅菜は自分が
落ちないように昴摩に抱きつく。それをみた螢蘭は獲物を捕らえる
目から天敵を抹殺するよつた田つきになる。

紅菜をはさんで睨まれている昴摩はいつものように紅菜の体に手
をまわすことができない。まわしてしまつたら間違いなく命がない。
しかし、紅菜は自分の無事のために昴摩にいつ。

「おい、しつかり掴まえろ。おちたらどうする」

天高いところからおとされたら紅菜をかばつてくれるのは昴摩し
かない。師匠はこうこうときには意外とかばつてくれないので。
こんなふざけた師匠だがやはり師匠である。自分でできることに關
しては手をかしてもらえない。よつぽどのことではないかぎり師匠
が手をさしのべる」ことはなかつた。

「あ、ああ」

戸惑いながら紅菜に手をまわした。殺氣がよりつよくなつてゐる。
それでも、螢蘭は紅菜が認めていることでしかたなしに黙認するし
かなかつた。螢蘭は龍の首をかるくたたく。龍は心得たように翼を
ひろげて空高くとびあがる。

（何者なんだ）

昴摩は螢蘭に睨まれながらかんがえる。ふつう自分の体に神獸を
飼つたりはできない。もちろんもつと低級な神獸や魔獸なら理解で
きるが、龍はけつして低級なものではない。その龍を体で飼えるな
ど常識では考えられなかつた。それに、昴摩から自由をうばつたあ
の技。あれはなんだつたのか。何者かわからず、ただわかつてゐる
のは人であるということだけだ。螢蘭が只者ではないことだけを感
じとつていて。

龍は主の足となり天高くそびえるお山へとむかう。体の一部を雲

でおおわれたそのお山は不死の命をあたえるといわれる靈山。駿河國の靈山は国が誇る最高峰の靈的な場所であった。その場所を住処にしていこゝの鎌蘭はやはつ口者ではない。

龍のおりたつた場所は国一巨大な靈山だった。霧がたちこめるなか木々たちが生い茂つてゐる姿は異様なものを感じさせる。いや、視覚的なものが原因なのではなく、感覚的にもやはりここはちがつた。

屋敷といつていたが屋敷らしいものはなくただ森がひろがるばかりだ。ほんとうにここに螢蘭の屋敷があるのだろうか不安である。それに靈山はよくもわるくもある。治められているのならよくなりこれ以上のいい土地はないが、ひとたび穢れると悪しきものがはびこつてしまふ。そうなるとちょっとやそつとじや清められない。ここは大丈夫そうだが、それでも不安がよぎる。妖かしからかその地の移ろいやすさがよくわかる。

昴摩はいつもどんなときでも身につけている“耀鬼神”の柄に手をあてる。昴摩がなにより優先しなければいけないこと。それは紅菜をあらゆる危険から守ることだ。それは、契約や術に縛られたものではなく自発的なものであった。

螢蘭が指をパチンとならすと龍は印とおなじように体をまるめてから胸にある印のへともどつていつた。龍には一種類ある。蛇から転じたものと鯉から転じたもの。螢蘭の龍は空を飛ぶるから鯉から転じたものだ。

「花凜みたいなかわいい龍でもつかまえにいこうかな。こつそり」

花凜をみて本気で考へてゐる。しかしそれ、螢蘭のように龍を捕まえにいこうとしたら円融や柏に猛反対をつけた。たしかそのとき蒼もいたよくなきがしたがどうだったかな。

(そういえば、蒼はいつも師匠の名をきくとどつかいつてしまふな)

螢蘭は昴摩の背をかるくおすと昴摩にいつた。

「そこにたつて。まえだけみていろ」

「え？ ああ」

昴摩はいわれたとおりそこに大人しくたつ。螢蘭は不敵にほほ笑むとすううと息をすいあげる。

「かえつたぞ」

そう叫んだ螢蘭におどろいて昴摩はすこしふくつく。それからしばらくして紅菜が昴摩に飛びついた。紅菜は昴摩を寸前のところでたすけたのだ。

「な、な、なん」

昴摩は自分のいたところをみて声にならない声をだす。紅菜はたちあがると昴摩にあきれたような目をむけていった。

「なにをぼーとしていたんだ。危うく死ぬところだつたぞ」

空から大きな大きな朱色の門が降つてきたのだ。門が地面に落ちたときの砂埃と地響きがもうもつとたちこめ、あたりに響きわたっている。そして、その朱塗りの門がある場所は昴摩がたたされたところ。

「いやーん、紅菜、大丈夫だつた？」

螢蘭は紅菜に抱きつぐ。螢蘭と昴摩のやつとりをまつたく知らずにいる紅菜は螢蘭に注意するようになつ。

「師匠、ちゃんとまわりをたしかめてからにしてください。危うく死ぬところでした」

「ごめん、ごめん。いつも一人だからうつかりしてたの。許して「もう、しかたないです。今度はちゃんと確かめてくださいよ」

「うん、わかつた」

昴摩はそんな二人をみながら言葉がでない。そして、なんども門と門がふつてきた空を見る。そうしてみると螢蘭と目があつた。螢蘭は昴摩に冷たい視線をおくるとけつと舌打ちしたのだ。しかも、紅菜にはきづかれないと。

その残忍な視線に昴摩はぞつとする。どうしようもない圧倒的なものに命を狙われてしまつた獲物が感じる悪寒。

（お、オレ殺される。なにかしたか、あのお方に・・・）

“お方”といつている時点で昴摩は弱者だと認めてしまつてはいる。

そんな昂摩をおいて門はひらいた。いつまでもすわりこんだままでたつことのできない昂摩に紅菜が声をかける。

「昂摩、こつまでやうしてこる。はやくこぐれ」

「お、おう」

紅菜の言葉になんとか返事をかえすとなんとかたちあがる。足がまだ震えていてがくがくとして歩きにくい。それでも、なんとか紅菜のところまでいった。

考えるだけでも恐ろしい。紅菜が助けてくれなかつたら今頃、自分はあの門の下敷きになつて紙よりもうすくなつっていたかもしない。その恐怖に手がふるえている。それにきづいた紅菜が昂摩の手をにぎつた。

「怖かったのか？」

そういうて紅菜はほほ笑む。その顔に手からつたわる紅菜の熱に昂摩の震えがおさまり、心にも安堵がやどりはじめる。もつと安心したくて昂摩は紅菜に手をのばそうとしたとき凍りつくる。

（ひつ）

螢蘭がものすじこ形相で昂摩たちを睨みつけていた昂摩はのばそうとした手をゆつくりとひつこめる。それをみて螢蘭の表情が紅菜にむけるものへもどつていく。螢蘭は紅菜の手をひっぱるという。

「ずる~い。私とも手つないで」

螢蘭はそういうて紅菜を昂摩からはなしていつてしまつ。紅菜は螢蘭にひっぱられるように門をぐぐつた。

昂摩はある確信をいだく。まちがないない。あのお方の行動の中心は紅菜だ。紅菜にちよつかいをだすやつ（とくに男）を標的にしているのだ。つまり、紅菜のそばにいる昂摩は螢蘭にとつて憎悪の対象でしかない。

ひらいた門のなかは白くかすんでいるだけでその先がないようにおもえた。そんななかに螢蘭と紅菜ははいつていく。一人が門のなかにはいつていったのを確認するように門がゆつくりとしまりは

じめる。昴摩はあわてて門のなかに飛びこんでいった。

門のなかは派手だつた。

金銀、朱塗りの建物。屋敷へと白くまつすぐのびる道には一〇〇人の女官が道をはさむように頭をさげてたつていて。そして、女たちは頭をさげたままいつせいに主人を迎える言葉をいつ。

「旦那様、お帰りなさいませ」

螢蘭はそのなかをすすんでいく。紅菜もなに」ともないかのようすすんでいった。派手なものの大好きな螢蘭は何をするにもど派手でここで過ごしたことのある紅菜はもう慣れている。一方、昴摩はその光景にあっけにとられる。紅菜の屋敷も贅沢で大きいものだがここまでではない。ここにくらべれば紅菜の屋敷がただの民間のようにおもえる。

「紅菜様、おかえりなさいませ」

そういうて一人の女官がでてきた。螢蘭はその女官に命令する。さつきまでのふざけた雰囲気はどこかくいつて『旦那様』と呼ばれるにふさわしい雰囲気をかもしだしている。

「紅菜に召し物を」

螢蘭は紅菜にむきなおると紅菜の顎をくいつとあげていつ。

「このままじや、紅菜の可憐さが半減してしまつじやない」

なれている紅菜ははい、はい、といつ感じで螢蘭からはなれると女官にいつた。この屋敷にすんだいるのは螢蘭だけじやない。

「姉様はどこにいる？」

紅菜が姉としたつている菜稚琉なぢるもいるのだ。

「菜稚琉様は奥の間でお休みになられていてますよ。さあ、まずはお召し物を」

そういうて女官は昴摩をみると昴摩にも召し物をかえるようこう。

「そちらのお方もこちからびつわ。お召し物を」用意いたします」女官にうながされて二人は召し物をかえにいく。それについていじつとした螢蘭に紅菜はいつた。

「昴摩の着替えでも手伝うのですか？」

「まさか、紅菜の着替えを手伝うにきまつてゐるじゃない」

「師匠はいいんです。はやく、師匠ももともとにもどつたほうがいいんじゃないですか？姉様がおきたらどうするんです？」

螢蘭は菜稚琉の名前にあつさり退散する。昴摩は用意された直衣に着がえながらきいた。几帳ごしに紅菜の衣がする音がする。

「あのお方は何者なんだ」

昴摩の言葉をききながら紅菜は裳の小腰をむすんだ。髪をとげりとした女官に紅菜はかるく手で拒否する。そして、そのまま。

「師匠は桜雅の守り神のよくな人だ。といつても人ではないらしいけど、私もあり詳しくはしらない。一族が滅んだあと私はここに運ばれて術もなにもかもここで教わった。師匠は兄上のよくな人かな」

（兄上？姉上？じやなくて？）

そんな疑問を感じながらいると紅菜がはいつてきた。紅菜は昴摩に櫛をわたすとすわる。わたされた昴摩も紅菜の髪にふれながらすわった。紅菜の髪に櫛をとおしていく。とぐ必要がないようにおもえるほどなめらかに櫛が滑つていく。

「人間みたいだぞ。天人にはみえないし」

男に髪をとがせる行為はその男のものになつた証。紅菜にはそのつもりがないのかもしけないが昴摩はどうしても意識してしまう。はじめて紅菜の髪にふれたときのようにもう胸がうるさく鳴ることはないが、それでも、いまだに特別な感情がわいてくる。独占欲が満たされる独特的の高揚感。

「私もよくわからん・・・・でも、師匠とは仲良くなってくれ。私の大切な家族なんだ」

紅菜の言葉に昴摩は「ああ」とこたえた。紅菜の大事な家族なら好かれたいし仲良くしていきたい。嫌われているけどなんとかいい関係になるように努力してみよう。それに、自分には家族と呼べるもののはなかつた。紅菜の家族に自分もいれてほしい。

蒼は紅菜のいない屋敷で円融を相手に酒に舌すつみをうつっていた。春の夜、この屋敷でのむ酒は絶品だ。紅菜のためにもつてきたものには手をつけずに紅菜がのみのこしていつた酒をのむ。

杯にうかぶ桜はまだまだかたくどじた薔のままだ。それでも他の草花が煌びやかせいかきにならない。もともと蒼は花より団子派だから、桜がさいてなくて残念だというきもちにならない。

紅菜と出会うまで自分がこんな時間をするようになれるとはおもいもしなかった。春の夜酒は贅沢で優雅だけれど紅菜がいないとやはりものたりない。

「菜稚琉様に会いにいったのか？」

紅菜がわざわざでむいたとはおもえない。ああみえて紅菜は意外と出不精だから理由がないとこの屋敷からでていくことはない。屋敷からでるとすれば仕事か個人的な用事があるのかだ。しかし、菜稚琉に会うためならわざわざでむくこともある。

「いえ。今回は螢蘭様にたのまれたんですよ。仕事かえりに会いましてね」

円融の言葉に蒼はふうんとこたえる。そして、さきをつながすよう視線をおくつた。螢蘭は紅菜を溺愛していて、紅菜に悪影響をおよぼすものは容赦なく排除する人だ。

「あつたのはたまたまというよりも待ち伏せされていたというほうがたらしいですね。あの人にたのまれると断るのが大変ですから」のまれましてね。あの人にははと愛想笑いをかえした。性が男であるいじょう螢蘭に逆らうことは死を意味する。螢蘭は死ぬほど男が嫌いなのだ。そのかわりのように無類の女好きでとくに美女は大好物なのだ。

そして、菜稚琉と紅菜をこよなく愛している。菜稚琉も紅菜に負けず劣らずの美人で螢蘭が唯一頭があがらない人なのだ。

「だから螢蘭様のいうとおり紅菜様に無理やり仕事をおしつけて外にだしたんです。もちろんそれだけでは昂摩殿にまかせて自分はの

んびりしているでしようから、白瞑酒を餌にして仕事場にひきずりだすことになつていてるんですけど、うまくいつているかどうか

円融はあいかわらずよめない顔で笑つていて。白瞑酒のことは蒼も紅菜からきいたことがあり、紅菜が死ぬまでにのみみたいといつていた。妖かしののむ名酒らしいが、いくら紅菜のためとはいえ、ただの人間の蒼が魔の巣窟へいくことは自殺行為である。

「紅菜がそんなもののんで大丈夫なのか？腹壊したりしないのか？」はじめてきいたときにもおもつた疑問を円融にぶつける。あのときはあまりにも紅菜がうつとりと夢現のようになすから突つこめなかつたのだ。

「大丈夫でしょう。なにより体にわるいものをの人たちがのませるとはおもいませんし」

「まあ、それもそうだな」

円融の言葉に蒼はそうこたえると薺のうかぶ杯に欠けた月もうかべた。今日の宴にはかけた月がよくにあう。主賓のいない宴には欠けた月をうかべてのむのがちょうどいい。

あの方がなにをかんがえているのかとうていわからないが、紅菜のためにならないことはけつしてしない。これだけはたしかなことだつた。彼らは紅菜のためにいると円融からきいたことがある。あまり詳しいことははなしてもらえなかつたが、はじめてあの二人がこの屋敷にきたときにはうつしていっていた。

(しかし、紅菜の飼い魔。いまごろ死んでるかもな)

自分のかんがえにあのときの恐怖をおもいだして蒼は身震いした。けつして他人の心配ばかりしてはいられない。とくにあの人のまえでは自分のようく紅菜に懸想を抱くものは細心の注意をはらつて紅菜にせつしなければならない。もし、一瞬でも間違えると……

そんなことをかんがえているときだつた。突然、胸にしまつていた紅菜の札がその力をうしなつた。『袋』と書かれたその札からは物を收めきれなくなり、すべてはきだしてしまつ。ほかの札をみればただの紙切れになつていてる。

「どうゆうことだ？」

蒼は円融にきいた。こんなこと今までなかつた。紅菜のわたしてくれた札や術のかかつたものは“開”“封”の言葉で力を發揮したり治めたりできる。

「紅菜様の力がなくなつたんでしょうな。私たちも紅菜様の力がいきどりになくなつていますから」

「とゆうことは紅菜の身になにかおこつたのか？でも、菜稚琉様のところにこらんだらう？」

「まあ、お一人のかんがえには我々は理解できないこともありますし。紅菜様に害をおよぼしているのなら昂摩殿もいますしね」

昂摩は紅菜を守ることを重視する。そのことについては円融も柏も絶対の信頼をおいている。きっと自分の命をなげうつてでも紅菜の命を身の安全を優先するに違いない。

（しかし、今回は・・・・）

蒼は不意に螢蘭の姿をおもいつかべた。蒼がみた最後の螢蘭の姿は螢蘭の本来の姿だ。あの姿をみた男はすべてもうこの世にいはずである。自分がこうして生きていらるるのは菜稚琉が助けにはいつてくれたおかげである。蒼にとつては命の恩人である。しかし、菜稚琉に会いにいくことはできない。菜稚琉に会うにはもれなく。（これ以上はやめよう・・・・）

「柏、もつと強い酒もつてきてくれるか」

となりですわつていた柏がはい、はい、といつよつにしかたなしに腰をあげた。みんなよくのむので柏はわかつていてもあきれるしかなかつた。紅菜たちのなかで酒をのめないのは柏しかいない。だからどうしても柏が世話役にまわらなくてはいけない。

蒼は酔わなくてはいけないよつなきがして大量に酒をのんだ。円融とともに春の陽気にのせられてのめるだけの酒をのんでいく。

春は陽気におだやかにゆつたりゆつたりとすぎていぐ。人や動物、鳥や虫も春の陽気には勝てず、浮かれ騒いで日々をすゞす。そんな春の宵を酔いながらすゞすのは至極の幸せにもかかわらず、紅菜の

不在が物足りない。贅沢病だと自分を笑いながら酔いつぶれていく。

舞台のような一枚岩。その眼前には白い煙をはきながら流れる滝。垂直に落ちたところには池がひろがり、川となつて森のなかに流れしていく。池のまわりには幾本もの木々がたち青々と茂る木々のなか一本だけおおぶりな桜が狂い咲いていた。まだ桜の咲く時期じゃない。

桜は池の水面に散りおちてはながされて、ふたたび花を咲かせる。桜だけじゃない。ここには紅葉も何本かまじつていて秋には紅い紅い葉を水面におとして流れしていく。春は薄桃に、夏は生き生きとした緑に、秋には紅く、冬には白く染まる水面は飽きがこないようになつてている。

「師匠、こんなところに来てきて稽古でもするつもりですか？」

着替えをすませた螢蘭はいつものように風変りな服を着ていた。ながい布を首からかけその両端を腹で交差させ腰にまきつけたような衣で、腕は手の甲から一の腕の半分だけを覆つているような袖で足も膝までの布をまき腰にあまり長くない腰巻をまいている。腹部を覆うように板のような六角のあつい布がまきついていて、そこには龍がいた。

紅菜は螢蘭にさそわれてここまできた。もちろん昴摩もいつしょだ。昴摩は自分の身の安全のため紅菜からなるべくはなれるよう歩いている。螢蘭の視線が怖いからだ。

「いい思い出のつまつた場所にきて、そんな顔しちゃだめ」

紅菜のおでこをぴんと弾いていった。派手な螢蘭の領土のなかでここだけがなにも飾りたてされてなく質素だ。ここは紅菜にとつて稽古をする場所。戦い方を力の使い方をおしえられた場所。

「いい思い出・・・滝に流されたり火のうえを歩かされたりましてやあの桜に撲りこまれそうになつたりしたのが、いい思い出ですか」紅菜の言葉に昴摩は意外におもつた。紅菜がそんなふうに修行していたなんてまったく想像できない。もつと自然に子馬がうまれて

すぐにたてるように「ぐぐく」自然に術を使えるようにおもつっていた。ほかの者たちとおなじように鍛錬の成果だとほおもつてもいなかつたことがおかしい。

「いい思い出じゃない」

笑いながらいう螢蘭にあきれたような目をむける。そして、紅菜は背をむけてあのときの桜をみていた。ひときわ大きなその桜は一本だけあり春になると美しい花びらを咲かせつづける。池の水面に散らす花びらの量は一本の桜としては尋常ではなく、散つては咲き、咲いては散るをくりかえす。

「はあ」

紅菜は滝をみながらため息がでる。里がなくなり紅菜があずけられた六年間の半分をここですごした。豪華絢爛なあの本宅にはじめて足をふみいれたのは四年田のことだった。紅菜はあの滝の裏側の洞穴で三年をすごした。洞穴といつても板がひかれ普通の民家のようになつていたが、屋敷にはじめていつたときにはほんとうに驚いた。ここで暮らしていたときはあんなものがあるなんできづきもしなかつたからである。

螢蘭は岩の先端にたつている紅菜にちがづく。なんの警戒もみせずにただ、池をみている紅菜をかわいとおもいながらその背に手をのばした。

「ドン。

「紅菜!」

荒々しく自分の名を呼ぶ昴摩の声に驚きふりかえろうとしたときには紅菜の体はもう宙をういていた。そして、そのままおちていく。

（やはり油断してはだめだな。師匠はなにをするのかわからない）

紅菜がきづいたときにはもう遅くて池のなかにすいこまれるようにおちていった。いくつもの白い気泡が紅菜をおきぞりにしてうえへとあがつていぐ。冷たい池の水に浸かりながら紅菜はこの池にも突き落されたことがあつたことを思いだす。

紅菜をおいかけるように飛びこもうとした昴摩の足をなにかがま

きついてそれを阻止した。たかく飛びあがっていた昴摩はそのまま地面に激突する。

「図々しく追っかけようとしてんじゃねえよ」

紅菜のときとはちがう殺氣のこもった言葉に昴摩は反射的に起きあがり態勢をととのえ耀鬼神に手をかける。螢蘭の手にはいつのまにか鞭がにぎられていた。パツシツといつ無情な音をさせる。

「おまえのような下賤な者が紅菜のそばにいれるはずないだろ」「う

螢蘭の姿に昴摩は驚きをかくせない。豊満な女の体であつたはずの螢蘭の体は鍛えられた男の体になつていた。合理性を求めて鍛えられたその体が衣からのぞく。胸がなくなつたことで衣がゆつたりと着崩れている。それに腹部にいた龍の刺繡がなくなつていた。

「なんで」

昴摩が変貌した姿に戸惑いながらつぶやく。螢蘭は血走った目で昴摩をみつめて容赦のない表情をうかべていった。

「本気でおまえを殺すためにきまつてんだろ」「う

その殺気に昴摩はおもわずあとずさる。あまりにも実力がちがいすぎる。紅菜がいなくなつてその力と凶暴性があらわになつたかのようだ。いや、本来の姿にもどつたせいなのかもしれない。昴摩にはその判断がつかないが、だた逃げなくてはいけないことだけはわかる。

背後には池と谷。昴摩の退路はそこしかない。田のまえには一切の退路はなく、幾千、幾万もの刃がむけられている感じがする。戦うこととは懸命ではない。

（戦えない・・・退路は・・・）

一瞬、視線が後方を見る。螢蘭はそれをみのがさない。昴摩が逃げようと動こうとした瞬間、なにがおこったのかわからなかつた。きがついたときにはもう遅かった。手足を岩の戒めでしばられて動けない。たおれることすら許されない状態になつてしまつた。

（しまつた）

戦いのなかで自分の行動を予測させるなんて初歩中の初歩の失敗

だ。行動するまえに視線なんぞおくつてしまつた自分がうらめしい。しかも、動きをふうじられて自分の運命が相手にゆだねられてしまつたもどりせんだつた。きっと拷問よりも地獄よりもひどくあつかわれて殺される。

「一曰みたときからきにいらなかつたんだ。紅菜におまえの匂いが染みついている。私の大切な子をおまえのような下世話なものが触れることすら許されはしないというのにだ」

ふりあげられた鞭がしなる。鞭がいきているかのように昂摩に容赦なく襲いかかる。わざと加減したその力が苦痛をながびかせることをものがたつていた。

（なんとか、いきて紅菜に・・・ツ）

振りあげられる鞭に悲鳴をあげるよつな無様なまねだけはしない。それは長年、戦いのなかに身をおいてきた自分の誇りだつた。それに、紅菜のそばにいる自分が無様な姿をさらすわけにはいかない。紅菜の汚券にかかる。唇を噛みしめて声がもれないように必死だつた。

「余裕があるじやん。悲鳴のひとつもあげないなんて・・・生意気なんだよ」

噛みしめた唇から血がながれる。鞭がたかくあげる。

「うわあああああ」

容赦ない拷問に昂摩は叫び声をあげさせられる。血で視界が赤く染まり力のなくなつた足はたおれることも許されず、岩の戒めに体重がかかり圧迫感と痛みがあつた。しかし、それをうわまわる蠻蘭のあたえる苦痛にきがどびそうになる。

「そう、もつと苦しめよ。そりじやないと罪の重さもわからないだろ」

昂摩の喉は悲鳴でもう声がかすんでいた。それでも、生理的に反応するかのように声がでる。昂摩は気絶した。なんどもなんども攻められ罵声をあびせられても、最後まで紅菜のもとへもどることだけをかんがえて意識をなくさないようにふんばつたのだが。

「一刻ももたないくせに紅菜を守ろうなんておこがましいんだよ」

昴摩はつすれゆく意識のなかで螢蘭の最後の言葉をきいた。完全

に意識をなくした昴摩の体の戒めをとく。その額に印をやどりす。

それは咎人の証を刻みつけるように。耀鬼神は姿をかえる。

昴摩の体を回収するために鬼の物の怪がきた。鬼には馬に昴魔をのせるとそのまま本来あるべき場所にかえつていった。

ほんとうに殺してやりたかった。しかし、これがやつとの取引だつた。昴摩にかけられている紅菜の呪縛をとり妖かとしてかえす。そのかわりに未来永劫、紅菜にはちかづかないこと。

「もしものことがあれば、やつら一族を滅ぼしてやる」

螢蘭は昴摩がながした血をみながらつぶやいた。昴摩のながした血は結晶になる。紅菜の呪縛が形になつたものだ。螢蘭はそれを拾いあげるとそつと口づける。昴摩にほどこされた印とおなじものが浮かび結晶の真ん中に刻みこまれる。

その頃、紅菜は池のなかにいた。池に体が沈んだ瞬間、体の力が奪われていった。浮上するための手足の力すら奪われて紅菜は池にしずんでいるしかなかつた。池に術がかけてあることに落ちてしまふまできづかなかつた。きづいていればこんなふうにすんなりと水に触れるようなことはしなかつたのに。

（はねかえせない）

紅菜はなんとかその術をはねかえそうと必死になつたが、必死になればなるほど術は紅菜から力をうばつていく。そして、それと同時に進行のように紅菜の細い首に水があつまり結晶になつた。意識を保つ力も奪われ、口から気泡をはきだして意識をうしなつた。

「まったく人が寝ていたら・・・」

ふわりとした髪をした女性はそう呟くと箇笛を口にあてる。ピイと甲高いみじかい音に髪飾りから管狐があらわれた。管狐は主の意思にしたがい、池のなかにはいると紅菜の体を池のなかからひきずりあげた。

特別な水だから溺れるようなことはないが、それでも、池に力を

奪われて紅菜は消耗していた。そして、首には青い水面のような石が輝いている。その石は完全に紅菜の力を封じてしまっている。

「螢蘭にはあきれるわ」

そういうて、紅菜の頬にふれた。私たちのかわいい大切な紅菜にここまでしてまであの妖かしの坊やをひきはがしたかったといつことなのだろうけど。

「う、じつま」

無意識にでも紅菜が妖かしの坊やの名を呟いたことに優しくほほ笑んでそっと髪をなでた。紅菜の回復を助けるようにすこしだけ気をわけてあげる。すると青ざめた肌が血の氣をとりもどし、紅菜の呼吸が穏やかなものになる。

ひんやりと寒い。背中は硬くてじんじんとしている感触をつたえた。いきていののか確認するようにかすかに一指し指を動かす。そして、自分の意志どおりに動いたことにほつと安心する。息を吸えば吐くこともままならないような痛みが体の中心からひろがり、それでも、生きるために呼吸を吐いては吸い、吸っては吐いた。

その痛みに奇跡を感じながら、昂摩は生きていることを実感する。確実に殺されるとわかつていながら最後まで心は生にしがみついた。そして、その生がまだ自分の心臓に宿っていることはどんな奇跡よりもすごいことのようにおもえる。なにがどうなつて生きているのかわからないが、いまこうして呼吸ができることがすべてだ。

（耀鬼神・・・・耀鬼神、ちかくにないのか）

なんだか愛刀の名をよぶ。そばにいてくれるのなら返事がかえつてくるはずだが、返事はなかつた。やはり、武器をちかくにおいておくよくな間抜けはいらないということだ。武器はない。体は動かない。

（足音・・・・・）

自分にちかづいてくる足音にきづき昂摩は目をあける。左目は腫れあがつてかすかにしかあけられない。いまなら生まれたての人の

子でもとどめをさせるだろう。もしかしたら自分は一生このままなぶりつづけられて地獄のような拷問をうけるのだろうか。それでも、死ぬよりはましだとおもつていて自分にふつと笑いがこぼれる。

生きていれば死にさえしなければ紅菜のもとへかえる機会がおとずれるはずだ。そんなおもいがどんな状況でもいい、自分の命をながびかせてくれと祈りすらささげている。妖かしは輪廻の輪からはずれている。死ねばもう会えない。

首を足音がするほうにむけたいがそれもできない。首が動かないかわりに激痛で声がもれた。

「くつ」

「派手にやられたな、夜叉よ」

頭上からふつてきた太い男の声に昴摩は嫌気がさす。そうゆうことか、というすべてをみきつたおもいと納得。これは仕組まれたことだつたようだ。親父と昴摩をよくおもつていなイ蟹蘭の策略にまんまとひつかかり、ひきはがされてしまった。

「おつ・・・つツ」

（くそツ、声もでねえ）

昴摩はただ必死に呼吸をするしか許されない自分の体の状況に苛立つ。“夜叉”その名は自分が妖かしであつたときの名だ。紅菜に出会い、紅菜に使役されると決めたそのときに捨てた名。もう一度と呼ばれるこのないはずだつた名だ。

「夜叉、わが息子よ。そこでゆつくりと自分の立場とほんとうの姿をおもいだせ。おまえはこの鬼族の王になる男だとゆうことをしつかりと自覚しろ」

“夜叉”その名をあたえられるのは鬼族時期王の証。

頭上から偉そうな親父の声がふつてくる。けつたくそわるいその言葉にいいかえすこともできないことが悔しい。

親父の存在にもつときを配るべきだった。昴摩は妖かしの三大貴族の一派、鬼族の王子だ。といつても一六番目で本来なら王子といつてもあまり権限はもたない。しかし、妖かしは力がすべてだ。昴

摩は一〇八人いる兄弟のなかでも格別に強かつた。いま目のまえにいる鬼族の王である親父ですらかなわないほどの潜在能力を秘めている。そのため、昂摩は幼い頃から母からの期待を受け修行や戦いの日々にあけくれて一〇も過ぎないうちに戦いの最前線で戦いつづけた。母親恋しいそのときを血の戦場ですごした。

そんな昂摩が人間の女に使役され心ごと奪われてその女に一生をささげるなど許されるはずもなかつた。たつた五〇年たらずの人の使役なら一時の火遊びと許されるだろうが、昂摩は未来永劫の契約をむすんでしまっている。つまり、紅菜が生まれ変わるたび昂摩はそのそばに仕えなくてはいけないのだ。

（オレはその名を捨てたんだよ）

そう心のなかでいいかえすしかなかつた。そして、これから自分がどうすればいいのか考える。なんとか紅菜のもとへ帰らなければならぬ。一、三日で歩けるようになるはずだ。一瞬でもはやく体が治るよつに動かないほうが賢い。昂摩はそこまでかんがえて意識を手ばなした。すう、すうと寝息をたてる。

これでも大事な跡取り息子だ。命の危険がなくなつたことに昂摩は怪我を治すことだけに集中することにきめた。なにもかも、体が治らないことにはどうしようもない。動くのはそれからでもいい。

紅菜の命に至急かかわることではないなら、あたえられた時間を有效地に使わなくてはならない。紅菜のもとへもどることで殺されるとしてもそれでも、昂摩は紅菜のもとにもどりたかった。

唐の珍しい陶器が懸盤のうえにおかれている。唐らしい文様がかれたその陶器は茶をのむためのものだ。唐でも上流階級の者しか口にすることのできないその茶とゆう飲みもの。この国ではまったく馴染みのないものだつた。

「いつまでもそんな顔をしていないで。さあ、唐菓子といつしょにどうぞ」

そういつて菜稚琉は紅菜にお茶とともに唐菓子（唐の揚げ菓子）

をすすめる。紅菜はむすつとした顔のままお茶に口をつける。お茶はあまりにも貴重なもので、口にできず、はじめてこの茶とこうものを口にしてから紅菜はこの茶という飲みものが大好きだつた。

「螢蘭、あなたもいつまでもそんなふざけた格好をしてないで、もとにもどりなさい」

菜稚琉にいわれて螢蘭は豊満な肉体を本来の男の体にもどす。女のなりを好んでしているが本来の性は螢蘭が大嫌いな男なのである。女のなりをしているとどうしても戦いのときには劣ってしまいます。だから、こうして菜稚琉のまえか殺すと決めた相手のまえでしかこの姿にならない。

「女の私もなかなかいいだらう。もちろん、菜稚琉や紅菜には適わないけどな」

螢蘭は徹底していく男のときには男の話し方、女のときには女の話し方をする。だからか、どちらの螢蘭であっても違和感を覚えることはない。

「あまり力を無駄につかうのはどうかとおもつのよ。紅菜にもこんな術をしかけて、可哀想じゃない」

螢蘭が菜稚琉の手の甲に口づけているのをきこにせず、菜稚琉はちくちくちくと釘をさす。しかし、螢蘭も長年のことだ。こたえているわけでもなければ悪びれた様子もない。それどころか機嫌のわるい紅菜をもるともせず紅菜の手にも口づける。

「紅菜なら私の気持ちがわかつてくれるだろ?」

紅菜は無言のまま螢蘭に口づけられた手の甲をふきとる。螢蘭はそんな紅菜の姿に衝撃をつけたように菜稚琉の胸にとびこんでいた。

「菜稚琉よ。私たちの可愛い紅菜があんなことをするようになつてしまつた。きっとあいつの悪い影響をうけてるせいだ」

「あなたが紅菜にあんなことするからでしょ。冷たくされて後悔しているのなら今からでも紅菜のお気に入りを回収なさつてはいか

が

螢蘭は菜稚琉の膝の「ひざ」に寝こながるとふんといつ顔をしていう。「やだね。残念なことに後悔していないからな。だいたい菜稚琉だって紅菜をあんなどこの馬の骨かもわからない者にやれないだろう? あいつも紅菜とのこと認めて欲しかつたら命かけてむかつてくるのが筋だろう」

(ほんとうに殺してしまつくせに・・・・)

そんな螢蘭に菜稚琉は溜息しかでてこない。紅菜にはおぐりかえしたとしか説明していないから紅菜自体はあまりこまかい彼の状態がわかつていい。しかし、菜稚琉はちがう。螢蘭が彼にどんなことをしたのかわかつている。昔、紅菜の屋敷にいつたとき蒼という少年にしたことも菜稚琉はしつていた。

しかも、今回は丁寧に紅菜にも鬼の坊やにも術までかけてひき離している。紅菜は自分にかけられた術が靈力を抑えるものだとおもつていてるようだが、その他にも鬼の坊やとひきはがす力も秘めている。

「だからといつて紅菜にあんな術をかけるのは反対です。力まで封じてもしものことがあればどうするつもり? 紅菜は私の大切な子なのよ」

わざと“私の”を強調して菜稚琉は自分だけが大切にしているようについた。螢蘭にたいしての強烈な皮肉である。しかし、そんな皮肉も螢蘭の面の皮の厚さに弾き飛ばされてしまつ。

「大事な娘を他の男にとられる父の気持ちがどうして、菜稚琉にはわからないんだ。俺は俺は悲しいんだよー!!」

そういうてわざとらしく菜稚琉の膝にしがみついておん、おんと泣いてみせる。もちろん、この場にいる誰もが嘆泣をかくつている。紅菜はそんな螢蘭の姿を見てはじめて口を開いた。昴摩とひき離されたとしつてから紅菜はいつさい話しをしようとはしなかつた。

「・・・・師匠」

「紅菜・・・・・」

螢蘭はそういう手をのばしてきた紅菜の手をにぎると娘がやつと父の心がわかり和解したときのように紅菜の名をよぶ。この場面だけならすこし感動するかもしれない。

「昂摩をどこにやつたんです」

その言葉に途端に螢蘭は紅菜に向つぽをむける。それでも、紅菜は螢蘭にとつ。

「どこにこつたんだす」

「・・・・・」

「私のものを勝手にどにやつたんです」

「・・・・・」

「師匠つー」

「・・・・・」

紅菜がなにをいつても無言である。こいつなつてくると言葉は不毛なものになつてしまつ。菜稚琉は螢蘭と紅菜みてらちがあかないことを悟る。紅菜も本気なら螢蘭も本気なのだ。

「はあ、人が寝てゐるあいだに・・・」

菜稚琉はそう咳くと一人をみてゐるしかなかつた。菜稚琉自身も鬼の坊やとのことをよくおもつてはいない。しかし、紅菜が悲しむ姿は極力みたくないがた。たのまれて紅菜をあずかつたあの日からずつとずつと大切に愛情をかけてきたのだ。

その紅菜の相手がまさか妖かしのそれも鬼の時期王だとはおもつてもいなかつた。鬼は紅菜の一族を滅ぼした者たちだ。あのときの悲惨な姿をした紅菜をみた菜稚琉には紅菜が妖かしと相容れるとは想像もしていなかつた。あの日の紅菜は悲惨なものだつた。だから、安心していたというのに。やはり、紅菜のなかに眠るもうひとつの部分がそれを求めるのかもしれない。紅菜はなにもしらないし、それでいいというのが一人の考えだつた。

(けれど・・・・・)

菜稚琉はそこまで考へると冷めてしまつたお茶に口をつけた。冷

たくてもそれなりにおいしいとおもつ。螢蘭と紅菜はいまだに不毛ないいあいをしていて、それを聞きながら菜稚琉は紅菜の身をあんじた。

紅菜はあれから機嫌のわるいまま。いつもなら螢蘭か菜稚琉のそばで眠るのにそれもしない。幼い頃から力の強かつた紅菜は守つてくれる者のそばでないと眠ることができなかつた。いまはそんな必要はないのだが、それでも安心できる者のそばで眠るのは癖になつてゐる。つまり、安心して眠れないのである。

「紅菜、お茶でものんでも落ち着きなさい」

ぱろぼろの紅菜にいつもどおりお茶をせしだす。術もつかえない、無力な赤子のような状態で紅菜は屋敷から脱走しようとする。しかも毎日、毎日だ。しかし、螢蘭に捕まりにじつびじくやられては菜稚琉のもとへもどつてくる。

今日もそうだつた。

紅菜は自分の首についた水の色をした石を忌々しくおもつ。これさえなければ靈力を駆使して螢蘭をまき今すぐにでも昂摩のもとへとんでいくのに。だいたい、こんな物までつけられる意味がわからぬ。横暴だ、変態だと螢蘭をなじつてはじつびじくやられるのだった。

「こんなにぼろぼろになつて、せつかく綺麗で可愛い顔が台無しよ」
菜稚琉はそいつて紅菜の髪についている葉をとる。優しい眼差しをふことよけると紅菜はぶすつとしたままお茶に手をのばした。葉の甘い香りがたちこめる。すつきりとした渋みが口のなかをとおると追いかけるように香りが鼻からぬける。

菜稚琉は紅菜をみながら螢蘭に感心する。服には泥がついたり破れてしまつたりと表面的にはぼろぼろだが、紅菜自身には傷ひとつついていない。まあ、さすがにところどころちいさな痣ができるしまつているが、こんなものすぐに治つてしまつ。それだけきをつかつて螢蘭は紅菜を相手してこゐるところじだつた。

そんな紅菜の様子に菜稚琉は子をあやす母のように優しく髪をすきながら話しかける。紅菜が大好きなお茶をのみながら大人しくしていることが菜稚琉にはおかしい。菜稚琉の目いうつる紅菜は甘えん坊で意地つ張りで負けず嫌いでも、弱くて優しい。

「お茶はね。万病の薬なのよ。炎帝神農つていう医術の神が人におしえてくださったものなの。眠たいときには眠氣をとり、しなければいけないことを助けてくれる。怪我をすれば怪我で熱がでるのをおさえてくれる。熱がでても熱をさげてくれるし、心も落ちつかせてくれる」

紅菜に“ね、そうでしょう”といつよいに笑いかけた。紅菜はしかたなく口をひらく。

「どうして閉じこめられなきやいけい。靈術がつかえられなくても体術も剣術もできる・・・靈術がなくてもそのへんのやつに負けるわけない」

「でも、上には上がいるのよ。もしものことがあつたら心配だから私は紅菜が螢蘭の術を破れるまでそばにいてほしいわ」

「・・・姉様が教えてくれたから大丈夫だ」

いじけながらいう紅菜に菜稚琉は困った顔になる。負けず嫌いで無力な紅菜に体術を教えたのは菜稚琉本人だ。きちんと教えこんでいるだけあって紅菜の右にでるものはそうそういない。けれど・・・「でも、私に勝てますか？私だけではない、螢蘭にも勝てないあなたがどうやって妖術も体術もある妖かしに勝つんです？」

菜稚琉の鋭い指摘に紅菜はふたたび黙りこむ。そんな紅菜に助け舟をだすように条件をつけた。

「紅菜、あなたが私を膝まつかせることができれば脱出に手をかしてあげます」

その条件に紅菜は思案するような目で菜稚琉を見る。その顔に菜稚琉は“さあ、どうする？”と挑発的な目でみつめる。紅菜は負けず嫌いで単純などこがあるからきっとこの挑発からは逃げられない。

「私が勝つたら師匠もとめてくれる？」

紅菜は菜稚琉のようすをうかがうようにいった。

「螢蘭に紅菜が捕まらないように邪魔してあげる」

「首のもとつてくれる?」

菜稚琉はにつこりと笑いながら紅菜の質問にこたえる。

「ええ、もちろん。そのかわり私に“参った”といわせるのが条件ですよ」

その言葉に紅菜は「やる」とみじかくいった。菜稚琉はそんな紅菜の頭をいい子、いい子、となでる。やつぱり可愛い紅菜の反応に菜稚琉は満足だった。

しかし、螢蘭との組み手のときの紅菜の身のこなしをみているとそうとう鍛錬をさぼっていたのがわかる。ここにいたときのほうが身のこなしがいいぐらいだ。まずは昔の勘をとりもどしてもらわなといといけない。

螢蘭が都の事件をみにいつたときについたが、紅菜は自分の靈力だけにたよった戦い方をしていてそのほかが疎かになっている。鍛錬をしていなくても普段の戦いのなかで靈術、体術を駆使した戦い方をしていればここまで腕がなまることはなかつたのに。

(これは、剣術から体術まで一から鍛えなおさないといけないかな)紅菜をみながらこれから算段をたてる。剣術はまだ戦いのなかでつかつてているからいいかもしけれない。けれど、直接的な攻防をさけ力にたよった戦い方をしていたらいいしょである。

靈力は精神力、体力ともによく消費する。それだけにたよった戦い方は不利なのである。よつて、体術、剣術の技術も戦いのなかでは大きな役割をもつ。なるべくそれで倒せる相手なら力の消費をさげる意味でも大切なである。

しかし、紅菜には力が尽きるという感覚があまりよくわからないのだろう。そのため紅菜は生まれもつての強い力を惜しみなくつかう戦い方をしていた。一瞬でおわるような戦いならそれでもいい。しかし、長期戦になればそうはいかない。力が尽きることもあるのだ。靈力だけではない。体力や精神力にも限りはある。紅菜が限界を感じ

じるとなれば靈力や精神力よりも体力のほうだらう。だから、よけいに靈力にたよる戦いをするのかもしれないが。やはり、雑魚は剣術、体術だけでなるべく倒すべきである。

實際、昴の事件のときには体力がつきてしまい柚羅乃に助けてもらつてゐる。もし、柚羅乃がでていかなれば螢蘭が始ま末をつけていた。しかし、そうなると柚羅乃のように穩便にはおわつていなかつただろう。昴摩を嫌うつよつに螢蘭は昴のことも殺したいぐらい大大嫌いなのである。

（それと螢蘭のよう力の無駄つかいをなおさないと）

紅菜は唐菓子を無邪気な顔でたべてゐる。きっと、勝てたらでらることにきをよくしてゐるのだろうが、そう簡単にいくだろうか。

「姉様、お茶なくなつた」

紅菜のお茶を催促する言葉に菜稚琉は「はい、はい」といつてお茶をいれる。お茶をうけとつた紅菜は幸せそうな和やかな顔をしてお茶をすすつてゐる。紅菜には自信があつた。ここをでてから五年ずっと困難な戦場の最前線にいたのだ。あのころよりずっとずつと強くなつていてるにきまつてゐる。まして、昴の事件は天もからんでいたというのになんとか乗りきつたのだ。

経験値もあがつていてし剣術ではここをでてから誰にも負けていない。円融にも柏にもひけをとらないのだから大丈夫だというへんな自信があつた。螢蘭のよう力をつけられればかなわないが、菜稚琉のように力をまったくつかわない人なら勝機があるにきまつてゐる。

昴摩は五日間の眠りから目覚めた。目を開けると眠る前にみた天井がはつきりとみえる。腫れあがつていた左目はすつきりと治つていて視界も良好だ。息をおもいつきり吸つてはいても肺を中心ひろがつていて激痛はもうない。

（骨もくつついたかな）

そうおもいながら手ですこし強めに肋骨や肩、腕に腿や骨盤をお

さえつける。痛みはない。念のためさうに強くおさえる。大丈夫だつた。昴摩はそれにきをよくする。

「よつと」

勢いよく飛び起きる。五日間も寝つづけていたせいで体がかた違和感を覚える。体の筋を意識しながら体をねじつたり曲げたりして伸ばしたりほぐしたりをくりかえしていく。そうして、いい感じにほぐれたら、今度は体術の型をたしかめはじる。突きや蹴りを交互にして不備がないかたしかめる。良好だ。

「さてと・・・」

自分が閉じこめられている牢の柵を見る。柵の前には鬼が一匹たつていた。見張りの鬼自体は昴摩の敵ではない。問題なのはこの牢の柵だ。昴摩がいた頃はこの牢にこんな石がはめられていなかつた。力があるのを嫌う石 無蝕限

それだけじゃない。もうひとつになるとがある。紅菜との契約がなくなつていて。昴摩の体は紅菜と会つまえにもどつてしまつていて。つまり、このままでは紅菜のそばにはいられない。

いろいろと問題はあるがなんとか紅菜にあいにいかなければいけない。今の昴摩は高い高いそれも難攻不落の塔のうえにいる愛しい姫君を助けにいく王子の気分だ。

「夜叉」

無蝕限をどうするか悩んでいると自分を呼ぶ声がした。顔をあげると母がいた。

「母上・・・」

昴摩にとつて幼いときから絶対的な存在だった人。そして、それはいまでも。

母は鬼族の王、黒鬼魔王の九八番目の側室として嫁いだ。すでに一五人の王子がいて、夜叉候補が五人もいるなかに王家とのつながりのためだけに嫁いできたのだった。力の弱い家の者が子を産んでも王になる確率はほぼ皆無。何も求められず、なんの価値もない存在。

そんななか夜叉が生まれた。なんの祝いの言葉もなく王からあたえられた名は“捨棄”いてもいなくてもいいという意味だった。“鬼”の字すらあたえられない。そんなわが子を抱くことも声をかけることもましてや乳をやることもなかつた。しかし、昂摩が一歳のとき、昂摩を虐めていた一〇番目の兄を瀕死状態にまでおいやつた事件があつた。一〇番目の兄は夜叉候補の一人だつた。

それを機会に昂摩への目がかわる。母は昂摩に声をかけるようになつた。大きな期待をかけて王としての教育に熱心になつた。負けることは許さず、勝つことだけを教えこんだ。そして、昂摩はそれから三年、五歳という幼さで王から“夜叉”的称号をあたえられるという栄誉をえた。昂摩は歴代最少年の夜叉となつた。

昂摩が夜叉となつてから母の生活も大きくかわつた。時期王の母として正室とおなじ扱いをうけた。今まで自分を蔑んでいた者たちは皆そろつて頭をさげる。自分の子をはじめて呼んだのは“夜叉”的称号をもらつてからのことだつた。

「夜叉、あなたは私に失望させたいのですか。なんのために私があなたを産んだとおもつていいの・・・母を失望させてはいけません。あなたならわかるでしきう」

自分のほんとうの名を呼んだこともない母親の言葉。それでも、昂摩はこの母のもとで母の人形として育つた。そういうえば、四歳のときの初陣も母があくりだしたものだつた。

「夜叉あなたはいづれ黒鬼の名を受け継ぐ者なのです。人の娘が欲しければ母がいくらでも用意してあげます。自覚をもちなさい。いいですね、夜叉」

それだけをいいのこして母はたちさつた。昂摩はなにもいえなかつた。いまでもあの人呪縛は有効のようだつた。母にふりむいてもらいたい一心で戦場の最前列、血の海をかけていった。しかし、望んだものはあたえられなかつた。それでも、夜叉の称号をえれば母にふりむいてもらえると信じた。

結果はおなじだつた。表面的には母は自分をみてくれるようにな

つたが、それはできのいい人形にむける目だった。きっとこのさきもあの人目の人が自分にむくことはない。紅菜のように自分を満たしてくれる眼差しはここにはないのだ。值踏みする目、妬み嫉妬の目、媚びる目、試される目、そんなものしかここにはない。

いつまでも成長しない自分にあきれて昂摩は目をつぶる。久しづりの母子の対面に予想以上に疲れた。目をつぶれば紅菜に出会うまでの生活が走馬燈のようにおもいだされる。

人形のように意志がなく、いわれたとおりに動き、成果をみせては褒美の言葉をもらう。妬む者には命を脅かされて何度も毒を盛られた。そのたびに自覚がないと母に罵られてきづいたときには体が毒に馴染んでいた。毒が効きにくく体になっていた。

力を試されるように值踏みされるようにだされる戦場で生きて帰るなら勝利をつかまなければいけなかつた。負けることは死ぬことよりも許されはしない。昂摩が勝てば勝つだけ母の身は華やかなものになりその顔に“優越”という笑顔がうかんだ。

つぶされそうな闇のなかに紅菜の温もりを感じる。他の誰でもない。紅菜だけが自分を昂摩単品としてみてくれた。值踏みするわけでも殺意をむけるわけでもなく、ただ、自分という存在をみていた。（紅菜、そばにいてくれ……）

地獄のようなこの場所で一縷の希望を望むように昂摩は何度も何度も紅菜をもとめた。小さい子供が救いをもとめるように昂摩は紅菜に救いをもとめたのだった。

はじめてだつた。自分に暖かい名をあたえてくれたのは。“こうま”と発せられたその言葉の意味を問うと紅菜は「もつとも私に触れ合える名だ」と自分をまっすぐにみた。

今まで自分が誰かと触れ合つことを望んでもあたえられなかつたものの叶わなかつたものそのすべてをあたえられたようなその名の前に昂摩はすべての自分の名を捨てたのだ。もう、“捨棄”とも“夜叉”とも呼ばれることを好まないとその名を捨てた。

「だれでもいい、名をよんでもくれ……」

昴摩は弱々しく呟いた。ここにいるかぎりその名を呼ばれる」とはない。誰よりも紅菜に触れ合える者、ちかい者へあたえられる名。昴摩がはじめてあたえられた温もりの名。

紅菜はあれから脱出をやめ、もつと堅実的な菜稚琉との体術、剣術勝負に精をだしている。しかし、自分の考えが甘かったことを剣を交えれば交えるほど、拳を交えれば交えるほどおもいしらされる。

「それではがら空きになるわ」

菜稚琉はおもいっきり突きをだした紅菜の腕のなかに瞬時にはいりこむ。突きだされた腕をそつと掴むと自分の方にまきあげるようにして放り投げた。

「くつ」

紅菜は空中で無理やり体勢を整えようとしたが、投げられた反動が大きすぎてうまくいかなかつた。腕と肩をぶつけて地面に落ちてしまふ。普通にそのまま抵抗しないほうが衝撃はすくなかった。

「見誤つてはだめよ。そのまま流れにまかせたほうがいい場合もある」

菜稚琉が紅菜の胴体めがけて蹴りをとばす。紅菜は体がとつさに逃げてしまう瞬間にまえにでて菜稚琉の側面にはいろいろとした。しかし、死角から菜稚琉の拳がとんでもくる。見事に命中してしまう。

「くはつ」

胃に直接的な攻撃をうけてその場にしゃがみこむ。大人と子供だつた。何をしても何を真似ても一撃もいれられない。はいったとしてもそれははいったようにみせかけているだけですぐに次の攻撃が紅菜をおそつた。

「体術や剣術は勘や発想力よ。攻撃と守り、それを駆使しておこなう攻防は基本と応用でいくらでもかわせたり攻撃に転じたりできるこれまでのおさらいをしながら菜稚琉は紅菜に説明もまぜて戦う。勝負のはずが、稽古になつてていることが紅菜はきにいらない。菜稚琉に教わったのは基本だけ、あとは柏と円融に教わった。自分の式

に教わるといつのはへんにおもつだらうが。円融も柏も父と母の体の一部を核としている式で、その人間の能力を受け継いでいるから紅菜よりも勝るところがあつてもしかたないことだ。

「剣術、体術にとつてもとも大事なのは力の流れをみると。これがみえないと無理をして体を痛めてしまつと同時にできるひととできないことがわからない」

いやといつほど幼いときに聞かされたその言葉に紅菜はむつとする。わかつていてもできていらない自分がばがゆかつた。今まで完全にできているとおもつていたことがまつたく菜稚琉にはつうじない。つまり、紅菜の技術はある一定の程度をすぎるとまつたく通用しないことをまさまさと感じさせられているといつ現状だ。

「はい、やめ」

ずつとみていた螢蘭がそつこつて一人のあいだにはいつていく。紅菜は涙田になつてている自分の田をぬぐいながらまだ、まだこれからとやる気をみせているところだつた。

「師匠、邪魔しないでください」

「もう、無理だろ」

螢蘭にいわれてはじめて自分の体が悲鳴をあげていたことにきづく。きづけはたつことも不可能と体はぐずれていつた。そして、たとつとしてもうたてない。

「紅菜、おまえずつと体の壺をやられてたことにきづかなかつたらどう? だいたい、五発に一回くらいは壺にいれられてたぞ」

そういうて螢蘭は紅菜の体を抱きあげる。紅菜の体はぶるぶると震えていて自分ではおもうように動かせない。動かない体では相手にならない。それにもう日が暮れてきていた。朝からいままで攻防のしじおしでもう体力的につらくもあつた。

「一生、菜稚琉に勝てないんじやないか?」

螢蘭の意地悪な言葉に紅菜はむつとむくれる。しかし、それがあながち冗談ではないような状態だ。菜稚琉は体力的にもまつたくなつの負荷も感じていないうみえるからだ。いや、みえるだけじ

やないほんとうになにも負荷を感じていないのだ。

「姉様も師匠も化け物だ」

紅菜は負け惜しみをいうとそれをきいた二人は笑いあつた。そんな二人の態度にも納得いかず、それでも、これ以上の抵抗もできずただ、むくれてているしかなかつた。

紅菜の体が自由に動くようになつたのはそれから半刻もたつてからだつた。菜稚琉との攻防で汚れてしまつた戦闘着を脱ぐと風呂にはいつた。頭から爪先まで埃だらけで汚れてしまつていて。

菜稚琉の戦闘着は肩や腹部が露出していて隠しているのは胸だけだ。そこに衣を羽織、腰で縛つてある。足の形にそつてつくられた衣をはいている。戦うときはその羽織つている衣をひきさげてはだけてしまつ。すると螢蘭とおなじように手の甲から一の腕の半分を巻きつけたような袖がでてくる。

紅菜が戦いのときに好んできる直衣は身動きができやすいからだ。しかし、螢蘭や菜稚琉のきている戦闘着はもつともつと動きやすい。それと同時に露出も激しかつた。妖かしもそつだが、螢蘭や菜稚琉の着ている物も風変わりなものだつた。

「師匠、これつて無蝕限」

風呂にはいり食事をおえほつこりとしている紅菜は自分の首にあるものを触りながら螢蘭にきいた。紅菜は実際にみたことがないが、話にだけはきいたことはある。無蝕限は力を食らう石だときいた。なら、自分の力はこの石に食われていると考えるのが自然だ。

「いや、それはただの水」

その言葉に紅菜は怪訝な顔をする。そんな紅菜につけたしたようについて。

「でも、あの池の水だから特別といえば特別だがな」

「無蝕限は靈力だけを食べるわけではなく、靈力や妖力といつしょに体力も食べてしまうから、力のあるものは体力ごと食われてとても動きまわるのは無理よ」

親切に菜稚琉は無蝕限のことを説明する。そして、紅菜に黒砂糖

の塊をさしだした。それともにお茶もだされる。

「じゃあ姉様たちも無蝕限をみたことはないのか？」

「いや、あるよ。私も菜稚琉も」

紅菜に螢蘭はそういうと黒い石をもつてきた。木の実みたいなその石を紅菜にさしだす。紅菜は無条件にその石を手でうけとめる。石にふれた瞬間、ぞわつとした。そして、体の力が奪われる。どうして、これを螢蘭がもつていられたのか理解できない。

「これが、無蝕限。どうだ？首についてのとは全然ちがうだろ？」石をとつさに離した紅菜におかしそうに螢蘭がいった。菜稚琉はそんな螢蘭をかるくしかりながら無蝕限をひるが。やはり菜稚琉もなんともないようだつた。

「もう、こんなことして・・・紅菜はただでさえ疲れているのに」

「どうして姉様も師匠もなんともないんだ？」

紅菜の疑問に菜稚琉はにっこり笑つて説明をはじめた。一人は自分たちのもつてている技術をおしみなく紅菜に教えこんでいる。

「どんなものにも気の流れがあるわ。その流れに自分の気を絡めとられなければ無害なものになる。逆に自分の方から相手の気を狂わせると・・・」

そういうと菜稚琉の掌にあつた無蝕限は塵になり、吹き飛んでしまつた。菜稚琉の手を何度もみるけどどうなつているのかわからぬ。力をつかつたようにはおもえない。

「どういう風になるの」

わかつた？といつよに紅菜の目を覗きこむ。そんな紅菜に菜稚琉はさらに説明をはじめる。紅菜は必死にその説明をきき理解しようとする。力がまったく使えない今の状態を開拓するとかかりになるかもしねない。

「体もそう。気の流れを狂わされたり支配されたりすると自分の意志どおりにならなくなる。紅菜は自然の気を感じたり、妖気を感じたりできるでしょ？それよりもっともつと細かい気の流れを感じようになればできるわ。あとは簡単、ちょっとと狂わせれば・・・」

菜稚琉が紅菜の背中にふれると紅菜の腕が動かなくなる。

「ほりね

(これはつかえる)

そういうてほほ笑んでくる菜稚琉に紅菜はおもつた。剣術や体術だけではいまのままではとても勝てそうにない。この気を狂わす方法を覚えれば菜稚琉にかなうよつになるかもしない。

今からおもえば蟹蘭はこの方法で昴摩の体の自由をうばつたのだ。いまできづかなかつたのは何をするにも力に頼りきつていたから。靈力にたよるとどうしても体力に限界があつた。でも、この方法なら消費しているものはほとんどない。しいていえば集中するための精神力。

しかし、蟹蘭や菜稚琉は呼吸をすうかのよつにじくへ自然にやつてのけた。ということは骨さえつかめば紅菜だつて精神力もつかわずにできるということだ。

活路をみいだせたことに紅菜はきをよくして黒砂糖の塊を口にほうつこむ。口にひろがる甘さが今日の疲れをとりはらつてくれるようだつた。

(まつてろー昴摩。すぐに助けだしてやる)

姫を助けにいく王子のような気分で不敵に笑う紅菜を菜稚琉と蟹蘭は可愛いとおもいながら目をほそめてみていた。なんて可愛いんだろうと二人はおもう。一人にとつてはどんなに大きくなつてもいつまでも幼いときの紅菜のようにおもえる。それと同時に明日の紅菜の戦い方に期待しよう。

紅菜は息をきらして木の陰に隠れている。左手を胸におき、右手には太刀がにぎられている。神経をたかぶらせて狩人の行動を把握しようとすると。

追いつめられて紅菜はあわてて逃げてきたのだ。逃げる」とも戦術のひとつだが、なんとも無様。

あれから十日。紅菜は毎日、毎日、寝るまえに一刻ほど意識を集中させ些細な極々微量の気の流れを意識する鍛錬をこそこよとつんできたのだ。そして、昨日の夜。螢蘭たちの田を盗んでひろつてきた靈石をかるくふれるだけで粉々にできたのだ。

菜稚琉のしたように塵とまではいえなかつたがそれでも碎くことができた。だから、これを実践でつかうことに決めて望んだ対戦だったにもかかわらずこのありますまだ。

気をちょっと操作する術を体術でつかおうとしたが、かなわないとおもうやいなや紅菜はそのまま武器庫に突つこんで太刀を一本つかみとると菜稚琉に襲いかかつた。菜稚琉が武器をもつまえにかたをつけようとしたが、あっさりと側面をつかれ柄を押さえられる。菜稚琉はそのまま紅菜を飛びこえていき武器がたてかけられている場所へととんでいった。菜稚琉の手には着地とほぼ同時に帶刀がにぎられて、鞘ごと攻撃してきたのだ。

それでもなんとかかわしてきたが、あつといつまに稽古場の岩の先端に追いつめられた。これ以上の防御は無理だと潔く逃げることをきめる。そのまま池のなかに飛びこんでいった。そして、いまにいたる。

(姉様はただの帶刀。だけど・・・)

紅菜のつかんだ太刀は靈刀だ。紅菜がいつもつかっている“爛王”とくらべるとかなり見劣りするが、普通にかんがえても靈刀とただの太刀では靈刀のほうが有利だ。

「……」

紅菜はとつさに右にとづぶ。紅菜の体をすつぱりとかくすほどの大木だつたにもかかわらず、きれいにきりたおされる。大木は地響きをならしながらその大きな体をゆっくりとよこしたわる。木がよこたわつた衝撃で羽根を休めていた鳥たちがいつせいに飛びたつた。

「紅菜、だんだんいい反応するようになつてきたわね……それではもうすこし速度をあげましょう」

たおれた木の背後からあらわれた菜稚琉は紅菜にそういうと紅菜にきりかかつた。紅菜はちかくにあつた木にあわててかくれる。（冗談じゃない！ いまでもついていくだけで大変なのにつ）

紅菜はたちむかうことよりも逃げることをあつさり選ぶ。余裕がいつさいない紅菜とはちがい、菜稚琉はたのしそうに紅菜をおいかけてくる。紅菜はできるだけ木を利用して逃げているため次々と木が箸をたおすようにたおれていぐ。

遠田に紅菜と菜稚琉の稽古をみていた螢蘭は紅菜のようすをこまかく観察する。真剣な田で紅菜の動きをひとつひとつなぞるようつみた。

ぎりぎりのところで攻められていて紅菜の動きは回をねじごとに鋭利なものにかわつていく。でも、それでもまだまだ菜稚琉の足もともおよばなかつた。

「紅菜のやつかなりいい動きするようになつてきたな。でも、まだまだ、まだまだ、まだまだ、菜稚琉をたおせないけどな」

急け者の紅菜のために螢蘭の計画を利用しているのは菜稚琉のほうだ。稽古をつけてあげるといつても紅菜はかならず逃げてしまう。おいかけて無理やり稽古させてもいいがそれでは上達がいまいちわるい。だから、菜稚琉は昂摩を餌に紅菜をきたえている。

紅菜は自分の実力が菜稚琉をとらえるまで後一歩だとおもつて試合をつけたのだろうが、菜稚琉は今まで紅菜にそつおもわせていただけで本来の実力はあんなものじやない。今までさえ紅菜のほうは息も絶え絶えという感じだが、菜稚琉は息ひとつ乱していない。

そして、なによりおもしろいのが、紅菜の表情である。自分のみこみが甘かったこと、こんなもてあそばれてしまつよつた試合をつけてしまつたことを後悔している、と顔にかけてある。

（おもつていてることが顔にでるよつじや、まだまだ未熟だな）

円融と柏は紅菜に手をやいているよつなどあるよつだが、菜稚琉や螢蘭からすれば赤子をあやすよつに簡単なことだ。ましてや紅菜のことはすつとすつとちこちこときから見守つてきたのだ。わが子のようにわかりやすかつた。

「しかし、菜稚琉はやつすぎだろつ。今日も紅菜は痣と怪我だらけで帰つてくるな」

幼いこゝ、稽古をつけてやると螢蘭に紅菜は鬼、悪魔、鬼畜といつてわめきちらしたが、ほんとうの鬼、悪魔、鬼畜は菜稚琉のほうである。こゝら紅菜のためとはいつても螢蘭に紅菜をあそこまでおいつめてこゝとはできない。なんだかんだいつて究極のこゝれでは紅菜に甘いのだ。

「そろそろ食事の時間なんだけどな～」

真上にあがつたお日様をみて螢蘭はつぶやいた。

紅菜の顔には寝不足ですとでもいづよつに隈ができる。紅菜の隈をみるとたび螢蘭は睡眠とれないなら意地はらずにやばに寝にくればいいのとおもいながら、そんな些細なことで意地をはつてているまだまだ幼さのこる紅菜が可愛いのだつた。

結局、今日も日が暮れるまでふたりの攻防はつづいた。いぜん優勢なのは菜稚琉のほうで紅菜にはつけいる隙すら菜稚琉はあたえるつもりはなかつた。紅菜の体力をみて螢蘭がとめにはいると紅菜はたつてているのもつらいだらう足でひとり屋敷にかえつていつた。

ふたりはそんな紅菜をみおくる。ほんとうはおぶつてほしいだろうに意地をはつて無理をしてこるのが手にとるよつにわかる。いつもなら「師匠、つかれた」と甘えてくるのにあつたくほんとうに可愛いものである。

「やりすぎじやないか？ 紅菜ついてこゝのがやつとじやねえか」

螢蘭の言葉に菜稚琉は紅菜の性格を指摘するようにいう。

「あれ、うり、いじやないと紅茶はすぐ」手をぬぐひ「なるでしょ、う！」

でも、納得いかない螢蘭は菜稚琉にくいさがる。たしかに紅菜はなまけ癖があるがあそこまでしなくても。きっと螢蘭がとめにはい

「力がつかえなーんだ。おまナしてやつて先ハ一だらう
らないときを失うまで紅菜をおいかけまわしてしまうに

「では、首についた宝珠をひとつあげればいいのでしょうか？」

「きかへしてせらなはていしかねなしそ」

菜稚琉の言葉に螢蘭は押し黙つてしまい。そして、すねた子供の
ような表情をして菜稚琉から視線をはずした。そんな螢蘭に菜稚琉
はくすくすとたのしそうにわらつた。

その日の晩も紅菜は食事をおえると氣の鍛錬のために血室にこもつた。ちいさな石を右手の掌にのせて左手でそれをつつみこむ。そして、しづかに目をつぶり集中する。そのまま数分すぎると左手をあげる。右手にのこされているのは砂になつた石。

掌の砂をはらいながら紅菜は今日の反省をいれながらいつた。

鍛錬の成果が気をつかみ気の流れを狂わすところまではなんとかできるようになつた。もちろんこれだけができるようになつたからといって実戦で使用することをきめたわけではない。

べつの石をとるとそれを宙に投げだした。落下してくる石に人を
し指でふれる。石は内外から崩壊するように砂となって散つていっ
た。

「 」 じつはわかってるんだけどなあ

今日、実戦で使用してみてわかつたこと。それは石と人では気の流れがちがうこと。人のほうが回路が複雑でそして、一定に流れる方向がきまつていないとのことだ。

菜稚琉の気をつかみ完全にそれにふれることができたはずなのに菜稚琉の動きはとまることも鈍ることもなかつた。予想外のこと驚

き、乱したはずの氣の流れをさぐる。するとその氣の流れはかわっていたのだ。

石を五つつかみあげて宙に投げる。紅菜の掌に着地しよりとした瞬間、石は塵とかして紅菜の掌にむかつな山をつくる。

「石とはちがうにかがあるといふことか・・・」

紅菜は手のうえの山をおとすとあきらめたように布団のうえにころがる。田をとじるとまわりの氣配を無意識にやぐる。そして、そのまま眠る。

ゆつくりと眠れない日々がつづいている。そのため肉体の疲れは完全にとれることはなく、体が悲鳴をあげだしているのを紅菜は感じていた。あさい眠りでもとらないよりはましで紅菜は神経をとがらせたまま眠りにつく。

ぼろぼろになつて食卓につく紅菜は満身相異といふ感じだ。昼飯に手をつけながらぶつぶつと文句をいつている。紅菜は完全にはめられたとおもつていた。螢蘭にはめられていた自覚はとうにあつたが、菜稚琉にまではめられていたとはおもつていなかつたのだ。

「共謀してたんだ! はじめから修行させるために姉様と師匠は手を組んでたんだ!」

怒りを食事にぶつけている紅菜を尻目に菜稚琉と螢は食事をおえてゆつくりとお茶をすすつている。そんな一人のまつたりとした雰囲気がよけいに紅菜のきにさわる。

「姉様の卑怯者! ずっと実力をかくしていて勝てるとおもこませるなんて卑怯だ!」

わめきながら乱暴に飯を口にぼうりこむ。菜稚琉はすずしい顔をしたままおもわず本気をだして紅菜を攻撃してしまったことを反省する。じわりじわりと実力をだしながら紅菜のやるきをそらさず稽古をつけけるつもりが、予想外な一瞬のできごとに本気をだして紅菜の攻撃を防御し弾きかえしてそのまま攻撃してしまったのだ。きづいたときには後の祭り。

(まいりましたね)

そして、紅菜のほうはその防御から攻撃をつけるまで菜稚琉をみうしなつてしまっていた。戦いで敵をみうしなつことは実力の差があまりにもおおきいことをものがたつていた。

「姉様の化け物。非道、鬼畜。姉様、はじめから私との約束なんて守るつもりなかつたんだ。もう一生自由がないんだ」

あまりの実力の差に紅菜はやるきをなくしてしまつたようだ。勝てるみこみがまったくないことに完全にきづいた。

そりや、一〇〇年や三〇〇年もしくは四〇〇年たてば勝てるみこみがすこしはあるかもしけないが、それでは一〇〇年から四〇〇年も昴摩にあえないことになつてしまつ。人の寿命なんてたかだか五〇〇年だ。するところのままだと一生あえないことになる。

螢蘭がそんな紅菜のよつすにみかねて菜稚琉に（ビリすんだよ）と視線をおく。菜稚琉はその視線に（ビリしましょ（?））とかえした。

「」のままで修行をせず、はじめの「」のよつて逃亡」をはかるにちがいない。なんとか、条件をかえてでも稽古をさせないといけない。いまのままぼつりだせるほど世の中は甘くないのだが。それを紅菜にこんこんといきかせても無駄だらう。

菜稚琉は湯のみをおぐ。とつとう「もつやらない」とまでいいだした紅菜になだめるように言葉をかける。ちがう条件を提示してでもこちらの思惑どおり納得してもらわないといけない。だいいちあの一瞬みせた攻撃のすばやさと鋭利さを伸ばさないのはもつたいないではないか。

「紅菜」

しづかに名前をよばれて紅菜はむつすつとした目で菜稚琉を見る。菜稚琉はそんな紅菜にやさしくほえむとつづけて言葉をかける。

「では、条件をかえましょ（?）・・・・・紅菜が気をつかう術をすべて会得できれば鬼の坊やを助けにいくことをみとめてあげます」

紅菜はそのはなしを疑いのまなざしできいてこる。菜稚琉はその

紅菜にはがからかにほほ笑みながらわらに条件をたしてこく。

「もちろん、螢蘭にも鬼の坊やに手をださないと約束させます」

菜稚琉の言葉に螢蘭はえつとおもつたが、紅菜の田があるのでものことは億尾にもだれず、自分からも条件を提示する。このままじや、一生でがだせないと理解されてしまう。

「紅菜があいつを助けにいくことにつけば田をつぶつてやる」

紅菜は思案する。氣をつかう術は独学でもだいぶん完成している。菜稚琉から一本をとるのはかぎりなく不可能にちかいが、しかし、氣をつかうこの術はさきがみえているようなきがする。可能性だけのはなしをするのなら後者のほうがだんぜんいいに決まっている。しかし・・・・・

「紅菜、もしあなたが約束をまもらず逃亡するようなまねをするといつのなら。螢蘭だけでなく私もあなたをとりえることになるでしょうね」

疑心と警戒をいろいろやどした瞳をなげかけたまま思案している紅菜に菜稚琉はいった。

紅菜の頭に瞬時に一匹の狼にちこちな白い鬼がおわれる映像がうかぶ。もちろん、狼は螢蘭と菜稚琉、兎は紅菜だ。そうなるとここからの逃走はどんな可能性をひいても不可能になる。主が帰つてこないことに心配して柏や田融がさがしにきても、菜稚琉と螢蘭においかえされちゃおわりだ。

（これ以上の最善の道はないといつに悩んだりして、なんてかわいいのかしら）

田もまわすようないきおいでなにかいに案はないか思案している紅菜に菜稚琉はそうおもいながらみる。しばらぐ、思案に思案をかさねたのだろう。やつと紅菜が口をひらいた。

「姉様と師匠が気について細かくおしえてくれるのか？」

菜稚琉がみるかぎり紅菜が体得しているのは基本の“せ”くらいのものでまだ実戦でつかうには無謀もいといふ。しかし、細かく説明をしながら鍛錬していくば紅菜ならあつとこつまに基本を体得

するだらけ。

「もちろんですよ。私も螢蘭もきちんとおしゃてあげます」

「師匠は絶対じやましない？」

紅菜の言葉に人のいい顔をうかべて螢蘭は「ああ」とこたえた。紅菜からした「」ことがなによりあやしい。ふたたび疑心暗鬼にとらわれる。

菜稚琉はそんな紅菜の態度を見て、よけいなことをした螢蘭の尻を紅菜にきづかれないようにおもいつきいつねる。

「くつ」

螢蘭はその痛みにおもわず声がでたうになつたがこらえる。そして、菜稚琉をみると（なにしてるのよ）と田が語つてゐる。螢蘭はあわてて紅菜にいった。

「まあ、紅菜が氣を体得するまで二〇〇年はかかるだらうけどな」意地悪なことをいつて紅菜を挑発すれば、紅菜のまけず嫌いに火がつく。さつきまでのむつとした田とはまたちがう種類のむつとした田を螢蘭にむけると紅菜は宣言する。

「師匠にできなことが私にできないわけない。いいです。うけてたといひじやないですか」

高々に“うける”といった紅菜に微笑がもれる。もちろん紅菜にきづかれないようだ。ことがうまくいったことに満足すると菜稚琉は食事を食べおえた紅菜にお茶をわたす。

お茶をすすつていい紅菜はほんとうに可愛かった。春の息吹きが頬にあたりなでていいく、うつとりと眠氣を誘つ春の精たちはほほ笑みながらながれていく。そんな春を感じながら菜稚琉もお茶をすすつた。

（今日もおこしいですね）

昂摩はあれから一週間たつてから牢からだされた。一分、一秒でもはやく傷をなおして牢をぶち破り腹いせにひと暴れしてから紅菜のもとへもどるつもりでいたが、母上がきたことによりなにもでき

なくなっていた。

暴れると予想されていた昴摩が暴れもせず大人しくしていることに黒鬼魔王は改心したとおもい。昴摩を牢からだしてやつのだ。もちろん無条件の自由をあたえてやるわけにはいかない。牢から昴摩の自室へ監禁場所がかわつただけだ。しかし、牢のほうが何倍も安全であることにはかわりない。

昴摩は長椅子に横たわりながら王の次に高いところにあるこの部屋の窓から外をみていた。部屋の高さはそのまま自分の地位の高さへとつながっている。

王がいちばん下かく、その次に夜叉、夜叉の母親、さらにその下には正室と正室の子、有望な王の子がすみ、あとは家柄、実力によつてさがつしていく。そして、地にちかづくにしたがつて部屋も質素なものへとなり広さもなくなる。

一歳までいちばん下の使用人とおなじ階でねむつていた。昴摩に乳をあたえてくれたのは母親ではなかつた。黒鬼魔王が自分の食事によつとらえてきた人間の女だつた。そう、乳がいらなくなるまで人間の乳を飲んでそだつたのだ。そういうえば、あの人の女だけがこの城でゆいいつ自分を抱きしめて、声をかけてくれた相手だつた。それも、昴摩の乳離れとともに黒鬼魔王に喰われてしまつたが。

一歳。いつものように兄弟姉妹に虐められていたときだつた。この日はとくに酷くていつものように黙つて耐えていてもいつまでもいつまでもおわりがなかつた。そして、兄の言葉になにかがめざめた。

「解剖してみようぜ」

生命の危機に眠つていた本能的がこたえた。きがついたときにはたくさんのかえり血をあびついて、足元にははいつくばつて微かな息をしている兄と兄の取り巻きが死んでいた。その事件の翌日、部屋は上から三番目。夜叉候補たちとおなじ位の部屋にかわつていた。しかし、ここですごした思い出はあまりない。夜叉となるまでの三年間。戦いにあけくれこの部屋に帰つてくることはほとんどなか

つた。夜叉になつてもそれはかわらなかつた。いや、戦いのなかを求めていたのは昴摩自身だつた。夜叉がでむかなくてもいい戦いにまででむいていった。

勝利をおさめ血に染まつて帰つてくる息子に母はあたたかくむかえいれてくれた。そして、手柄の度合いによつて母との時間ができた。敵だらけのこの場所でせめて母には自分をきちんとみてほしかつた。声をかけてほしかつたのである。

（なんて子供じみたかんがえ・・・）

紅菜と会い自分はかわつたとおもつていた。母上からの呪縛からもとかれ自分を縛る者は紅菜以外にないとおもつていた。あの紅菜にむけるあたたかな想いに縛られて自分は動いているのだと。しかし、現実には母上の呪縛はつよく。解けるどころか紅菜がそばにいることによけいに深く深く縛られて身動きすらとれない。

「情けない・・・」

呴けばほんとうに自分がなによりも情けない存在におもえた。こんなにも自分は情けない。紅菜がいまの自分をみたらどうおもうだろうか。手をさしのべてくれるのだろうか。自信がなくなつていた。螢蘭がいつたとおり強くなくては、だれよりも強さがなければ、紅菜のそばにいられない。いまの自分はあまりにもよわかつた。

“紅菜を守らうなんておこがましい”

意識がうすれていくなかきいた螢蘭の言葉が頭からはなれない。まさにそのとおりだ。こうして縛られて動けないなんて。紅菜を守ることもできなければそばにいることすら許されない。

扉がひらくそれとともに自分を呼ぶ声がした。

「夜叉様」

ふりかえると昴摩にとつて一番田の弟がいた。兄弟姉妹はたくさんいるが親しくすることはない。他人よりも他人らしいそれが昴摩にとつての兄妹姉妹だつた。昴摩はなにもいわずにいた。

「すわつてもよろしいですか」

昴摩は肯定の意味で長椅子にきちんとすわりなおす。それをみた

一番田の弟はむかいあうように椅子にすわった。昂摩はこの弟がなにをしにきたのかわからない。まつたく興味もなかつたが。

「夜叉様をお迎えにいくとき私もいつしょにいきました。夜叉様は氣絶なさつていてしらなかつたでしうが」

なにがいいたいのかと顔をあげる。この弟自体に興味はなかつたが、この城のなかでわざわざ自分と楽しく雑談しにくるような奇特やつがいるとはおもえない。

「そこで夜叉様の蝶をみましてね」

もつたいぶつてなかなか本題にはいろいろとしない弟に昂摩はさきをうながすようにいつた。昂摩自体も兄妹姉妹、親父であつても会話を楽しもうとはおもわない。他の者と会話を楽しむなどここにいたときには想像すらできなかつたくらいだ。

「なにがいいたい」

「いえ、あまりにも美しい蝶だつたのでつい手をだしてしまいたくなつた夜叉様の気持ちがわかるというだけのはなしですよ」

昂摩は奥歯がぎりつとなるのを感じた。なにをかんがえているのかわからぬが、こいつはいちばん厄介なやつだと昂摩は評価している。力だけじゃなく姑息なのだ。かわいくなついてきたとおもえば命にかかるほどの毒をのませたことがある。これ以後、昂摩はいつそうだれも信頼しないようになつた。好意をむけてちかづいてくる者ほどきをつけなければいけないと、いう教訓をおしえてくれたのはこいつである。

「蝶か・・・花から花へうつる蝶におまえにはみえたのか?」

昂摩の言葉に視線で肯定する。それが昂摩にはきにいらなかつた。花から花へうつるいやすい蝶のようすに昂摩から紅菜を奪うことはたやすいといつてているようだつた。

この弟は昂摩がいるかぎりけつして夜叉にはなれない。母親の身分がひくいのだ。しかし、力だけなら文句なしに昂摩の次につよかつた。しかし、一位と一位の差にはおおきな溝があつた。

実力主義の世界ではあるが、母親の身分も実力のひとつとなる。

あまりにも母親の身分がひくいと力があるだけでは夜叉とは認められない。ましてや人間の血をもつた母親からうまれたこいつにはよういつそう昂摩以上の実力がもとめられる。すべてにおいて秀でいることが条件になる。

「あれは蝶ではない。地に根をはり蝶すらよせつけない氣高い大輪の花だ」

昂摩は蝶と揶揄しておまえでは触れることもできないと警告をはしつた。しかし、弟はあざわらうように昂摩にいう。

「人は弱くうつろいやすい蝶ですよ。離れてしまえば人の心はすぐにゆらいでしまう、私はそんなものだとおもっています」

「にっこり笑つていうと席からたつ、戸に手をかけたままこちらをふりむくとつけたすようにいつた。

「立場にしばられない私はどんな蝶をとらえてもかまわない」

挑戦的なその言葉に以外にも昂摩の心はおちついていた。いつもなら格気を焼きいらいらするが、それは紅菜に色目をつかうやつらをまじかにみるから生理的におこるもので紅菜自身を信用していないわけではない。いや、これ以上に紅菜が自分へのあてつけにちかづいてくる者に心を許すとはおもえないのだ。

生理的にいらいらといらつくのは自分に自信がないからだ。そばにいることを許されているだけ、自分は紅菜に酷いことをしてしまつた。紅菜の大切なものをすべて奪つてしまつた。

「だれもみてんじやねえよ」

でも、助けてほしくて紅菜の手がさしのべられるのをまつてしまふ。あさましく欲深い自分の本性を恥じているのにそれでも求めずにはいられない。紅菜が手をさしのべてくれるだけでそれだけで人形ではないと、生き物であるとおもえた。

ここにいるとどうしても自分が人形であることを自覚する。母親の父親のおもいどおりになる人形。自分の意志などは認められず、いわれたとおり生きていけばいいだけの人形。

人形にもどつてしまつた自分にはどうやってここからでていけばい

いのかわからない。求めるものがあつてもここから動くすべをしないのだ。ただ、まつしかなかつた。紅菜がふたたび手をさしのべてくれるのを。

あの日、紅菜がしてくれたようだ。

食事をおえで早々に氣の勉強をはじめようと菜稚琉にむかいあつよつに背筋をのばしてあらたまつてすわつた。螢蘭はどこかへいつてしまつていまはこの部屋にいない。

「では、紅菜お昼寝をしましよう」

その言葉にえつ？といつ目をむける。そんな紅菜の目をきにもせず菜稚琉はよこになつた。そこに、螢蘭が掛け布をもつてきた。

「はい、これ」

螢蘭はそういうて紅菜のかたに掛け布をかけてくる。とまぢつて紅菜は視線を菜稚琉にむけると菜稚琉は欠伸をしながら床をたたくと紅菜にいつ。

「なにしてるの？はやく紅菜もお昼寝しなさい。氣のあつかいの修行をはじめると自分の氣が充実していないとできないんですよ」納得いかないもの紅菜はいわれたとおりよこになる。一刻もはやく修行をはじめたいのだが。

頭を菜稚琉とおなじように螢蘭の腕にのせると、三人で川の字になつてよこになつた。ほんとうに眠つてしまつていいのか？と自問自答していると螢蘭が紅菜の額に口づけていつ。

「おやすみ。よく眠れよ」

菜稚琉はもうすう、すう、と寝息をたてている。教えてくれる者がもう寝てしまつていてはしかたない。

紅菜はなんだか拍子ぬけして「おやすみなさい」といつともまま眠つた。最近、きちんと眠れていなかつたせいもあり眠りは深くて、きづいたときにはもう菜稚琉はおきていて、ふたりは寝ている紅菜をおいて夕食を食べていた。

紅菜はあたりが真つ暗で菜稚琉たちが夕飯を食べてこるにおり

どういた。紅菜からすれば目をつぶつてあけたら夜になつていたという感じだ。それほど、紅菜は熟睡してしまつていた。

「「」はんを食べたら修行をはじめますよ」

その言葉におきたてでも紅菜は食卓についた。はやく稽古をつけたほしくて紅菜はあわててたべる。ふたりはもう食事をおえてしまつている。あわてて食べている紅菜の口元には米粒がひとつついてしまつていて。菜稚琉はその米粒をとると口にいれながら紅菜につた。

「あわてて食べては体に毒ですよ」

「だつて姉様、時間を無駄にしてしまいました」

紅菜の言葉に菜稚琉はにこやかにわらうと紅菜にいいきかせるようにつた。普段は急け者でのんびりしているといつに田的をあたえた瞬間、無理をしてまでがんばつてしまつ。

「無駄？ 疲れた体で稽古をするほうがずっと時間の無駄ですよ。昔からいつてるでしょ。健全な肉体には最高の力がやどる、と」

そして、菜稚琉は紅菜にあついお茶をさしだす。

「ゆつくり食べなさい。無駄な時間など人にはありませんよ」

紅菜の食事がおわり菜稚琉は紅菜に気の説明をはじめる。お茶をかたてに勉強会がはじまつた。もちろん、螢蘭も同席している。桜雅族もそうだが、菜稚琉や螢蘭も口で術をつたえ。けつして巻物や書物で術をつたえることはない。紅菜は幼いとき母上に「どうして、便利なのに巻物にしないの？」ときいたことがある。母上は「紙が術の重さにたえられなくて燃えてしまつのよ」とつていたのをおぼえている。実際、紙にのこそうとしたが書きおえたとたんに燃えてしまつた。

そして、それとおなじように使う術者の器のおおきさによつて覚えることのできる術とできない術がある。そのため、すべての術を継承する長はひとりで治めきれなければ一人になつたり三人になつたりする。ひどいときには一〇人の長がいたことが記されている。

「些細な氣の流れをつかさどるこの術の名は魄氣はくきといいます。魄魄こんぱく

についておぼえていますか？」

「魂が精神であり輪廻の輪にはいるもので滅びることのないもの。魄は魂の器であり肉体で滅びのあるものです」

菜稚琉の問いに紅菜はなんなくこたえる。肉体と魂の基本のようなはなしだ。

「よくできました。魂は陽で魄は陰になり、陽の性質のちがいで人間であつたり天人であつたりまた妖かしや物の怪になつたりします。魂にあつた器に宿るのですから自然とみためにちがいがあるのは理解できますね。そして、普段紅菜がつかつていてる力は陽、魄氣です。」

紅菜はうなずく。そんな紅菜のようすにし満足そうにほほえむとさらに菜稚琉は説明をつづける。

「氣とひとことにいつても前者に述べたような魂と魄があります。魄氣は自分で意識することが求められ、そのため精神力と体力両方もがいちじるしく消耗します。一方、魄氣は意識することなく常に動いています。心臓が意識しなくとも動いているのとおなじで、魄氣は体力も精神力もあまり消耗しません。そしてなにより無意識でつかうことができます」

無意識という不適切な言葉に紅菜は首をかしげる。紅菜が魄氣をつかおうとするといつても氣を感じて意識しなければならない。「意識がいらない」というのは怪我をしたとき、病にかかつたとき、肉体に異常をきたしたときに勝手に体が治らうとすること。今まで紅菜はこの氣の流れを感じてきましたか？」

その言葉に紅菜は首をふる。体がもつ自然治癒力を感じるのは傷がふさがつたり病気が自然と治つたりと曰にみえる現象だけだ。気そのもののながれを感じることはない。

「なかなか自分のなかの魄氣を感じることはできません。ですから、こうして触れられただけで体が動かなくなつたと誤解してしまいます」

菜稚琉はそろいながら紅菜の体にふれた。とたんに紅菜の体が

ピクリとも動かなくなる。そして、声すらでなかつた。ふたたび、菜稚琉が紅菜にふれると体の自由がもどつていく。

「魂にあたえられる公然とした技とはちがい、自分でも感じることのない魄の隠然とした技は一筋縄では解くことができない。魄は肉体。性質のきまつている魂とちがつて魄はきまつていないため、気が流れていさえいれば異常とは認めず気の流れを修正しようとはしないのです。それは無意識的なものです」

菜稚琉はそういうとしづかに口をとじる。紅菜はなにをしようとしているのか注意深くみる。ここでの注意深くはもちろん魄氣をさぐることだ。すると菜稚琉の気の流れがかかる。波立つこともなくいつでもかわらずその場にいつづける水面のようになつてしまつた。「まずはこうして自分の魄をおもいどおりに操れるようになりことが第一歩。紅菜はこの基礎を無視しているから実戦ではまったく役に立たないのです。わかりましたか?」

すべてお見通しですよという感じでいわれた紅菜はすこしきまづそうに「はい」とこたえた。

一本の大きな桜の木は照らされているわけでもないのに自らゆらりと妖しい光をはなつていて。はらはらと散つては水面にもその妖しさを感染させていて。幼いころ紅菜をのみこんだその木の表面にはそのときの名残がのこつている。

螢蘭はその傷に愛おしげにふれると珍しく述べの時間におきてきている菜稚琉の気配にきづく。そして、声をかけた。いつもなら口が沈みきると寝てしまつていていたのだが。

「紅菜がおきてしまうぞ」

紅菜は昔から命を狙われる生活をおくつてきたせいで保護してくれる者がいないと眠れない体質だつた。一族が滅びたあと、菜稚琉と螢蘭は紅菜の安眠剤になつた。それは、紅菜が柏と円融を誕生させまるまでつづいた。螢蘭は自分の言葉に幼い日、紅菜がだれもいないことにきづいて泣いて自分たちをさがしていたことをおもいだす。

「紅菜が起きるまえにもどりますよ」

菜稚琉もおなじことをおもいだしたのか揶揄するよつこつた。
菜稚琉はいつまでも螢蘭のなかでの紅菜は幼いときのままなのだと
うとおもつ。そして、すぐに自分もおなじだとおもこなおしくすり
と心のなかで笑う。

「後悔しているのですか?」

菜稚琉は螢蘭にとかけた。愛おしそうに桜の傷をふれながら苦
しそうに田を細めている。紅菜の力をうけて狂い咲く桜から手をは
なして螢蘭は「いや」とかえした。そして、言葉をつづける。

「紅菜には必要だった」

桜も今回のことでも螢蘭はそつおもつていて。酷な役回りを自ら選
び、憎まれ役をかつてでるのはそれほど紅菜にむける愛情が深いこ
とをあらわしている。けど、螢蘭はそれをしられるのが照れくさい
のかいつもふざけたふりをしてその愛情を露ませてしまつていて。
そんな螢蘭を菜稚琉は愛おしくもじれったくおもつときがあるのだ。
「紅菜は筋がいいからもうほとんど留得しかけてるだら」

菜稚琉には螢蘭が過去のはなしから逃げるように現在のはなしを
したのがわかつたが、それでも過去のはなしにひきとめることはない。
過去は過去でどんな望んでもかえってもやりなおしこともで
きないのだ。

「そうね。あと一歩とこつかんじかしら」

菜稚琉の言葉に螢蘭はこまつたように溜息をつぐ。嬉しいやら悲
しいやら複雑な気持ちが体中からでていた。菜稚琉はくすくす笑う
と螢蘭を励ますように言葉をかける。

「暴走したらまた私たちがとめればいいだけですよ。いつもとおな
じことです」

「やつだが、まえにも基本だけ習得して外へ飛びだしていつただろ
う。きつとまた飛びだすとおもつぞ」

螢蘭はそのときのことをおもいだす。あのときは不意をつかれて
大変な目にあった。遙か昔のことだが、いまでも鮮明に覚えている。

紅菜のやんちゃな性格はどんなにときがたつてもかわらないのだ。
「しかたないでしょ~?」
「これら性があるように育ててはないと
もの。あなたの汚点ですよ」

その言葉に螢蘭は納得いかないようになんかに菜稚琉に目をむけると批判するようにいった。

「菜稚琉もなんだかんだで甘いからだろ~。俺ばかりわるいんじやないぜ」

「では私たちの汚点ですね。もう修正はきかないのだから、あきらめましょ~」

菜稚琉の言葉に何度も目かの溜息をつく。今回は魔界までいくにきまっている。絶対だ、絶対。昴摩がこちらにくることはない。そういう風にしむけてある。そうなると菜稚琉は行動を制限されてしまう。魔界には菜稚琉はいけないのだ。

「俺ひとりががんばるのかよ」

「しかたないでしょ~。私はいつも役に立たないんですから。外でまつてますよ」

菜稚琉の言葉に螢蘭は「そうだよな」と呟く。そして、おもいつめた表情をする。

「あの体はそうながくはもたない」

螢蘭はそういうて桜から手をはなす。人の血が濃いあの体には昴の妖かしの血と柚羅乃の天上人の血があまりにもうすぐくなつてしまつていてる。

「魄が使いこなせるようになればその期間もまたながくなるわ。大丈夫よ。螢蘭、私たちが恐れていることはなにもおこらない。そうでしょう?」

それでも螢蘭の気持ちが慰められないのはわかっている。菜稚琉は氣休めだと自分でもおもう。こたえない螢蘭に菜稚琉は微笑む力もなくなりそうだった。

最悪の場合をかんがえ、ながいあいだ準備してきたもの。それをつかうことは躊躇われた。紅菜には魔界へいくことが必要だった。紅

菜のかかっている術を破るために、眠っているもうひとりの紅菜を田
覚めさせるため。

螢蘭は菜稚琉の顔が一瞬くもつたことを感じると「そうだな」とい
うように「大丈夫だ」と呟いた。菜稚琉も「そうよ」と呟く。そし
て、螢蘭は歌うようにいった。言靈をのせて。

「天がおとした光明。光と闇の生をうけ、また天地に愛され育ま
れた愛児は光を燈し永久の幸を承る運命」

未来への願いをこめた言葉に菜稚琉は「いい言靈ね」といつて桜
にふれた。桜はらはらと薄い花びらを散らせていく。

紅菜は満面の笑みをうかべていた。その笑みには達成感すらうか
んでいる。昨日つかみかけていた基本的な魄の流れを習得したのだ
った。自分の魄を操作できるようになるとあとは乾いた地面に水が
しみこんでいくかのようにはやかつた。そして、その日にうちに菜
稚琉がかけた魄気を破れるようになってしまった。これが基本編の試験
をうける資格として提示されていたものだ。つまり、受験資格をえ
たことになる。

「紅菜、ではこれを砂に変えてください」

菜稚琉はそういって石をわたした。掌につつまれるほどちいさな
石は無蝕限だつた。ふれた瞬間、力が抜ける。紅菜は体がたおれき
つてしまふまえに魄気を抑制して石の波動にあわせる。するととた
んに体の力がもどってきた。すこしまえまでこれをもつこともでき
なかつた。その成果にやはり笑みがうまれる。

「紅菜、もてるだけじゃダメだぜ」

「わかつてます」

螢蘭の言葉にそつかえすとしづかに息をつく。そして、ジーと石
をみつめると無蝕限はさらさらと砂になつてしまつた。砂の山にな
つてしまつた無蝕限に螢蘭はふれる。無防備にふれたのにもかかわ
らず力を奪われることはない。いちおつじこまでできるとおおむね
術を使いこなしていくことになる。

螢蘭は期待満々で自分の顔をみている紅菜に心のなかで絶望にもにた溜息をついてから、紅菜の望む言葉をいつてやる。

「合格だ。完全に無効化になっている」

しかし、悪あがきを忘れないのが螢蘭のしぶといところだ。基本の試験のレベルをさらにあげた。応用編に足がかかるているようなことをいつ。

「今度はこれを無蝕限にもどしてみる。それができたら文句なしの基本合格。戦闘につかってもいいぜ」

壊すことは意外と簡単だが作りあげることは困難だった。魄を正確に構成しなければならない。紅菜は自分の手にのこつている砂も床におくとそのうえに自分の手をおく。そして、おなじようにじとみつめたがおもいどおりにいかない。田をどじて再度挑む。

「不合格だな」

数分たつても変化はなかつた。意地悪な螢蘭の言葉にプツンと集中力がとぎれる。とたんに紅菜の表情がぶつつと不機嫌なものになる。そして、非難がましく螢蘭にいつた。

「師匠が口をださなかつたらあとちょっとでできたんです」

紅菜は怒りながら手を払う。螢蘭は紅菜を挑発するようにさつきまで紅菜の手があつたところに右手をのせる。一瞬だつた。あつといつ間に無蝕限はもとにもどりてしまつ。

「実戦では一瞬が勝負なんだよ」

紅菜は悔しそうに螢蘭を見る。床にはこりんとした無蝕限の石があつた。螢蘭は「ああ、簡単だな」といながら悔しそうな顔をしてる紅菜に目をむけた。

（まったくあの人は困つた人なんだから）

菜稚琉はそんな螢蘭と紅菜を微笑ましくみている。螢蘭が基本を習得したときいた紅菜が早々に実戦へとむかわないように紅菜のまけず嫌いな性格を利用して抑制したことはお見通しだ。でも、こんな憎まれてしまつのようなやり方をしなくともともおもうがこれが螢蘭なのだ。

(今晚あたりかなあ)

螢蘭の計略も悲しく、紅菜は今晩にでもこの屋敷を脱出して魔界へ王子様を助けにいくのだろう。そうおもいながらキイキイわめいでいる紅菜と勝つてみろよと挑発している螢蘭をみて暖かい気持ちになった。

そして、この日の晩。菜稚琉の予想どおり紅菜は動きだした。こつそりおきだすと菜稚琉をおこれないようひたむかと部屋をぬけだしていった。

螢蘭の挑戦は心残りだが、螢蘭との勝負はいましなくても充分に機会はある。しかし、昂摩はなにがどうかわるかわからない。いつも追いかけてきているものがないとけつこう寂しいものなのだ。そして、寂しがりやなところがある紅菜はその寂しさが嫌だった。

紅菜がいなくなつてしまらくすると菜稚琉はもういいだらうとおもい起きあがる。すると螢蘭が部屋にはいつてきた。そして、紅菜がいないことを確認すると「はああ」とながい溜息をつきながらしゃがみこんで頭をおさえている。

「しかたないですよ。負けず嫌いの虫より寂しがりやな虫が騒いだんでしよう」

うなだれている螢蘭にそう声をかける。その言葉をうけて螢蘭は菜稚琉に背をむけて紅菜を捕獲しにいこうとした。しかし、そんな螢蘭の足を「管狐」匹がくいとめる。菜稚琉のいくなとこつ命令だつた。

「こまからだつたら余裕でつかまえられる。まだ、あこつにははやい。ましてや魔界だぞ」

「落ち着きなさい。紅菜をつかまえて閉じこめてもしかたない」とでしょう。それより、紅菜が自分でどこまでできるか見守つたほうが収穫はおおきいです。それはあなたもわかっているでしょ? 螢蘭

菜稚琉の言葉を理解していないわけではない。たしかに菜稚琉のいふことは一理あつた。だが、心配が先立つときだつてある。いつ

蘭

もやつだが。意外と物凄く過保護なのだ。

「そうだな。でもつ」

それでも、口^ひたえしよつとする螢蘭に菜稚琉は悪戯^{ばくほ}ほほ笑むといつ。

「甘やかしすぎですよ」

螢蘭はその微笑に疲れたよつに横になる。菜稚琉は満足げに螢蘭の頭をなでるとよしよし、とねぎり。螢蘭は田をつぶり菜稚琉の手をにぎりしめてすこしいらだつ声でいつ。

「明日は朝、はやいからな」

菜稚琉は「はい、はい」と返事をするとそのまま眠りについつとする螢蘭の体を管狐をつかつて布団まで運んだ。そして、明日は忙しくなりだとおもいながら、秒殺で眠りにつく。菜稚琉の眠りは瞬殺で深いものへとかわつていつた。となりで田をつぶつているだけの螢蘭はそれを感心しながらも溜息をつく。もう何度ため息をついたことだろう。

紅菜がからむといつもやつだ。心配とあきらめて我慢の溜息をつかなくてはならない。

菜稚琉が自分に紅菜の動きがわかりにくいやつにしていたのはわかつていて。今日、紅菜を逃がすつもりでいたのだ。魔界へいけるのは螢蘭だけだ。菜稚琉はある一定の線からはいれない。もやもや、くしゃくしゃしながら螢蘭は眠りにつく。眠つて体力をためなければいけない。今回の機動部隊は自分の役田なのだ。

紅菜がでていってからはや一ヶ月がたとづいていた。春の主役は梅から桜にかわりつつあった。ほとけのぜ、すずしろ、つづじ、やまぶきにすずなとまだまだ春の草花は春をおおかしている。そのおかげで豪華絢爛、春爛漫といった風情にかけりはない。そして桜の登場はどんなに煌びやかなものになるだろう。

「平和ですね~」

円融ののんびりした声が釣殿からきこえてくる。柏もとなりにざしていて円融のそのつぶやきに「そうですね」とこたえている。我侭な主がいなだけでこの屋敷はおそらくしづかだつた。紅菜がいたらいまごろ「桜見酒だ」といって酒と肴とともに桜をみにいつているにちがいない。

春は紅菜のもつともよく活動する季節だ。暑い夏は暑さにだらけて、寒い冬は寒さにこもる。秋は美味しいものや読書にふけりまだ活動的だが、春とくらべるとやはりくらべものにならない。

春は温かくおだやかで陽気なせいか、紅菜は好んで遊びにふけてしまつ。寝ても心地よく、遊びにふければ陽気だ。つまりしたい放題なのである。

そのたびに柏や円融はふりまわされる。酒の飲みすぎはたんに体にわるいだけではなく、紅菜の酔い癖がわるいことがなによりも困つたところだ。飲みすぎるとなにをするかわからない。屋敷をこわしたり、物の怪をよびよせてえらいことになつたりすることはたびたびだつた。

ほろ酔いから泥酔三歩手前ならなんとかいい範囲だが。しかし、それ以上いくと屋敷が危険にさらされる。屋敷だけならまだよいが、屋敷からでて外に被害をおよぼすこともしばしば。そんなことだから“妖かしだ”“物の怪だ”と騒がれるのである。

しかし、まだ夏や冬なら暑さと寒さという障害がありあまり外にで

ていいくことはない。秋になると哀愁のおかげかほろ酔いくらいですむ。春はちがつた。春は特別なのだ。

陽気につられるせいか、紅菜は泥酔になるまで飲みだがり心地よい温かさにつられて外へでていつてしまつ。暴走することたびたび。

そのため、柏や円融は酒の相手をしながら量を監視したりあはれはじめた紅菜をおさえつけたりと春はよけいに紅菜に手がかかつた。

「せめて桜がおわるまであちらにおられればいいのに・・・」

あまりの平和に柏の本音がぼろり。円融もその発言に「まったく」と言葉をかえす。梅の時期、桜の時期、藤の時期。この三つの時期でもつともひどいのが、桜の時期だ。やはり春の最強の主役は桜なのだろうか。

「あちらでは紅菜様はまったく頭があがりませんからね」

円融はふたりのまえにいるときの紅菜をおもいだしながらいった。幼い紅菜に酒をおしえたのはもぎれもなく螢蘭だが、酒に飲まれるような飲み方を許すようなことはしない。

螢蘭の持論で“酒は楽しむもので飲まれるものではない”というのがある。酒は楽しく陽気にそして、優雅にのむものだ。けつして自分のしたことを忘れたり酒にのまれたりして分別を失うことはありえないことだ。

「暴走しても叱られておわつてしまつのだからあれ以上安心なところはないですし」

柏がそうこつてほほ笑む。田代、シワができるのではないかとおもうほど紅菜にふりまわされ胃に穴があくかとおもうほど心配させられている柏にはあのふたりにまかせるほど安心していられる場所はない。

ふたりがまつたりとしていると蒼が管狐を肩にのせてあらわれた。沢に釣りにいつていった蒼は手に釣り道具をもつていて、魚もつづてきたのだろう。すこし生臭い。

「きてたぜ。お、やめろよ。くすぐつたいだろ」

管狐は蒼の耳に鼻をおしつけてじやれている。そんな管狐に蒼は

おなじようにじゅれて首をかいてやつている。蒼は動物になつかれやすいのだ。

「なにをもつてきてくれたなんですか」

円融は仲むつまじい管狐と蒼にいった。すると管狐は自分の役目をおもいだしたかのように蒼の肩からおりると「ン」と咳をして青い石をはきだした。親指と人差し指で円をつくりたようなおおきさの球体はころころと床をころがる。

「言靈ですか」

そういうた円融にこたえるように管狐はきゅうと鳴く。そして、ふたたび蒼の首に体を巻きつめてしまへ。どうやらお氣に入りの場所のようだ。

「あまりいい予感しないなあ。俺」

蒼の言葉に同感しながら円融はその言靈を地面にたたきつけた。言靈は鱗がはいりふたつにわれる。とたんに爽やかな耳に心地よい声がきこえる。その声には充分にきき覚えがあつた。声の印象を裏切らない姿がおもいかんだ。

（菜稚琉様じきじきとなればゆつくりとこくわけにはこきませんね）
声の主がだれだか瞬時に判断した円融はそうおもいながら蒼にじやれている管狐を見る。たぶん、いや確実にあの管狐の能力は駿足だろう。

円融の記憶のなかではあの人のもつている管狐は一一〇匹ほどだったはずだ。しかもその管狐すべての能力を菜稚琉は把握している。管狐は能力者の力によって繁殖するから確実に記憶しているよりは数はふえているだろうが。

管狐はそれぞれがちがつた能力をもつてている。普通の者ならそうそう繁殖することはむずかしい。よつて、一匹もしくは二匹しかもつておらず、その能力にめぐまれればいいがめぐまれなかつたら戦力になることはない。ある意味、賭けのような感じの憑き物だ。もちろん、欲張つて繁殖をさせると使役ができなくなつたり異常をきたしたもののが産まれたりする。

菜稚琉も螢蘭もすごい人たちのだが紅菜は昔からこの人たちの力の領域をあたり前だとすりこまれていて世間一般的の考え方とすこしづれている。

「あいつ、本物のバッカやろうだッ」

螢蘭の叫びにちかい声に菜稚琉はすこし迷惑そうだった。紅菜がなにをもつていったのかを調べるために武器庫にきている。武器庫のなかで減っていたのは“時雨”だけだった。

弓もそのほかの短刀や槍もいつさい手がつけられていない。ここには普通では手にはいらない業物がおかれていて“時雨”一本だけをもつてでていったのだ。そして、螢蘭は激しくそのことを怒っている。

「落ち着きなさい。いちおう管狐一匹と獣笛をもつていいっているだけましです」

管狐の寝床ごとなくなっている」とと獣笛がないことを冷静に螢蘭につたえる。しかし、螢蘭は苛々と頭をかきむしって狂乱寸前といふかんじだった。菜稚琉と螢蘭は静と動でまったく正反対の性格だ。

「アホか。そんだけでどうやつて魔界の王族にたちむかうんだよ」

螢蘭の「アホ」という言葉にキツときつい目線をおくる。いつもの朗らかな瞳をしている菜稚琉にそんな目をされて、螢蘭は自分の失言にきづく。

「つ、すっすまん……でも、管狐つかえるのかよ」

素直にあやまつた螢蘭に菜稚琉はいつもの朗らかな瞳にもどる。そして、螢蘭の質問にこたえた。

「大丈夫です。いちばん紅菜に懐いている子をつれているようですし、それにこちらから暴走しないように抑えれば間違いはないでしょう」

いまの紅菜は靈力がつかえない。紅菜は体術と魄氣、そして、管狐で王子様を助けにいつてしまつたのだ。幼いときから策を練り、技をみがいてから戦いには挑めと教えているのにもかかわらず、あ

の子はまた、突然喧嘩をしかけにいつてしまつた。まったく喧嘩っぱやい性格である。

（紅菜なりに管狐と獸笛で策を練つたつもりではないでしょうか？）
そうおもいながらもしものときをかんがえて菜稚琉は螢蘭に提案する。

「螢蘭、紅菜の首の石。無効にしますか？」

「だめだ。それだけはできない」

無駄だとわかつていて菜稚琉は螢蘭にいつた。やはり予想どおり螢蘭はきつぱりと否定する。力だけを抑えているわけではないのでしかたないが。

「とりあえず、現場へ先回りしましょ。じつせ、紅菜の足ではまだついてないでしょうし」

菜稚琉は管狐の寝床であるほそい管を一指し指でとん、とん、とたたくと管狐をよびだす。六寸ほどのほそい筒に五匹の管狐をいれると飾りのついた蓋をしてひとつに結われている髪にさした。

「紅菜を確保したらみつちり説教と稽古だ」

螢蘭は外出用の女姿になつていてるのに言葉がまだ男のままだ。かなり怒つていてる証拠だ。やることはわかつていたが、まさかこんな軽装備でいくとはおもつていなかつた。戦いにいくには重装備でいかなければならぬ、ということから教えなければならないのか。螢蘭は怒りであれぐるう胸のなかであきらめにちかい溜息をつくのだった。

紅菜は三日もかけてやつと魔界の門のうすにはいつた。魂氣つまり靈力がつかえないことでなにをするにもおもつた以上に時間がかかるてしまつ。紅菜はやつとみることができた魔界の姿に眉をひそめる。

気配はわるいものの外観的にあまりかわりがないようにおもつた。さすがに可愛い草花は咲いていないが、簡素な森という感じの外観だ。

紅菜がかんがえていた魔界はもつと石や岩が「じりじり」して、暗くおもい空をしているのだとおもつていたけど、実際はぜんぜんちがうようだ。

紅菜は予想外な姿にちょっとがっかりしたが、流れる不穏な雰囲気と肌に感じるどんよりとにじつた空気は予想どおりだつた。ある意味、自由な感じもある。清涼な綺麗なものは「いまじまとし」た努力と決まりがあるからこそなりたつ。紅菜たち人間の地上もおなじだつた。穢れがこないように綺麗に掃除して、塩をあき、毎日経をあげて心をおさめる。術者と地は互いに影響を受けやすいうこともありきをつかうのだ。

（さて、どこにいけばいいのかな……）

はじめての魔界観光だ。どこになにがあつてどうなつていいのかまったくわからない。いちおう螢蘭や菜稚琉が魔界の地図のようなものもつていなかっただよ」と搜索したが無駄だつた。

紅菜はいきあたりばつたりな状態で螢蘭のもとから飛びだしてきたのだ。紅菜らしくないといえばそれでおわりだが、どうしても我慢できなかつた。

意外とおもわれるだらうがおもいたつたらすぐ行動。我慢や忍耐という言葉とは無縁なところがすこしあるのだ。

紅菜は懐から竹のほそい筒をとりだす。その筒は菜稚琉の管狐のなかでゆいいつ名のついた管狐の寝床だつた。紅菜は寝床ごとこの管狐をつれてきたのだが、つかうことをためらつていた。

「芽衣果・・・・・」

芽衣果といふ名は紅菜がつけたものである。紅菜にとつて芽衣果は幼いときの遊び相手だ。芽衣果は名前を呼ばれて筒からでてきた。そして、紅菜の首にまきついてくる。すりすりと頬にほうずりして甘えてくる。紅菜は甘えてきた芽衣果の首をやわしくかいてやる。

「・・・・・つーん、でもな・・・・・」

芽衣果は気持ちいいのかくうん、くうん、鳴いている。芽衣果をつてきたのは单になつているということだけではない。

芽衣果の能力は狩り。つまり獵犬のようなものだ。探し捕らえるにはもつともいい能力なのだが、どうしても使いきれる自信がない。

今までよく遊んできたが、使役して使ってきたわけではない。近所の犬や猫と遊んでいたという感じだ。その犬にいざ狩りの相棒になつてもらおうとしてもうまくいくのだろうか。不安だった。

「十日さがしてなにもつかめなかつたら、芽衣果をつかうことにしてよ。」「うう

紅菜はそう結論づけると、芽衣果を筒のなかにもどそうとした。しかし、芽衣果は筒にはもどらず、紅菜の首にまきついたままだつた。そんな芽衣果の態度に紅菜の不安はおおきくなる。

（無理かも……）

管狐は纖細で頭がいい。そのため使役できればこれほど便利なものはない。しかし、術の力だけでは使役できず、管狐が主をきにいらない場合は主を食い殺すか憑りついて意のままに操ることもある。

これまで紅菜は生き物を使役したことがない。柏や円融は自分の力と両親の亡骸でつくつた式だが、やはり根本的なことには生き物とはちがう。ゆいいつ、ちがつたのは昂摩といふことになるが、あれは使役しているといえるのだろうか。うつむ、なぞだ。

いろいろと悩んでいるとどこからか低俗な物の怪があらわれた。醜い容姿の一人をみて紅菜やつと魔界にきたことを実感する。それとともに自分がここにまだなれていないことへの危機感をいた。

（なれるまで隠れておいたほうがいいな）

紅菜は心のなかでそうおもうと一人の物の怪をみた。この程度のやつらが気配を消せるわけがない。ということは自分の感覚がにぶつっている証拠だ。もし、もつと上級の者がきていたとしたら何もきづかず殺されていたかもしない。

「こんなところに迷いこんで、くつくつ、危ないよ」

「そうそう、お姉ちゃんみたいな美味しそうな子がさー」

「どうやら、紅菜の首にある戒めのおかげで普通の人間が魔界に迷いこんできただとおもつてゐるらしい。無防備な羊が狼の群れに迷いこみ、自分たちはその上物の獲物をまつやきにみつけた運のいいやつだともつてゐるようだ。

「お前たち鬼族の住処をしつてゐるか？」

紅菜はいった。しかし、一人の物の怪は下卑た笑いをうかべてこたえる。それは紅菜の満足するこたえではなかつた。

「お嬢ちゃん、俺らと遊んでよ」

「そうやつ、きやあ、きやあ、いつてさ」

紅菜は頭痛を覚える。青い石の首輪のおかげでまたくはなしにならない。いつもならちよつと靈氣をだしておどせばすんなりとはなしがつくといつのに。

「やうか」

紅菜はこゝがはやいか、『時雨』をぬきとり踏みこんでいた。次の瞬間、一人の物の怪の背後に着地した。物の怪たちはなにがおきたのかわからず後ろをふりむくとそのまま崩れ落ちた。ばらばらになつたそれを見て紅菜は半紙をだすと『時雨』を拭いて清めてやる。あいかわらずいい切味だ。

「はあ、さきはながいな」

はやくも疲労困憊といつ感じがした。紅菜は溜息とともにその場からきえた。

紅菜はみつけた洞窟である『日す』した。すると、氣も馴染んだのか徐々に他の者の氣がわかるようになつてきた。そして、やつとのおもいでいつもどおりにまでもどつたのだ。

そして、歩きまわりかたつぱしからはなしをしてわかつたことはここには低俗な物の怪たちしかいないということだ。昨日のような不愉快なおもいをしてすすんでいかなければいけないかとおもつとはやくもめげそうだつた。しかも、腹も減つてゐる。

（口にできる食い物があるのか）

不安になりながらも紅菜は洞窟からでて食い物をさがして沢まで

きていた。ここにくるだけで昨日のよつなことが六回もあった。そのたびに鬼の住むかをきくがまったくの手がかりなしで、昨日のくりかえしだ。

ここにくるまでに木の実もあつたが、なにせ魔界の食べ物だ体にあわないなどどうなるかわからない。正直いつてかるくかんがえていた。二日や三日でつれもどせるとおもつていた。しかし、なかなかそうはいかないことをこの一日たらずでよくわかつた。

沢の水を両手ですくつて恐る恐る舌をつける。犬のようだとおもつたが、いきなり口にふくむことはためらわれた。舌にふれた水は地上にある水となんらかわらないうようなきがした。おもいきつて口にふくもうとしたとき、五名様登場。

「お姉ちゃん、いいケツしてるね。がぶつと食ひ切やいたいぐらいだよ」

「なにいってんだ。あんな上物そく食つにはもつたいねえよ。俺の嫁にならない」

「ああ、楽しそう。さんざん泣かせてじわじわ食つの」

着物をみて紅菜が身分の高い者だと判断たんだらう。身分が高い者、高名な術者、美しい者は妖かしや物の怪にとつては美味だとう。

紅菜はまたかとおもいながらたちあがると背後につる胸糞わるいやつらを疲れた顔でふりかえる。これのくりかえしだ、とおもいながら柄に手をかける。

「おお、しかも美人」

物の怪の言葉をきき終わるまえに紅菜はふみこんだ。風がとおりすぎたような紅菜の剣術にやはりなにがおきたかわかる者はいない。亡骸をみて紅菜は鬼のことをきくのを忘れていたとおもつたが、どうせなにも情報はえられないだろうとおもいなおした。

言靈をきいた三人は使いでよこされた管狐の背中にいた。管狐は音よりはやく移動している。紅菜が魔界にいってしまったときいた

三人はしんそこおどりいたが、紅菜ならありえるとおもいすぐに冷静さをとりもどした。

「まったくあいかわらず何をしでかすかわかつたもんじゃねえな」蒼はよこになり自分の腕を枕にしていった。本来ならあまり螢蘭のそばにはいきたくないのだが、紅菜が魔界にいつたとなればそつもいつてられない。

「つきますよ」

円融の言葉に蒼は起きあがると地上をみた。そこには柏と石しかなく、生命あふれる縁や光はなかつた。管狐が着陸した場所。それは魔界の門のまえ。

「よろしくれましたね。螢蘭はもうなかですよ」

菜稚琉が三人をでむかえる。どうして、菜稚琉はいかなかつたのか。円融は不思議におもつ。言靈をのこすなり管狐をおいとくなりしておけば充分のはず。

「では、いきましょうか」

柏はそういうて門に手をかけておもいきり押した。しかし、門はびくともしない。「なにしてるんです」といつて今度は円融が門を押したがやはりびくともしない。

「どうゆうことだ?」

困惑気味に蒼はいった。三丈以上ある石の門は普通の人間の力ではとうていあくものではない。柏や円融は式で腕力も尋常ではないのだが、あく氣配はなかつた。

「やはり、ダメですか」

そういうて菜稚琉は溜息をつく。菜稚琉自信は門にふれることもできない。それどころかここからやきの侵入は自殺行為だった。

「どういうことですか? 菜稚琉様」

円融の言葉に菜稚琉はにつこりわらうといった。

「試したかつたんですよ。いまの紅菜の両親はどうだつたのか?」意味のつかめない言葉に円融と柏はたがいの顔を見る。しかし、そんな二人をおいて菜稚琉は蒼をみるとうれしそうにいつた。

「蒼、まさかあなたがきてくれるなんておもつてもこまませんでした。放浪の旅からかえってきたんですね」

「ええ、まあ」

「」の状況に似つかわしくない菜稚琉の表情に蒼はくじらもる。

「あなたなら大丈夫」

菜稚琉はそういって蒼に紙札の袋をわたした。そして、一匹の管狐をだすとはなしかける。

「紅菜はみつかったかしら？」

すると管狐から言葉がでる。その声に蒼は反射的に背筋がのびる。「いや、まだよ。なかなかみつからないのよね。ちょっとまつてて」声は苦戦をしきらでいるといった感じでこたえた。その後ろから爆音や悲鳴がきこえてきてしまいには地響きまでもきこえてきた。（まあ、やつあたりして）

菜稚琉は必要以上の攻撃に心のなかで感想をこつ。すると、管狐がはなしあげ始めた。

「『めん、菜稚琉。やつとしずかになつた』」

「螢蘭、そつちに蒼を派遣しますからね。仲良くするんですよ」

蒼は菜稚琉のその言葉に怯えた表情と拒否の表情をうかべる。しかし、容赦ない菜稚琉はつづけてこういった。

「蒼にはあなたがあつかえない物をわたしてあるんですから、傷つけてはいけませんよ」

「はい、はい。わかつてゐる……蒼、あなた私にふれたら殺すからね」

螢蘭は蒼にむかつていった。ほんとうにわかつてゐるのか、といふつこみが蒼の心に芽生えたがこんなつこみ許されるのは柏と菜稚琉しかいない。基本女性がなにをいつても命の保障はある。

「あ、それとの子たちもいっしょにつれていつてください。螢蘭がつれていいくのをわすれていて困つてました。あなたがこなかつたら螢蘭をよびもどさないといけませんでした」

菜稚琉は髪飾りから一匹の管狐をだした。そして、あわてことか

螢蘭にこんな恐ろしことをこいつ。

「螢蘭きちんと蒼にお礼をいつておくんですよ」

螢蘭は「はい、はい」と適当な返事をかえしている。絶対に礼の言葉はこの人からはきけないだろう。

管狐は蒼の懷にもぐりこんでしまった。そして、そのままうしろにいた。い。菜稚琉はそれをみとどけると蒼にいそぐようにこいつた。

「さあ、蒼。門を開けてください」

「えつ、でも、オレには」

「ぐずぐずしない。急いで急いで」

菜稚琉の言葉にとまどいながらも門のまえにこぎ、手をあてる。そして、力いっぱい押した。扉はあつけなくひらいた。え? というまぬけな顔をしている蒼に菜稚琉はほほ笑むといった。

「じゃあ、いってらっしゃい」

「じゃあ、いってきます」

蒼はつられて返事をかえすと門のなかへとふみこんでいった。その後ろを柏があわてておいかける。門はゆっくりとしまっていった。円融は門の外にのこつたまま。

「いかないんですか?」

菜稚琉の言葉に円融は癖のあるほほ笑みをつかべて「ええ」といつた。そして、しばらくすると扉がふたたびひらいた。扉のむこうには柏を肩にかかえた蒼の姿があつた。柏は顔を真つ青にして苦しそうに眉をしかめている。その柏を見て円融はおもつた。

(やはり)

そして、長年なぞとされてきた菜稚琉と螢蘭の正体がなんとなくわかつたきがした。だが、まだ確証はない。

「それはこちらで預かりますから、急いで」

菜稚琉は柏をうけとると蒼にいつた。かけだしそになつた蒼の袖を瀕死状態の柏がつかむと蒼にいつた。

「紅菜様をたのみますよ」

「わかつてゐる」

その真剣な眼差しと苦しそうな声をつけて蒼は表情をひきしめる
とその門のなかへとはいっていった。蒼のうしろ姿は門のなかにき
えていった。

魔界にきてはや四田田。ここにきてから紅菜は水しか口にしてい
ない。空腹と低俗なやつらにからまれて苛々はかなりつのつてている。
ぶち切れる寸前といったところだつた。そこに、睡眠不足もくわわ
りきわどいところまで精神はきていた。

精神的につよい紅菜でもあの低俗なやつらの低俗な頭にはついてい
けない。やつらの頭には食欲か色欲しかないので。醜いつたらあり
やしない。

「ああ、もう全部殺しちゃおつかな」

危ないことといいながら紅菜は水をのんでいた。空腹でも物を口
にすることはためらわれた。この気のなかで育つたものが口にあう
とはおもえなかつたのだ。体を壊す可能性がたかい。

すさんでいる紅菜のまえに人の姿をした者があらわれた。ここ四
日間、物の怪の醜態を見てきたせいがあらわれた妖かしがこの世で
もつとも美しいものにおもえる。実際はそのへんにいるありきたり
な容姿の妖かしだが。

「尊じおりの綺麗な子じやん」

紅菜のことはこの界隈ではとうに噂になつていて。類まれな美し
い容貌に剣ひとつで一瞬で敵をたおす、となれば噂にならないほう
が不思議だ。そして、美しい者ほど美味しいといつのはあたりまえの
こと。

（きつと、はなしがつうじる）

まともな感じのその妖かしにおもわず歓喜の心がめばえる。いつ
もの紅菜ならこんなふうにはおもわなかつたが、なにせいまは精神
的にかなりきている。いろんな意味で。

「あのききたいことが」

紅菜は柄に手をかけるのも忘れて無防備に笑みをこぼしてこう。

その紅菜のすこし儂げな笑みに妖かしの目の色がかわったが紅菜はきづかない。衰弱しすぎである。

「きいてあげてもいいけど・・・」

そういう間合いをつめあつとこうまに紅菜のまえにたつた。やはり動きはこれまでも物の怪たちとは桁外れにちがう。紅菜の体をおさえこむようにして抱きついてきたその妖かしに紅菜は落胆の色をかくせない。

（またか・・・）

「味見させてくれたらかんがえてもいいよ」

あるいはとか、抵抗もせずにいる紅菜の首筋を舐めてきたのだ。しかも、尻までさわっている。紅菜のなかのなにかが豪快にきれる音がした。紅菜の目の色がかわる。

「ぶち？」

妖かしはへんな音がどこからきこえてきたのかわからず、首をかしげる。紅菜は自由な手をそつと妖かしの背中にまわす。すると妖かしの腕がだらんと落ちた。自分の意志ではもうあがらない。

「な、なにをした」

意味がわからないという感じでいった。その者から紅菜はそつとはなれる。紅菜の顔がかなりいつてしまつている。凶悪といつ言葉ではいささか控えめなようなきがしたりするのだが。

「地道に探すのはやめだ」

そして、無表情な顔に怒りをつかながら妖かしの胸に手をおく。そして、どきつとするような妖艶な笑みをうかべた。本人はもちらん意識してやつていてるわけではない。

「な、なにをする。あつ、はなしを俺ならやくつ」

青白い顔でおびえながらいうその妖かしにかける言葉は「もういい」という冷たいものだつた。紅菜が手をはなした瞬間、その妖かしがきえていた。後にのこつたのは灰色の塵の山だけ。それも、風にながされてちいさくなつっていく。

「芽衣果、昂摩を狩りだせ」

紅菜は“探しだせ”ではなく“狩りだせ”といつた。怒りがおさまらない紅菜はもうすでに昴摩にやつあたりする体勢にはいつている。言葉にもそのことがあらわれていた。

わゆう、と鳴いて芽衣果は紅菜のもとからはなれていく。上空で鼻をぴくぴくさせたかとおもうと「ン」と鳴いて狩りのはじまりを主につたえる。そうして、西へと飛んでいった。

「ただですむとおもうなよ」

とんでいつ芽衣果を紅菜はおいかけた。芽衣果も紅菜がついてくるのを確認しながらうじていて。さて、昴摩はほんとうにいまの紅菜に会いたいであろうか。普通の者ならまずさけるであろう。芽衣果をおつて一刻たらずでそれらしき建物のまえにきた。芽衣果は建物のなかにはいつていく。狩りだせといつてあるから狩りにいつているにきまつていて。ここにまつていればつれてくるだろう。たどりついたその城は山の頂上をけずつてつくつたようなところにたつていて。何段にもなつていてその城は地上ではお田にかかるないような建造物だった。

(ここにいるのか)

鬼族の王の家。どうじに昴摩の実家といふことになる。紅菜は昴摩が夜叉つまり次の王であることをしつていて。はじめて会つたとき昴摩が正直に夜叉だと名のつたのだ。本来なら、時期王であることを名のらないものだが堂々とそうなり、自分についた名はならなかつた。

そのことも紅菜の興味をひいた原因のひとつだつたかもしれない。興味があつたからこそばにおいてみようとおもつたのだ。

「しかし、ここでゆつくりともいかないようだ」

自分をとりまく不穏な動きを感じとつた紅菜はそういうてたちあがる。座つてまつているつもりだつたが、なかなかそういうかない。三大妖族のひとつ、鬼族のお膝元で不審な者をほおつておくわけがないのだ。

紅菜の言葉をあいずに数え切れぬ妖かしや物の怪があらわれた。

妖かしは妖獸もつれている。地に四本の足をつけたものたちはガルルウと警戒音をたてている。

「地に足がついているな」

妖獸の綱を妖かしがはなした。いつせいに妖獸が紅菜にむかつてきた。紅菜はそういうと平べつたい円を口にふくんだ。それを歯ではさむとたかだかに音を鳴らす。ピイイといつ音に幼獸の足がいつせいにとまる。

（獣笛もつてきといてよかつたな）

紅菜はそうおもうとさらに音をならした。丸い形の中心に穴があいていて口に含んで鳴らすその笛は菜稚琉のものを拝借してきたのだ。

一回目の笛の音に妖獸がむきをかえる。そして、自分たちの主や物の怪を襲いはじめた。

獣笛は地に四本足をつけている獸を操る笛で、神獸、聖獸、妖獸、魔獸に關係なくいうことをきかすことができる。形が奇妙なせいか音を鳴らすことはむずかしいこの笛は紅菜にとつて幼いころの遊び道具のひとつだ。だから、なんなくつかいこなすことができる。

一匹の魔獸のもとへかけよるとその背にとびのる。そして、その魔獸の耳に獣笛の音をきかす。紅菜ののつた魔獸は一匹だけ岩をかけあがり山の頂上をめざした。紅菜は風をうけながらその場をあとにする。

（ああ、気持ちいい）

やはり自分の足よっこりつづく獸に乗つていくほうが楽で風が気持ちよかつた。

昴摩はいぜん部屋に閉じこめられていた。部屋のまえにはふたり見張りがたつていて。あいつのいつた言葉が頭からはなれなかつたが、紅菜は螢蘭のそばにいる。不用意に紅菜にちかづけば螢蘭に殺されおわりだらう。

昴摩はそのほうがいいとおもつた。手間がはぶける。それが昴摩

の正直な気持ち。ここからでることもできないのにそんなことをかんがえる自分がおかしかった。そばにいないと独占欲で狂いそうになるのに母上にしばられて動けない。そんな自分を嘲うしかなかつた。

紅菜が自分を追いかけてくるとはおもえなかつた。いつも追いかけて必死につかまえているのは昴摩のほうだ。

急に外が騒がしくなつた。なにがおきているのか、おもわずきになるほど外はさわがしい。昴摩は体をおこして、扉をみつめる。するとしばらくして物音がきこえなくなつた。

（なにがあつたんだ？）

不思議な目で扉をみているとバンッと音をたてて荒々しく扉がひらいた。そこにいたのは凶暴な牙をした狐。尻尾は六本だから九尾の狐ではない。狐系のものの最高級は九本のものだ。九尾の狐とよばれるそれらは人の形に化けることもできるゆいいつの狐の妖かしだ。

「なんで、こんなもんが」

狐は鼻をくんくんと動かすといきなり昴摩にむかつてきた。昴摩はあわててそれをよける。壁をつき破つた狐は体勢をたてなおすとさらに昴摩にむかつてきた。

「くっ」

おおきくひらいた口を昴摩は両手でうつとめる。困惑しながらも冷静にその狐を観察した。

（だれかに使役されている・・・・管狐か）

紅菜は生き物を使役してはいらない。ではだれが主なのか。使役している者を探つて気をみたが、しらないものだつた。

管狐は大きくあけた口に靈氣をためるとそれをはなつた。昴摩は間一髪でよける。管狐ははなつた靈氣とともに昴摩につつこんできた。腹の真ん中に衝撃をうける。

「がつはッ」

管狐の攻撃は凶暴だが、殺すきはないのだろう。急所をはずして

いる。そう、たとえるならものすごく優秀な獵犬に獲物として狙われているような気持ちになつた。

「だれだ。こんなの送りこんできやがつたのは」

昴摩にはまつたく心あたりがない。邪気のないその力は身内の者ではないし、かといって紅菜や螢蘭ともまつたくちがう。もちろん、柏や円融の可能性も示唆したがちがつた。

管狐は吹き飛んだ昴摩のうえにのると昴摩の喉を前足でおさえつける。器官がふさがり昴摩は呼吸をうばられた。普通ならおかしい行動だ。獸は首を噛みきり殺すようになつていて。

（やつぱり、こいつオレを生かしてとらえるきだ）

身丈ほどあるその管狐に昴摩はなすすべをなくしかける。死んだふりをすればはなれるかとおもつたが、耳がしきりに動いていることをみて無駄だときづく。こいつは昴摩の心音をきいているのだ。

（いつたいだれだよ。こんな調教したやつ）

なかなかこんなふうに調教することはむずかしい。魔王も狩猟用の魔獸をもつてゐるが、こんな微妙な心音のちがいまできいて狩りをするようなことはできないし獲物を無傷で捕らえる努力もしないだろう。しかし、こいつは傷すらつけず獲物を主のもとへつれていくつもりだ。

目がかすんで意識を失くしかけたとき、管狐の顔がちがつた。すると一瞬、懐かしくも愛おしい匂いがふわりと鼻孔をくすぐつた。だれがこの管狐をしむけてきたのかその香りがおしえてくれた。

それが安心をもたらしたのかそのあとに昴摩の意識はなくなつた。管狐は獲物が動かなくなつたことをたしかめると傷をつけないようにくわえ。その場をあとにした。

城のなかについた紅菜は暴れまわっていた。鬼族全体に喧嘩をうつてゐるのだ。妖かしは力がすべてだ。力の強い者にしたがうのがここでの自然の流れ、規則だ。紅菜は鬼族に喧嘩をうり、鬼族の王つまり黒鬼魔王をひきずりだす予定だ。

今回のようにたびたび口をはさまれて昴摩をつれていかれてはかなわない。しかも、それにじょうじて自分に稽古をさせようとする輩までいるのだから紅菜にとつてはたまたものではなかつた。

なら、自分のほうが力がうえだと教えこませて金輪際でをだせないようにするのが賢明な判断だといえるだろつ。

最初は大人しく芽衣果がもどつてくるのをまつていようとおもつたのだが、したで見張りの者にからまれそれを一掃してしまつたのだから、喧嘩を売つてしまつたもおなじようなものである。

そこで、紅菜はかんがえを改め、全面的に喧嘩をしかけることにした。昴摩の所有権がだれにあるのかはつきりしたほうがいいとおもいなおしたというわけだ。螢蘭にも菜稚琉にもいつさい口だしさせるきはない。妖王にも手だしを許すつもりはない。

（あれの所有者は私だ）

魔獸をしつかりと足ではさみ振り落とされないように自分の体を固定する。“時雨”をかたてに紅菜はむかつてくる者、はむかう者をなぎ倒していく。もともと菜稚琉の修行は一対一の対戦よりも団体をひとりでかたづけることを中心にしている。つまり、戦いなれているのだ。

紅菜は絶好調だ。ついこないだまでびつしり稽古をつけられ、ましてや菜稚琉よりも鈍足な者たちはとまつてみえるといつてもいいくらいだ。

「むかつてこないなら殺しはしない」

強さをみせつけたあと紅菜はそういうて威嚇する。次々と雪崩のように攻めてきた敵はうそのように動きをとめた。

（芽衣果は昴摩をとらえたかな・・・）

紅菜は尻ごみしはじめた敵をみながらおもつた。予定を変更してここまでてしまつたが、芽衣果なら大丈夫だろつ。そのときだつた人影から高速でなにかがつっこんできた。

ぎやああああ。

魔獸の咆哮がきこえるまえに紅菜はそこから飛降り着地すると胴

体を守るように“時雨”を盾にした。キイイと響く音とともにその者の正体がわかつた。どこか雰囲気が昴摩に似ている。昴摩は父親似なのかもしれない。

「さすが夜叉様の惚れていらつしやる方だ。規格外の人ですね」
「何者だ」

刃を交えたまま会話をする一人は大勢の人とかこまれていた。紅菜は質問をしておいてそのまま大人しく返事をまつきはない。まじえた剣の力の流れをそらすと反対に傾いた相手の体を力のむきにあわせて蹴る。おもつたとおりに体は横に飛んでいった。

「はははは、やっぱりおもしろい人だ。私は黒鬼魔王の一七番目の王子。きりゅう鬼柳です」

昴摩が何番目の王子かしらないが、つまりこいつは昴摩の兄か弟になるというわけか。

(殺していいのかな)

紅菜はどうしたものか判断しかねていると、鬼柳はふみこんできた。かんがえるよりさきに体はその攻撃をよけた。そこは風圧でまつぶたつになつていて。刀で受けてはいけないようなきがしたのだが、正解だったようだ。

(ちつ、妖氣か)

それを横目で確認しながら心のなかで舌打ちをうつ。さて、ここからが問題だ。今までのやつらは鈍足だったおかげで相手が力をつかうまえに始末できたから体術だけで勝てたが今度はそうはいかない。紅菜の武器は体術、剣術と魄気だけだ。魄気をどれだけ駆使できるかが勝負の鍵となるわけだが。

(わるいが、もしかしたら殺すぞ。昴摩)

心のなかで断りをいれると紅菜の目の色がかわる。本気になつたその瞳は獲物をとらえるとまとう雰囲気までかわつてしまつ。ぞくりとするほどの紅菜の気配にまわりは凍りつく。美しすぎる容貌のせいで真剣な顔になると相手には畏怖しかつたえない。

紅菜は時雨をかまえなおしふみこもうとしたとき、鬼柳は刀を捨

てた。両手をうえにあげて紅菜をみたままいつた。

「やめましょ。私は命がおしいですからね」

そういうて笑いかけてくる鬼柳を紅菜は疑惑の目でみつめる。なにをかんがえているのかわからなかつた。しばらく、睨むように観察して紅菜は時雨を鞘におさめた。時雨も紅菜のその判断を拒否することはない。靈刀や妖刀は主の危機になることに敏感だ。

「で、私をどうするつもりだ？」

外面用の紅菜のほほ笑みに鬼柳は顔を真つ赤にそめた。さきほどとはちがつた意味の悪寒が体をはしつた。夜叉がすべてを捨ててでも欲しいとおもつた気持ちがわかつた。

鬼柳は紅菜の手をとる。紅菜の手は驚くほど柔らかくすべすべでそれでいてすこししつとりと肌にすいついてくるよつななんともいえない触感だつた。そのことにも鬼柳はおどろいた。この手で刃をふりまわしたり人を殴つたりしているとはとても信じがたい。

「私の客人として丁重にあつかわせてもらいますよ」

紅菜は鬼柳の頬にそつと手をあてるとさらに妖艶にほほ笑む。そして、鬼柳にいった。すこし声も艶をふくんでいる。鬼柳はさらに真つ赤な顔になり惚けたように紅菜の瞳をみつめかえしている。

「信じていいんだな？」

「ええ、もちろんです」

最近、菜稚琉や螢蘭にやられてすつかり調子が狂つていたが、ここにきてやつと紅菜は本領發揮という感じだ。

「道をあける。私の客人に無礼をはたらくことは許さない」

鬼柳の言葉を合図にしたように道はひらき、鬼柳は紅菜を保護するように腰に手をまわしてきた。その態度に紅菜はおもわず昂摩とくらべてしまう。

（お、こいつの方がなれている感じだな）

どこかしら大人の男の余裕をかんじるその態度に紅菜は大人しくしたがつた。まわりに睨みをきかせて“オレの者だ、手をだすな”という昂摩の態度とはまったくちがう。紅菜はいちいち注意するの

もめんどうなので好きにさせていいが。

黒鬼魔王はそのころ部下から報告をつけていた。紅菜がこの城にやつてきてのことそして、魔獣をあやつり暴れていることに恐怖を覚えていた。もちろん、夜叉が連れ去られたという報告もはいつているが、優先順位はやはり前者である。

「無傷でとらえよ。かすり傷ひとつ、けつしてつけではならん」

命じられた部下たちはおもいのほか深刻な王の言葉におどろきあわてて部屋をでていった。黒鬼魔王は王座の椅子からたちあがり、身をひるがえして家臣をのこして部屋をあとにした。

「魔王様いかほどにいたしましょう?」

事情をよくしる家臣のひとりが心配げに黒鬼魔王にきいてくる。黒鬼魔王は奥歯をかみしめた。自体は非常にやばいことになつてゐる。

の方との約束をやぶつてしまつてゐるこの状況は非常にやばかつた。自分の命だけのはなしではない。の方が本気で怒れば鬼族の一いつや一いつ滅亡することなどたやすいことだ。

「使いをやれ、こちらの不手際があつたと侘びをさきにいれるんだ」「はい、急いで使いにいきます」

家臣自ら使いにいかなければならぬほどの人だつた。家臣は慌てて走つていく、魔王をのこし走り去るような無礼を働いてゐるが、そんなことをいつてゐる場合でない。

桜雅族があの方々の保護区にあるとしつていながらかるはずみな欲に負けて殲滅してしまつたことがあつた。祖父母の代にはなしだけできいていたせいもありあまり信じてなかつたことも原因のひとつだ。

討伐にたつた者たちは螢蘭の手によつて惨たらしく殺されている。黒鬼魔王の自分でさえ手も足もせず、虫の息になつてしまつた。そこを助けてくれたのは菜稚琉であつた。いや、助けられたのではない。利用価値があるからいかされたのだ。

螢蘭の正体は詳しくはわかつてない。しかし、三大魔王の者なら

だれもがこの名をしっていて。魔王であっても魔界で螢蘭にはむかうことはできない。圧倒的な力をもち、魔界のすべてを支配する者だと祖父、父からきいている。

（くそ、急いで保護し螢蘭様のもとへおわたししなくては・・・）
螢蘭は紅菜が夜叉と会うことちがづくことさえ許しはしないといつた。もし、やぶつたときはどうなるかわかっているなどもいつたのだ。の方の意向をやぶればそのときにまつてているものは惨たらしい死しかない。

家臣がばたばたと断りもなく部屋にはいつてきた。そして、恐怖に慄いた顔で床にへばりつくように頭をさげると報告をはじめた。
「紅菜様、みつかりました。無傷であらせられます」
その報告に黒鬼魔王はすこしでもほつと安心する。しかし、まだこれからが勝負だ。すばやく菜稚琉、螢蘭、ふたりのもとへもどさなければならぬ。

「どこにいる。私じきじきに紅菜様をおつれする」

「そ、それが、鬼柳様のお部屋においかれになられました」
あまりにも動転しているのだろう家臣の言葉がへんだ。しかし、黒鬼魔王はそんなことにならなかつた。不用意に自室へいれてしまつた息子への苛立ちが先立つ。それだけではない。

「あの馬鹿者たちめッ」

そういうて黒鬼魔王は鬼柳のもとへと急いだ。王の苛立つ雰囲気と自分たちのおかれた立場の危うさに家臣たちは祈るよう王の後ろ姿をおくつた。

夜叉が人間の女に現をぬかしていることがただたんに問題なように装つてはいるが本当のところは紅菜に手をだしてしまつてはいるところがいちばんの問題なのだ。

魔界の門のまえ。柏はそわそわと落ち着かないでいた。それは表情だけではなく体までそわそわと動いてしまつてはいる。菜稚琉や円融がどれだけいつも心配で心配でしかたないといったようすだつ

た。

「柏、大丈夫ですよ。蒼にも螢蘭にもいつてもらつてゐるんですから、六度田の菜稚琉の言葉。しかし、柏の気持ちはおちつぐ」とはな
い。

「すこし、廁にいってきますね」

柏や円融たちにそういうてその場をあとにした。かなりはなれた岩陰のところまでいくと菜稚琉は声をかけた。

「黒鬼魔王の使いですね」

その言葉に岩陰から姿をあらわしたのは黒鬼魔王に使いをいいわ

たされた家臣だ。ひざをつき菜稚琉の顔をみないようにして家臣は「はい」といつて黒鬼魔王の言葉をつたえる。

「こちらに不手際があり、御方の身をあずかつてあります。速やかにこちらにおもどしいたしますので、どうかこのたびのこと穩便に収めてもらいたく、参上しました」

菜稚琉は黒鬼魔王が自分になにを期待しているのかわかつた。つまり、暴走した螢蘭をとめてほしいということだ。

「穩便にですか?いいでしょ。そのかわり……」

菜稚琉は交換条件を家臣につけた。内容を説明すると家臣は困惑した顔をしたが承諾しないわけにはいかない。しかし、魔王になにもいわす承諾することはできなかつた。

「でわ、魔王におつたえしておきます」

それだけいうと家臣はきえていった。菜稚琉は自分の背後に声をかけた。

「きいていましたか?」

「いいえ。残念ながらきこえませんでした」

そういうてでてきたのは円融だ。円融は残念そうな顔もせずにいつた。いや、表情をよまれないようにしているのだ。

「なにか用があつたから追つてきただよ?」

「いいえ、遅かつたのでなにかあつたのかと心配になつてみにきただけです」

「けしゃあしゃあと円融はのぐる。こっさいこままでそこにいた男のことをきこいつとはしない。菜稚琉はそんな円融にこれまたなにをかんがえているかわからない顔でこたえる。

「心配をかけましたね。私は用ができましたから、あなたは柏についてあげてください」

菜稚琉はそういうと管狐をだし、おおきくなつたその背中にのひのひそこをあとにした。円融は菜稚琉の姿をみおくりながらやはりこちらも本心がわからないような顔をして柏のもとへとむどつた。
(まつたく、あの子は昔からああだから困ります)

円融の行動と表情がよめいないあの顔をおもいだしながら菜稚琉はおもつた。そして、連絡用の管狐をとりだすと螢蘭に連絡をとる。
「螢蘭、蒼とは合流できましたか」

管狐は螢蘭の声で返事をかえしてきた。

「ええ、合流したわ。なにがあつたの?」

「使者がきましたよ。やはりあのとき殺をなくして正解でしたね」

十何年まえのことをいう菜稚琉に螢蘭は「やうね」とかえすしかなかつた。螢蘭としてはいまからでも殺しにいきたいのだが、菜稚琉は「殺すな」といつてくる。やうなると殺せないので今回も見逃すことにする。

「それとあの坊やを保管場所に使おうとおもつてているのだけビ・・・

「それは相談じゃないでしょ? 決定よね」

菜稚琉の言葉に螢蘭はあきらめたようにこいつた。そんな螢蘭に満足そうにほほ笑むと「やうよ」とこいつてはなしをつづける。

「あの坊やが適役でしょ? あなたもそつおもうからあの坊やから血をとり、術をかけたのでしょ?」

菜稚琉のすべておみとおしですよとこいつこかたに觀念したように螢蘭はこいつた。

「で、これからどう動くつもり? 私はこのまま手書きおり動いていいんでしょ?」

「ええ、それでお願いします。ああ、それと火種役を殺してはいけませんよ。彼にはまだまだ働いてもらいたいなすからね」

「はいはい、わかりましたよ・・・・・・こうなるのも予定どおり?」

螢蘭の言葉に菜稚琉はくすつとほほ笑むと楽しそうにいった。

「なに」とも臨機応変ですよ

「はいはい、そうですか。こっちも臨機応変に対応するわ

そういうて螢蘭は管狐をしまつてしまつたようだ。菜稚琉も管狐を髪飾りにしまうとにっこりわらう。

「いそいで帰りますよ」

管狐にそういうと菜稚琉は昔、紅菜がとりこまれた桜のもとへといそいだ。菜稚琉の衣のなかには螢蘭からあずかつた紅菜の血の結晶がある。昴摩の体からとりのぞかれたその血の結晶は彼には邪魔なものだ。

紅菜はとおされた部屋でくつろいでいた。目のまえには人間界の食べ物がならべられている。しかし、食べていいいものか悩んでいた。こういう場合、食べていけないというのが決まりなのだが。「遠慮しないでください・・・といつてもそういうわけではないでしょうが

紅菜はそれに返事をかえさずに長椅子によこになる。衣の裾から細い紅菜の足がのぞいた。そこには真っ赤な血のかたまりがあつた。鬼柳は目がはなせなくなる。血の赤と白い肌の対比は妖かしくても魅力的だ。

「怪我、なさいいるんですね」

その言葉にはじめて自分が怪我をしていることにきづいた。脹脛のところに線をひいたようなかすり傷がある。

「たいしたことない」

紅菜はそこたえる。しかし、鬼柳は紅菜のそばに腰をおろして傷のある足にふれた。ふれる手がやはりこなれている。はじめて私にふれた昴摩の手はふるえていて純粹だとおもつたのだ。なんだか

遠い昔のようだ。

「あなたを奪つてもいいですか？」

鬼柳が紅菜の瞳をみつめていつてきた。紅菜は表情を崩すことなく鬼柳の瞳をみつめかえす。男にも女にも口説かれ慣れている紅菜は冷静そのものだった。

（口説き方もしっているんだな）

紅菜は鬼柳に対しての評価を心のなかでする。しかし、本氣でないことはわかつていて。昴摩にたいしての敵対心を必死に隠そうとしているのを紅菜はみぬいていた。

「くす、本気ならかんがえる余地もあるがな」

紅菜のその言葉に意外そうな顔をしておどろいている鬼柳に紅菜はさらに言葉をかけようと口をひらひらとしたら、とつぜん部屋の扉がひらいた。一人がみるとその人物は真っ青な顔をしてかたまつている。

「黒鬼魔王」

鬼柳の言葉に紅菜はかたまつたままの男をよく観察する。

（やつぱり、よく似てる）

黒髪に金の目の黒鬼魔王は渋みがあるいい男、できる男の顔をしていた。しかし、顔立ちの基本は昴摩とおなじようにおもえる。そして、紅菜はすこし夢をはせた。うまく成長すればこんな感じになるのか、想像すれちよつと楽しい。まあ、五〇年そこそこしかいきられない人間の身である紅菜にはみることが叶わないだろうが。

「な、な、なにをしている！」

黒鬼魔王の怒鳴り声にちかい悲鳴に紅菜は抑揚のない平坦な声でこたえた。

「口説かれていた」

その言葉に黒鬼魔王はさらに真っ青になつてたおれてしまった。紅菜のそばにいた鬼柳はあわてて黒鬼魔王のもとへ駆けより人をよんだ。

寝床に運ばれた黒鬼魔王のもとへ家臣がちかよつてきた。使いに

だした家臣だつた。家臣は魔王の耳元へ報告をいれる。その報告をきいた黒鬼魔王は心労で死んでしまいそうな顔になる。

蒼は螢蘭について鬼族の城のなかに潜伏していた。螢蘭にふれると殺されるので距離をとつてはいるがからずそばについていた。城のなかはばたばたとしていて、乱れている。さつきほど下つ端から女が暴れているときいたが、きっと紅菜だろ。

紅菜なら黒鬼魔王に喧嘩を売つたとしてもなんら不思議なことではない。いや、紅菜なら間違いなくやる。天上天下優雅独尊を地でいつている紅菜のことだ歯むかう者はつぶしにかかるにあつている。

「おい、あつちにいつたぞ。夜叉様をお助けしり」

「武器だ。もつと武器をもつてこい」

「人もたらん。応援はまだなのか」

あちこちできこえる言葉に蒼は大変そうだなと同情の念までうかぶ。菜稚琉と螢蘭の会話から推測すると一人は、というよりも菜稚琉は鬼族を利用してなにかしようとしている。自分に預けられたものもきになる。

「夜叉様のほうは六尾の狐だ。魔獸が女のほうでもうそれはいい」もれきこえてくるその言葉に蒼は紅菜のほうはなんらかの解決をえたのかとおもつた。紅菜がとらえられたとかんがえるほうが自然だ。

「螢蘭様、いそいだほうが」

「うつさい。だまつてついてきたらいいのよ。あんたは」

蒼は紅菜の身をあんじていつたのだが、螢蘭につめたくあしらわれてしまつ。その螢蘭の言葉に蒼は震える声で「はい」と返事をかえすだけで精一杯だつた。

（もう、俺やだ）

螢蘭のうしろ姿をみながらおもつたが、逃げることは許されない。菜稚琉にたのまれたものはどうやら螢蘭にはあつかえないものらし

い。それに菜稚琉が用意したものだ紅菜の役に立つものにきまつて
いる。

(やういえは、紅菜の飼い魔つて夜叉だつたよな)

盛智のあつめた情報をおもいだして蒼はかすかにきいえてくる会
話に頭をはたらかせる。鬼族の時期王が紅菜の相手だときいたとき
はおどろいた。妖かしが相手だというだけでもきにいらないのにど
うして鬼族なのだと。

螢蘭は廊下の角をまがつた。それについていこうと走りだそうと
したとき、とつぜん壁が破裂した。穴があいたそこには大きな六尾
の狐がいる。その口には緋色の髪をした鬼がぐつたりとしていた。
整つた綺麗な顔は妖かし独特のものだろう。

(あ、こいつ)

六尾の狐は尻尾をうごかし、耳をぴくぴくさせると首をふつてあ
たりをうかがうよつた仕草をみせる。それから、一矢をみつめるよ
うに大人しくなつた。

(なんだ?)

不思議におもつて蒼がみていると廊下をまがつて姿をけした螢蘭
がもどつてきて、蒼の頭を拳骨で殴つた。

「くづくづくづく」

蒼は殴られた頭をおさえるとしゃがみこんだまま螢蘭をみつめる。
すると苛々とこらついた螢蘭は手を拭きながらいった。

「はやくきなれ。あんまりつかいものにならないと殺すわよ、あ
つさつ」

「で、でも、あれ」

蒼はそういつて六尾の狐を指さした。螢蘭はさわれた指先をみる
となんでもないようになつた。

「あんなのどうでもいい。いやぐわよ」

そういうて頭をおさえたままの蒼をのこしてわざといつてしまつ
た。蒼はきにしないように背をむけると螢蘭をおいかけた。これ以
上、手間をかけさるとほんとうに殺されてしまうかもしねない。

つねに心に抱いていた。私たちの懷に抱かれたあの子をみながら、それほどの罪をおかしてしまったのかと。

父母の愛を証明するようにうまれてきた子は同時に父母の罪を証明するよにうまれてきた。友は打算的なかんがえがまつたくなく信じられないほど純粹で汚れがなかつた。そんな友を陥れた男の子供を愛せるとはおもつてもいなかつた。

しかし、うまれてきた赤子は愛らしく利発で愛をすにはいられなかつた。そして、なにより子供は友にそつくりだつた。そんな子供にそらくあたるようなことはできなかつた。

その子を腕に抱きその子に愛をそそげばそそぐほど、それが罪だつたのかわからなくなる。たとえそれが許されない者同士であつてもそれほどの罪であつたのか。

愛しているいまでも、いやときがたつほどに愛はふかまつていつた。悲しませたくない、困難なものをとりのぞいて、真綿にくるむよに大切に大切に守つてあげたいとおもいほど愛している。

「この桜もだいぶんとたちましたね」

狂い咲いているこの桜をみながら菜稚琉はいつた。これは螢蘭が遠い昔に紅菜がはじめて歩いた記念だといつて植えたものだ。この屋敷にあるものはすべて紅菜の記念だといつて螢蘭がつくりたり植えたりしたものがほとんどだ。

「そろそろですね」

菜稚琉はそういうと空をみあげた。しばらくすると空から六尾の管狐が姿をあらわした。人の二倍はあるその管狐は地に足をつけるとくわえていた者をおろす。そして、小さくなると主である菜稚琉に顎をすりよせる。この子の癖だつた。

「紅菜のゆう」ともききちんときいてくれたのですね」
ねぎりうつむけ菜稚琉は管狐にいって髪飾りにむどした。この子

の寝床はこま紅菜がもつているのでゆっくり休ませてやる」とはできない。

「さて、どうしましょうか?」

いい感じに眠っている(氣絶しているのだが)鬼の坊やをみて菜稚琉はいった。螢蘭からいつ連絡がくるかわからないから、いそいだほうがいいのだけれど。

菜稚琉は池に手をむけるとふりあげた。水は菜稚琉の手に反応するように水柱をつくり菜稚琉が手をさがると同時に鬼の坊やに勢いよくふりそそいでいた。その水流はものすごいく、あたり一面をのみこんでいつてしまう。桜もおなじように被害をつけたが、とうさに飛びたつた菜稚琉は被害なしだ。

(やつぱり、たまに力をつかうところなことありませんね)

菜稚琉が螢蘭や紅菜のように力をあまりつかいたがらないのは加減がまつたくといつていいくほどできないから。このまま力にたよつた戦い方をすればよけいな死体がふえてしまつ。それを防ぐための苦肉の策が体術、剣術、弓矢だった。

水の勢いにまけて流されていく鬼の坊やをみつけて菜稚琉は「あらあら」とのんきな声でいうと髪飾りから管狐をだした。空中でおきくなつた管狐の背中にのると鬼の坊やの腕をつかんでひきあげた。

鬼の坊やはげほげほと水を吐きながらせきこんでいる。それを見て菜稚琉は「きがつきましたか」とおだやかにいった。なぜこんな目にあつているのかわからない昴摩はみたこともないその顔を苦ししそうな目でみつめていた。

「ここは? オレどうして・・・」

「溺れていたので助けました」

首謀者の菜稚琉は自分にはまったく被がないというようにいい。

そして、水がひいた桜のもとへおりたつた。それから自己紹介をはじめる。

桜は水にのみこまれたといつのに花を散らすことなく咲き誇つ

たままだ。それでも、桜からはぼたぼたと雪がおちる。

「私は紅菜の保護者です。菜稚琉ともうします」

昴摩はどう判断していいのかわからないといつ声で「保護者」とつぶやいた。そんな昴摩に菜稚琉はさらにわかりやすくいつた。

「螢蘭とおなじですよ」

その言葉に昴摩はぎょっとすると急に背筋をのばした。そして、あらためたような声をだしていつた。

「オレになんのようですか？」

紅菜がいればおもしろい顔をしてみているに違いないが残念なことにここに紅菜はいない。菜稚琉は親しみやすい笑みをうかべると親愛の情をこめた声で昴摩にいつた。

「そうかたくならぬ。螢蘭が酷いことをしてしまったのでしょう？　あの人はどうもすぐに暴力にうつたえる癖があるみたいで」そして、すこしこまつた顔をして「困っているのよ」とほほ笑んだ。昴摩はそんな菜稚琉に「はあ」とあいまいな笑みをかえす。“癖”といった菜稚琉もそうとうなものだが、昴摩はきづかない。

「あなた、紅菜のそばにいたいと本気でおもつていますか？」

不意に真撃な声になつた菜稚琉はそいつて昴摩にといかける。昴摩はきゅうに雰囲気がかわつた場の空気に緊張した面持ちになる。この場を支配しているのは菜稚琉だった。

昴摩はしづかに両蓋をどじそこへ紅菜の姿をおもいつかべた。髪の艶、肌の透明さ、唇の形や色、睫毛の長さや曲がりかたまで鮮明に紅菜の姿をおもいだすことができる。

母親の影に支配されて動くこともできず、それでもおもいつづけてしまうほど愛おしい人。それが、紅菜だった。紅菜の支配がなくなつたことがこんなにも心を弱くする。紅菜に使役されたままであつたなら、母親をふりきることもできたかもしれない。

昴摩は金色の瞳を菜稚琉にむけるとしづかに誓うように願うようになづいた。

（まあ、きれいな目をするのね）

菜稚琉は昴摩を值踏みしていたのだ。家から飛びだすこともできず、ましてや母親の言葉にしばられ身動きがとれなかつたこの鬼の坊やにさほどの期待はなかつた。紅菜がおもつだけの男なのかともおもつていていたくらいだ。

「あなたは紅菜につかえたいとおもつてているのですね」

菜稚琉の言葉に昴摩ははつきりとした声でこたえる。しづかにおもく声はおどろくほど自分のなかに響いた。

「はい」

菜稚琉は昴摩の魂魄の素質を冷静にみる。螢蘭がかけた術はあくまで補佐的なもので耐えられるか耐えられないかは昴摩自身の問題になる。菜稚琉は螢蘭から預かつてきの紅菜の血の結晶をとりだしてみせた。昴摩の体からとりだされた永久の使役の証。

「これをふたたび体にいれれば紅菜の使役をえることができます。しかし、これにすがるよつではあなたが紅菜のそばにいるにあたいる男だとは認めません」

昴摩は菜稚琉のその言葉に自然と喉がなる。緊張のせいか喉が渴いてかすれた声がでた。

「なにをすれば認めてもらえますか？」

紅菜を守り育ててきたのがこの一人だといつことは充分わかつている。紅菜からの言葉も螢蘭が紅菜にむける瞳や態度。そして、いま目のみえにいる菜稚琉さえも紅菜のことを深く愛していることがわかる。

「あなたはあなたのまま紅菜を助けることができたなら認めてあがます。妖かしのままあなたが紅菜のそばにいれるのなら認めてあげます」

そのおかしな言葉に昴摩は困惑の瞳をむける。紅菜は崇高な魂をもつてている。それゆえに昴摩を拒絶してそばにいつづけることがかなわないのだ。不浄なものを浄化しようと排除しようと術がかけられているから。力の強い者ならそれでも紅菜を食おうとすることができた。しかし、昴摩は紅菜を食いつくしたいわけではない。そば

にいたいのだ。

「それは無理です」

昴摩は菜稚琉にいった。菜稚琉は昴摩がなにをかんがえているのかわかる。通常ならそうかんがえてもしかないが、菜稚琉は全貌を教えてやるきはない。だつて、可愛い紅菜を搔つ攫つていつてしまふであろう男に親切にしてやれるほど心はひろくないのだ。

「では、あきらめなさい」

意地悪しているというのは充分わかっている。でも、意地悪でもしていないと悔しくてしかたないのだ。はじめて紅菜が自分でえらんだ相手だから。

「あなたからそれを奪つてでもオレは紅菜のもとへかえる」

そういうて、昴摩は戦闘的な目をむけた。菜稚琉はふと笑うと昴摩の姿に昴の姿をおもいだす。あのときまで自分たちはどんなことをしてでもとめるつもりでいた。柚羅乃の怒りをかつても、哀しみに暮れる姿をみるとことになつても、どんなに憎まれてもそれでもいいとおもつたのだ。

そのおもいを打ち碎いたのは昴の姿だつた。苦しみながら傷つきながらそれでも二人のおもいをつらぬこうと守るうとした昴の姿に二人は迷いを感じた。その迷いはおおきな波紋となつてひろがり体の力をうばつた。

「この桜は紅菜がはじめて歩いたときには植えたものです。この桜にはあの子の魂の一部が封じこめられていく」

菜稚琉は極上の秘密をかたるようにはなしあじめる。昴摩はおとなしくきいていた。

「あの子の魂はいまの体では対応しきれない。だから、私たちはこうして紅菜の魂を別にうつして保存しているのです。あなたもこの桜のように紅菜の魂をうけいれてくれますか？」

菜稚琉の言葉に目をまるくすると昴摩は桜を見る。はじめて目にしたときからなにがあるとはおもつたが、まさかそんな秘密があるとはおもわなかつた。

「どんなに危険でもオレは紅菜のそばにいたい」

鼎摩の言葉にやはりあの男がかたなる。あの男もおなじよつなことをいつていた。

「はやくこきなさい。紅菜は黒鬼魔王のもとにます。紅菜をたすけてあげてください」

黒鬼魔王のもとに紅菜がいることにおどろくとあわててとびだしていった。いくら紅菜といつても黒鬼魔王に勝てるわけがない。もしかしたら死んでしまうかもしれない。魔王なら紅菜を殺して一度と転生できないようにその魂を食べてしまうにきまつていてる。

「ねえ、柚羅乃。あなたはこれでいいとおもいますか？」

菜稚琉は桜に身をあずけながらいた。まだすこし桜が咲くにははやいが、豪勢に咲き誇る桜は菜稚琉に花びらをふりそそいでいる。空は天高くはれわたり春の風がおだやかに菜稚琉の髪をゆらしている。陽射しは頬をあたたかくすべつていて。

紅菜はひとりぼつんと鬼柳の部屋にのこされていた。黒鬼魔王は気絶してしまってそのまま宙に運ばれてどこかへいつてしまつた。鬼柳も「すこしまつていてください」とひとりのこしきえてしまつたのだ。

暇をもてあましているといつ感じだ。いくらなんでも眠つている黒鬼魔王に襲いかかるわけもないし、かといつてどこにいくわけでもない。

（どうしようかな。芽衣果、もう鼎摩つかまえたとおもうんだけど・
・やつぱりだめだつたかな～）

芽衣果がゆうこときいてくれたのははじめだけだつたといつことだらう。ほんらいならもうとつくに紅菜のもとに鼎摩をつれてきてもいいはずだが、こないとこつじとは命令を放棄したといつことだらう。

衣から芽衣果の住処をとりだす。竹の筒であるそれに芽衣果をもどす方法すら紅菜にはわからなかつた。菜稚琉は筒をこん、こん、

と爪でならすのだが紅菜がおなじ」としても芽衣果はもじつてはこなかつた。

お腹もすいているし、寝不足だし、なにより退屈だつた。眠くてもこんなところでは眠れない。安心して眠れるところでないと紅菜は安眠できない体質だつた。といつことをのぞいても招かれざる客である自分がここで馬鹿みたいに熟睡できるわけがないのだが。（昂摩、おまえがはやくこないからわるいんだぞ）

紅菜は拗ねた気持ちで心のなかでつぶやくと仰向きになると額に腕をのせた。そして、おおきく溜息をつく。ほんらいなら魔界旅行といきたいところだつたがおもつたよりも事態はこみこつてこるようだ。

かた。扉がひらく音がした。それとともに鼻腔に化粧の匂いと焚きつけた香の匂いがする。そして、絹がする音も。男ではない女がはいつてきたのだ。簪の無機質な音もした。

「いまは女に口説かれるおぼえはないが

「なつ」

「無礼者つ」

紅菜はそいつてはいつてきた女を歓迎する。綺麗な人だけど冷たい感じのする人だつた。ひきつれた従者の一人が紅菜の言葉に目をつりあげなにかいおうとしたが片腕でそれを制する。

「おまえのような小娘どこがいいのか」

表情とおなじ感情のない冷たい声だつた。小娘よばわりされた紅菜は逆に楽しそうにわらつた。その言葉にこの女性が何者なのかわかつたのだ。

「さあ、私も一度きいてみたいとおもつてこいるところですよ。お母様」

紅菜の“お母様”といつ言葉に眉がぴくつと動く。そのことに紅菜は満足した。そして、挑発するように自分がやつた名前で昂摩のことによんだ。

「昂摩のお母様にお会いできるなんて一生ないとおもつてこりました

から、お会いできて光榮です」

紅菜は注意深く彼女をみた。緋色の田は冷たいまま怒りを潜ませている。妖氣はそんなに強くない。昴摩の妖氣が強かつたので母親もてつきりそれなりのものだとおもっていた。

（昴摩は身分の低い母親からつまれたのか・・・）

昴摩が自分のことをあまりはなしたがらないから、紅菜はほとんど昴摩のことをしらない。正直にいうと紅菜自身、昴摩の過去にあまり興味がなかった。昴摩でしつていることは“夜叉”であること、紅菜の一族を滅ぼした一族であることくらいだった。それ以外しる必要はなかつたからだ。

「口をつつしみなさい。夜叉は昴摩などといつわけのわからない名ではありますん」

夜叉を産んでいつきに奥方の頂点にたつた者の維持か言葉をつむぐ声は以外にも冷静なものだ。紅菜は夜叉とよんだことにひつかかりを感じる。そうよぶのが礼節的にもあつていいのだが。

「夜叉？ それは名前か？ なぜ昴摩の名をよばない」

紅菜の言葉に昴摩の母親の瞳がきつく鋭いものになつた。そして、おどろくようなことをいつた。

「夜叉に名などありません」

楽しそうな余裕を浮かべた紅菜の表情が険しいものになる。きつい表情はおなじ美人でも紅菜のほうがうえだつた。しかし、負けないものをもつてているのはたしかだ。

「名がない・・・そう、じゃあ。昴摩は私のものであつて、あなたのものではない」

「あなたのような滅びた一族が使役できるようなものではありますん」

ふん、と紅菜は馬鹿にしたように笑うとたちあがる。できる」となら昴摩の母親を傷つけるようなことはしたくない。紅菜は時雨に手をかけようとはしない。

「名もあたえないあなたこそ、昴摩のなにがわかつてているのか。疑

問におもひだ

紅菜は名をやつたときのことをおもひだす。あのときせどりして
そんなに新しい名をよひこんだのかわからなかつたが、いまわかつ
た。あのあと何度も何度も名をよんでくれとせがんできた昴摩の心
のなががわかる。

「剣をとりなさい。あなたさえ消えれば夜叉は田をさますでしょ」「
昴摩の母親の言葉に従者の一人が剣をわたした。それをみて紅菜
はしかたなく左手で時雨をつかむ。鞘をぬくと時雨の鍛えられた刃
がしづかなく、冷たい光をはなつた。そこにうつる紅菜の瞳も冷たい
光をやどしていた。紅菜はきづいていないが戦えることに体が高揚
感を抱きはじめているのだ。

「お母様、私は甘くはないですよ」

紅菜の言葉を合図に切りかかってきた。紅菜は片手でうけとめる
とそのまま鐔まで刀を滑らす。

「くつ」

「私の利き手は右なんです」

そういうとあいているほづの右手で昴摩の母親の手を手袋ではら
いおとす。刀が床におちるそのまま攻撃せず、紅菜はわざと間合い
をとつた。

「まだしますか?」

余裕の言葉。昴摩の母親だから手加減しているといつよりも獲物
を追いつめる快樂がないことへの失望感にちかこと起きづいてい
ない。

「その相手、私が引き継いだ」

渋い声がとつぜん一人のあいだにわつてはいった。黒鬼魔王だつ
た。紅菜はすこし歳のいった渋い顔をみつめる。そして、黒鬼魔王
にむきなおるといった。

「いいな。そつちのほづが楽しそうだ」

紅菜はそういうと戦闘的な瞳を輝かせる。獰猛な獣がみせる戦慄。
時雨を利き手ににぎりなおすと腰をすえてかまえる。紅菜の興味は

完全に黒鬼魔王につつてしまっている。上物の獲物をまえに体がよろこんでいるのを感じていた。

「いい目をするな。獰猛な獣の目だ」

黒鬼魔王の言葉に不敵に笑うと紅菜は着ている衣を脱ぎ捨てた。肩も腹も足すら露出した稽古用の服は戦いやしさを追求したものだ。衣が床におちきるまえに紅菜はしかける。黒鬼魔王は瞬時に刀を半分ぬきとると時雨をうけとめた。

火花が散り、刃の甲高い音がなる。腕力ではやはり紅菜のほうがおどる。黒鬼魔王は力技でそのまま紅菜を弾き飛ばした。紅菜は身をひるがえし着地すると時雨を左でにぎる。紅菜の武器は身軽さだ。つつこむように飛びつき空中で体勢をかえると黒鬼魔王の肩に手をついた。もちろん振りおろされた刃は左で防御している。そのまま落下するように体をおとして、刀をひるがえし背中をきろうとした。しかし、妖気によつて弾き飛ばされる。

瞬時に体勢をたてなおすよりもそのまま衝撃をうけたほうがいいと判断すると壁に背中からぶつかる。そして、いちはやくたちあがると黒鬼魔王に切りかかった。

（妖気はやつかいだな）

言葉とはちがい紅菜の胸のなかは興奮と快楽がうずまいていた。戦えることへの快楽と興奮。紅菜は自分の変化にきづきはじめていた。

紅菜が魔界にきて五日目になろうとしていた。魔界はなんらかの影響をあたえるのかもしれない。

螢蘭と蒼は観客にまじつて紅菜と黒鬼魔王の戦いをみていた。黒鬼魔王は螢蘭にきづいているが紅菜はまったくきづいていない。どうより、観客にまつたく興味がないのだろう。いま、紅菜の神経は黒鬼魔王にそそがれている。

紅菜は黒鬼魔王の横腹をねらつてけりあげる。しかし、足は黒鬼魔王の腕に防御されてきまらない。黒鬼魔王の拳が紅菜の腹を殴る。

紅菜は体が吹き飛ばされてしまつまえに左手で黒鬼魔王の腕をとらえた。吹き飛ばされなかつたせいで紅菜の体にはもろに衝撃がくわわる。

「くっ、かはッ」

黒鬼魔王の腕に紅菜のはいた血がおちる。

（なにをかんがえている）

黒鬼魔王は紅菜の行動に疑問を感じながら紅菜をみさげた。すると顔をあげた紅菜と目があう。そのまま紅菜は自分の唇についた血を舐めとつた。その姿に黒鬼魔王は眉をしかめる。醜いものにたいしてではなく、恐怖をあらわすものにたいしての己が恐怖をかくすため。

「あれが紅菜の戦い・・・・?」

蒼は紅菜の姿に戸惑いの声をあげる。いつもの紅菜の戦い方ではない。冷静で洗礼された無駄のない動きをする紅菜の戦い方がいまはない。どちらかといふと血が流れることを楽しみ、獰猛で荒々しい動きをして、敵を傷つけることを楽しむような戦い方だった。

「とめなくていいんですか。紅菜に戦いをやめさせないと」

蒼は紅菜が殺られるといふことよりも紅菜があんな戦い方をしていることに不安をかんじた。しかし、紅菜をとめられるのは自分じやない。ここでおなじように観戦している螢蘭しかとめられる者はなかつた。

「なんで?」これからよ。紅菜はこれからが本番なんだから」

螢蘭はそういうと傍観にてつすることに専念した。紅菜の体はどこもかしこも痣と傷だらけで、白い滑らかな肌に傷ができることができない。紅菜のなかに眠つていたものがあらわになつてついているようだ。白く純粹な肌をやぶつて獰猛な獣が姿をあらわそうとしている。そんな螢蘭を批判的な目でみると紅菜の戦いにわつてはいふつとした。しかし、それを螢蘭にとめられる。腕をねじつてふせさせると螢蘭は蒼の髪をつかんでどすのきいた声で静かにいう。

「だまつてみてろ。紅菜がかわる瞬間を」

紅菜は黒鬼魔王の腕に一秒ふれる。そして、そのままにもしないままはなれた。黒鬼魔王は糸がきれた人形のようにひれふす。紅菜はすかさず踵おとしを頭めがけていた。鈍い音が部屋にひびく。紅菜の耳にはそれが心地よくきこえていた。

「これは……魄氣……」

黒鬼魔王が魄氣をしつていたことに紅菜は感心した。いろんな術を体得していた紅菜ですら言葉もしらなかつた術だ。

「ふーん、しつてるんだ。でも、解けないでしよう？……たちなよ。」

そういうて紅菜は黒鬼魔王にふれる。紅菜はまだ、相手に一秒以上ふれていないとこの術をかけることはできない。一秒、自分よりも格上の者と戦うときにはあまりにもながすぎる時間。

黒鬼魔王は紅菜に操られるようにたつ。棒のよつにつたつたまだつた。紅菜は黒鬼魔王の顔にそつとふると頭から流れている血に指を滑らす。そして、頬に流れたその血を舐めた。口には生臭い血の味がひろがる。

「身分が高いからかな？ なかなかいい味してる」

そういうて、突きの稽古のように黒鬼魔王を殴りつける。血が顔や体にふり落ちてもきにもとめず殴りつづけた。普段の紅菜ならそんなことは絶対にしない。

無傷だつた黒鬼魔王に傷がふえていく。声を殺すせいでもつた悲鳴しかきこえなかつた。そのことに紅菜は不満を覚え、手をとめる黒鬼魔王にいた。子供が無邪気にお願いをするような表情なのに非情さと残酷な声があたりを支配する。

「ねえ、悲鳴ぐらいあげてよ。楽しくないじゃない」
(なんなんだ)

黒鬼魔王は困惑していた。戦いはじめたときはまったくの別人だつた。青い首輪に力を封じこまれてすることはわかつていた。だから、手加減をして戦つていたのだ。でも、いまは手をぬいて戦っている場合ではない。この魄氣をなんとか無効にしなくてはならな

かつた。

紅菜はしたからおもいつきり蹴りあげる。黒鬼魔王はうしろに弾けとふとなんの防御もできずおれこんだ。それでも、体は勝手にたちあがると、おなじよつにたつたままの姿勢になる。

(これじゃあ、丸太だな)

黒鬼魔王がそうおもつたとき、視界に螢蘭がはいつた。その目に射抜かれる。その瞬間、体の戒めがとかれ自由になった。そして、黒鬼魔王はとつさに紅菜の一打目の蹴りをかわす。

「ああ、解けちゃつた」

紅菜は残念そうにそういうと手から離れていた時雨をひろおうとした。しかし、時雨が紅菜を拒んだ。紅菜の指が拒まれたせいで焼けている。紅菜はそのことにおどろいたが、焼けた皮膚を舐めて心をたてなおす。

「それは靈刀だろ。どうして、拒絶される」

黒鬼魔王は紅菜よりおどろいた顔をしていった。紅菜は「さあ」とこたえると戦いのつづきをはじめた。頭部をねらつて蹴りあげてきた紅菜の足をおなじよつに蹴りで相殺せると、螢蘭をみた。このまま戦いつづけると殺してしまう。殺していいものなのかという迷いが黒鬼魔王の動きをにぶらさせていた。

しかし、螢蘭の瞳は“殺せ”とものがたつていた。黒鬼魔王は意をけつした。

紅菜と本気で戦つたらなかつたことにしてやると菜稚琉にいわれていた。しかし、本気で戦えば紅菜を殺してしまつ。紅菜を殺してしまつてほんとうに無事でいられるのか、といつう疑問があつた。だが、螢蘭までも“殺せ”といつている。どうゆうつもりかわからないがこれ以上手をぬいて戦つていい相手ではなかつた。

紅菜がかわつてきているのは性格や戦い方だけではない。その実力も確実にのびている。靈力がないぶんを補強するように体の反応が研ぎ澄まされてきている。はじめはついてこられなかつた動きにもいまはついてきているのがいい証拠だつた。

「さすが、息子がきにいつただけのことはある。私も本氣でやらせてもらひつよ」

そういうて、黒鬼魔王は妖氣を開放させた。威圧されてその場にしゃがみこむ者もいる。昴摩の母親も地にふしていった。この場でたつていられるのは正体をかくすように布をかぶつている螢蘭と闘っている当人だけだった。蒼ももちろんたつていられなかつた。

そんな蒼に螢蘭はいつた。

「菜稚琉から預かつてゐる白紙の札を私が指示したら破いて」菜稚琉からわたされたのはふたつの札。“袋”とかかれたものと白紙のもの。蒼は震える手で白紙の札をだす。それを両手でにぎりしめてうずくまつた。上半身を起こしてゐるだけでもつらい。

紅菜も魔王のびりびりくる妖氣にあてられて格のちがいをおもいしらわれる。しかし、怖氣つくこともひれふすこともない。自分のなかのなかが妖氣にあてられて爆発しそうになつてゐるを感じていた。

(あとちよつと)

紅菜をみて螢蘭はときをまつた。昴摩がまだついていないことがきになつたがこれ以上は紅菜がもたない。

「その剣をつかいなさい」

黒鬼魔王は昴摩の母がもつていた妖刀をつかつよつに紅菜にいつた。紅菜は楽しそうに笑うと剣をとりほほ笑みながらかまえた。その笑みには死への恐怖もなく、闘えることへの喜びだけがある。まるで妖かしのようだつた。

部屋中の壁はくずれさり家具はみる影もない。柱がかすかにあるだけのだだ広い部屋になつてしまつていて。

「はじめてだ。体がぞくぞくしてゐる。黒鬼魔王、楽しい」

いまの紅菜は妖かしのもののようにみえた。はじめてその姿を見たときはたしかに高名な清らかな術者と曰いつたのだが。黒鬼魔王は自分がどんなものと闘つてゐるのか、というかんがえを捨てて。いや、もうどうでもよかつた。これは殺すか殺されるかの闘い

になつてゐるから。

「光栄だよ」

黒鬼魔王と紅菜は同時にふみだす。爆発的な風圧がまじわつた刃からうまれる。中心にいる紅菜と黒鬼魔王にはたがいの太刀の重さが直につたわり手がジンジンとしびれる。しかし、紅菜はそれだけではなかつた。黒鬼魔王の体は頑丈な妖かし、紅菜の体はか弱い人間。とうぜんのよつに靈力を封じられた紅菜の体はその力の反動に耐えられない。

「・・・ツ」

紅菜の体は内部から破裂するよつに裂ける。そのまま膝をついた。血はどびちつてぴちゃ、ぴちゃと音をたてて床をぬらした。

（まだ、闘える）

紅菜の体から血がひろがつていく。大量の血液が失われていくことで体がどんどんと冷えていき、それと比例して意識も遠のいていく。それでも、黒鬼魔王の妖氣は衰えることなく紅菜の体をゆさぶりつづける。

（闘える・・・・・）

黒鬼魔王は血の海にしづむ紅菜の姿をみておわつたとおもつた。心音は微かにきこえるが、殺すのはおしかつた。見た目の美しさというよりも黒鬼魔王自身もこの戦いを途中で楽しんでいた。妖かしらしい闘いができることへの高揚感を無条件に感じていた。魔王といつ地位についてしまえばなかなかそういう闘いはできないからだ。（殺すのはおしい）

螢蘭は一人をただみていた。血の海にいる紅菜を助けにいこうともしない。ただ、その場でみているだけだ。黒鬼魔王が妖氣をゆるめていく。しかし、螢蘭は黒鬼魔王が闘いをやめてしまうのを制止した。

「まだ、ゆるめちゃだめ」

その言葉に黒鬼魔王は眉をしかめた。指ひとつ動かすこともできず、だんだんとその心音も弱まつていく相手にもうこれ以上なにも

できるはずがなかつた。黒鬼魔王が螢蘭をみると螢蘭はおどろくほど冷静でそして、何かをまつよつた目でみていた。

妖かしのように闘うことを体が魂が渴望する。それでも、この体ではこのままでは限界がある。際限なく闘える魂魄がほしい。

螢蘭はそつと自分の腕を抱える。紅菜を視界にいれたまま紅菜が目覚めるのをまつていた体にビリビリと電流がはしつた。胸の谷間にある花凜の印がわざわざとさわぎだす。

「ぐる」

螢蘭はそういうて魂氣をはなつた。黒鬼魔王ははじめて感じる螢蘭の魂氣におどろく。

（これは・・・妖氣・・・）

これまで彼女は魂氣と刃だけでこの魔界を支配してきた。桜雅族を滅ぼした者たちを狩るときでさえ、彼女は魂氣と刃しかつかなかつた。魂氣はいつさいつかわなかつたのだ。

ドン。みじかく重い音が響いた。螢蘭からではない。血の海に沈んでいた紅菜からだ。内側から爆発したように煙は放射状にひろがり舞いあがると中心をのみこむように消えていく。

煙がはれた場所にたつていたのは無傷の紅菜だつた。顔、首、胴体、手足に紅い薦のような紋様がうかんでいる。雰囲気もまるでちがう、人間らしさがまつたくといつていいほどなくなつた。はなつ魂氣は妖氣。

「蒼、いまよ。はやくつ」

螢蘭の声にうずくまつたままなんとか白紙の紙を破る。紙は破れると蒼の手から消えていった。

「ああああああ」

紅菜は生まれたての赤子のように叫び声をあげる。その波動に空気が揺れて空間がゆがんだ。黒鬼魔王は変貌をとげた紅菜にいつきに集中する。そして、心のなかでつぶやいた。

（こんな者に獲物にされたらひとたまりもない）

黒鬼魔王は自分の妖氣を最高潮にたかめると襲いかかつてくるで

あらう紅菜にそなえた。しかし、それは徒労にかわる。

「どこからかふりそそいだ五本の竹に紅菜はかこまれる。その竹に嫌悪を感じた紅菜はそこからしようと走りだした。それをおさえたのは螢蘭だ。紅菜を羽交い絞めにすると叫んだ。

「空地魔天、印契を結び。原初み力をとどめたまえ」

蒼に巻きついていた一匹の管狐がそれに反応してそれぞれ赤と青の細い紐になると竹に無作為に巻きついていく。その紐がすべて巻きついたのをみると螢蘭は紅菜の手をはなした。紅菜は忌々しい者をみるような目で螢蘭をみつめる。そして、襲いかかつた。螢蘭はまつこから紅菜をうけとめる。片手をつかまえ首をとらえた。

「おい、黒鬼。合図をするから、私にむけてありつたけの妖氣をぶつけなやー」

その言葉に黒鬼魔王は戸惑いをみせる。しかし、意をけつして左手をむけるとそれをわざわざるように右手をそえる。手にぎりゅうと力をこめていった。

「準備整いました」

その言葉に螢蘭は紅菜をそのまま放り投げる。紅菜から手が離れる瞬間、管狐たちにいった。

「あけろ」

螢蘭のつしろだけ紐がきえる。それがあわせて螢蘭は「やれッ」と黒鬼魔王に合図をおくつた。黒鬼魔王はいわれたとおり妖氣をすべてはなつた。螢蘭はそれをよけるとその竹の結界からである。はなたれた妖氣は紅菜に直撃する。管狐たちは紅菜だけをのこして結界をしめた。

黒鬼魔王は膝をつく。全身の力をこの一撃にこめてしまった。きっと跡形もなく紅菜はきえさつているだらう。そうおもいながら顔をあげると驚くことに紅菜が無傷でたつっていた。

「蒼、おきる。仕事よ」

蒼は体をおこそうとしても妖氣にあてられて体をおこすことができない。それどころか呼吸すら正常な状態をたもてずにして、螢蘭

はチツと舌打ちすると自分の着ている衣をぬいで頭からかぶせた。

豊満な胸を片腕でかくす。

すると、蒼の呼吸がおさまっていく。正常な呼吸をとつもどした蒼は体をなんとかおこした。

「もうひとつのあるでしょ。それも破つて」

蒼はいわれたとおりにする。すると、白い三寸の棒がでてきた。それとともに一枚の紙が落ちてきた。それをつかむと紙を見る。紙には一重の円のなかにみたこともない文序のようなものがかかっていた。

「いい。それで正確におんなじものを竹の結界のまわりに書くのよ」「おなじものですか？」

「そう。ちよっとでも間違えてみなさい。殺すわ」

螢蘭の言葉に青ざめている顔をさらに青くするとのりのりと紅菜の閉じこめられている結界にちかよつた。紅菜が蒼に手をのばしたが、結界にはじかれる。それでも、蒼に手をのばそうとした。

螢蘭は紅菜のようすにもうこれ以上、女のままではいられないと悟り観念して術をとく。螢蘭の本来の姿をみられる者はいくわざかだ。みたとしてすぐに抹殺されるからほんどいに等しい。（紅菜のやつ餌と間違えてやがるな。腹へつてるからな、餌がちかくにあると危険だな）

紅菜と蒼をみて螢蘭は冷静に分析する。さつきから螢蘭は力を弱めてはいない。もしものときに備えて紅菜から田をはなせないでいた。

蒼はいわれたとおり紙とおなじものを描くと螢蘭にいづ。

「できました」

螢蘭は竹のまわりをまわって蒼がかいたものをたしかめると「よし」ときちんとできていることをつたえた。そして、胸の龍の印にふれると花凛を呼びだした。

「おまえもう菜稚琉のところへこけ」

傍若無人な螢蘭の言葉に反発したように「どうして」「どこに

た。だいじょうぶんな状態の紅菜をおいて菜稚琉のもとへかえれるわけがない。

「俺にできる」とはもうないかもしませんが、でも、こんな紅菜をおいてつ」

「つるさい。紅菜の餌になりたいのか。空腹の獣のまえに餌があるほど都合がわるい」とはないんだよ」

螢蘭の言葉に蒼は愕然とする。人間であるはずのまじてや最高峰の靈能者である紅菜をどうして妖かしのようにあつかうのか。ましてや自分を紅菜が食べるようにしてどうのか困惑をかくせない。

「紅菜はどうしたんですか」

「心配するな。すぐにもとの紅菜にもどる」

蒼にそういうと片手をあげた。花凜は主の要望がわかつたのか蒼をくわえるとそのまま穴のあいている壁から飛びたつていった。それをみおくつた後、まわりにたおれている者たちにいつた。

「おまえたち、動ける者は動けない者つれてさっさとされ。この結果が破れたら皆殺しだぜ」

螢蘭の言葉にまわりはざわつくとして、困惑の色が周囲を支配した。それをやぶつたのは黒鬼魔王の言葉だった。

「いつもおりにしる。あれは対処しきれん」

黒鬼魔王はそういうと螢蘭にむきなおつていう。あの結界は普通のものではない。魔を封じるだけのものでもなければ、天のものを封じるだけのものでもない。

「あれはあとどれぐらいもちますか?」

「三日だ。それ以上はもたない」

そういうと螢蘭はまだあらわれない昴摩に苛つぐ。なにせ時間がないのだ。時間に追われているというのにまだやつはあらわれなかつた。

(チツ、予定が狂つてきてやがる)

「三日あれば、私も完全に回復します。協力しますよ。螢蘭様」

螢蘭は鼻でふんとわらうとどかつと床にすわつた。しかし、その

笑いは馬鹿にしたようなものではなく勝手にしるといつものだつた。ほかの者たちは王と螢蘭の姿に蜘蛛の子をちらしたようにその場からはなれる。黒鬼魔王はだれもいなくなつたその場所で螢蘭に密談するようにいつた。

「あの子はもしかして・・・」

「なにもしらないほうが、いいこともあるんだぜ」

それ以上の言葉を許さないといつよつに螢蘭は静かにいつた。紅菜は自由を奪う結界がきにいらないのか暴れまくつてゐる。しかし、結界はびくともしない。

（あの役ただず、まにあわなかつたら惨殺してやる）

螢蘭は紅菜をみながら昴摩がはやくこにいつくことを祈つた。

昴摩はやつとのおもいで鬼族の城を眼前にとらえた。管狐の背中から城にとびおりると窓から部屋にはいつた。城の上空には異常な妖氣がたちこめてゐる。それは三人分で一つは黒鬼魔王のものだが、あとふたつに心あたりはなかつた。

「夜叉様、妖王様がつ」

家臣が声をかけてきた。昴摩は侍女になにもいわずうえにいこうとした。感じるのは妖氣だけなのにこのうえに紅菜がいることがわかる。紅菜にちかづいているとおもうだけで心が力にあふれていくような高揚感があつた。

家臣や衛兵たちが囮む階段に田をむける。そのうえには紅菜がいるのだ。はやく助けにいかないと。紅菜がいない世界は昴摩には想像できない。人ごみのなかに突つこもうとした昴摩をとめたのは鬼柳だ。

「夜叉様、紅菜様のところへいくんですか？」

鬼柳に田をやると昴摩は事務的にこたえた。――にこるどどわしても声に感情がはいらなくなる。

「ああ、紅菜をとりもどしにきた」

鬼柳は昴摩の言葉をはげしい感情でうけとめる。そして、――

わざにはいられなかつた。

「私は紅菜がほしいとおもつています」

自分が生まれたときにはこの人はもう夜叉の地位についていた。身分の低い者からうまれたにもかかわらず、その地位をもぎとつた兄におなじように身分の低かつた母親は嫉妬の憎悪をもつていた。自分もいつしか母親の嫉妬という憎悪にまきこまれてこの人を疎ましくおもつたのだ。

「そうか・・・」

それだけをいつてわざつてこつとするその背中がおまえには無理だといわれているようでよけいに腹がたつた。はげしく馬鹿にされたような、相手にならないと真底みくだされたような気持ちになる。「あなたはなにもかももつてゐるじゃないですかッ。ひとつだけくれたつていいじゃないか！私に紅菜ぐらいつ」

おもわず心の底に隠している自分の恥すべき心を口ばしついていた。こんなことを、負け犬がおもうようなことをいつてしまつた。しかし、ふりかえつた昴摩は情けなくほほ笑みながらいつた。

「欲しかつたらやるよ」

そして、階段へとむかつていつてしまつた。紅菜を口説いたとき、夜叉への対抗心だけで紅菜をおとそうとしていた。弄んでやろうとおもつたのだ。しかし、彼女はそれをなんなく見破り挑発的にみつめてかえしてきた。

本気ならかんがえてやる

自分ひとりをみていつた言葉に心が奪われたのを感じた。心が求めるものはほんとうはなんなのだ、と問われたその言葉に心を奪われたのだ。そして、ほしいとおもつた。そばにいて自分だけをみさせたいと。その黒い瞳につるるのは自分だけでいいと。

しかし、自分には夜叉のようにすべてをして紅菜だけ手にはいれればいいとはおもえなかつた。紅菜を手にいれても地位や権力もほしいとおもつ。欲しいと紅菜だけが欲しいと固執することは自分にはできない。

（あの言葉はほんとうはいつこいつ意味だつたんですね）

「邪魔だ。どけ」

昂摩は人の壁をそういうてとおつていく。人々はさつと昂摩のとおる道をつくつた。階段に足をかけた。すこし、ちかづいただけでこんなにも押しつぶされそうな重い妖気が渦巻いていることが肌につたわる。

「夜叉、どこへいへつもりです」

ききなれた母の声に昂摩の足がとまる。そして、ふりかえつてしまつすぐに母をみた。いつからだろこの人の目をみなくなつたのは。あいかわらず冷たい目をしていた。その目があたたかく自分をみつめたことはない。

「夜叉、あなたは私とあの小娘どどちらをとるつもりですか」

母の言葉に昂摩ははじめての反応をみせる。こたえはわかっている。心がこんなに求めるのはひとつだけ。その事実に笑みさえこぼれる。穏やかな光につつまれたような笑みが。

ほほ笑んでその腕に抱きしめて名前を呼んでほしい。昂摩と。

「オレは紅菜以外なにもいりません。そのためならあなたすら切り捨てることができる」

そういうて母に背をむけた。はじめてだつた。自分が母に背をむけるのは。いつも母親の背をおついていたのは自分だつた。

いまも背中をおつっている。走ることをやめればそれは一生手のとどかないところにいつてしまつけど。でも、紅菜はふりむいて“昂摩”とほほ笑んでよんでもくれる。そして、またその背中をおいかけるのだ。

（オレはおまえをどこにもいかせはしない）

あれから一日がすぎた。鬼柳の部屋だつたその場所はあとかたもない。鬼柳の部屋だけではなかつた。この階すべてが廃墟のような感じだ。その場所に紅菜を抱くように竹の結界がはらされている。竹は神聖なものとされている。そこに、螢蘭が育てた管狐の結界

がからみついているのだ。菜稚琉の管狐がうんだ子なのだが、能力が“結”と“封”だつたため螢蘭が育てることになった。管狐は育てるものの魂気に左右される。竹はいうまでもない菜稚琉の力がかっている。螢蘭と菜稚琉の共同の結界なのだ。

菜稚琉がいれば三日以上結界をもたすことは容易いのだが、菜稚琉がこの場所にはいられない。しかし、紅菜にはこの場所が必要だつた。

立ち入り禁止になつてはや一日。黒鬼魔王はおおかた復活している。さすが、魔王というべきなのだろうか。そして、全快のために気を集中してたかめているところだ。意外な黒鬼魔王の働きに菜稚琉の「生かせておいてよかつたでしょ」という言葉がきこえてくる。

大人しくなつていた紅菜がしづかに結界に掌をむけた。螢蘭はなにをしだすんだと腰をうかせると注意深く紅菜を観察する。昔から予想もつかないことをたまにしては驚かされていた。

（なにするつもりだ？）

紅菜はそのまましばらく制止する。紅菜のむけられている掌が紅く光る。そして、噴火するように妖氣をはなつた。結界はずうづんと音をたててその攻撃をうけとめる。そして、紅菜はそのまま第二打を準備はじめた。いくらなんでもこんなもの何発もいれられては結界の寿命がちぢむ。

「おい、おい。暴れすぎだ。あけろ」

螢蘭は困つたようにようじうと結界をあけるようによつた。蒼がかいた結界の印は紅菜以外には作動しない。消さないように注意すると螢蘭は紅菜のとじこめられている檻のなかにはいつていつた。黒鬼魔王は心配そうな目で一人をみていた。

「まったく、おまえは」

そういうつて螢蘭は自分の肩をつかむ。そのまま肩の肉をひきはがした。血がぼたぼた落ちて螢蘭の手には自分の肉がつかまれている。それを紅菜にみせながら螢蘭はいつた。

「腹へつて苛々してんだろ？ 食えよ」

紅菜はその言葉と行動に構えていた手をもじすと肉と血につけられてふりふりとちかづいてくる。紅菜にからこませつけられ手をあげると螢蘭はつづけていつ。

「ほり、食え。俺様の肉食つたら他の肉は食えないぜ」

紅菜は手をのばす。螢蘭の指についた紅い血を舐めぬ。ぴちや、ぴちや、と螢蘭の指を舐めて血を舐めとる。螢蘭は肉をもつていないほどの手で紅菜の頭を撫でてやる。

「よしよし、いい子だ。うまいだらう~」

螢蘭の行動に黒鬼魔王は驚愕の目をむける。黒鬼魔王は螢蘭が力づくで紅菜を押さえつけるものだとおもっていた。本能だけでうごいている紅菜に深い傷をあたえれば傷を治やつじじつと動かなくなれる。そうするものだとおもつていたのだ。

紅菜は腕まで血を舐めるとえぐれた肩に手をのばす。螢蘭の手にある肉にはまだ口をつけよつとはしない。自分でついた螢蘭の血を果汁のようにつつとつと舐めとつてつて。螢蘭は頭を撫でながら紅菜を愛おしそうになだめていく。あまり暴れられてはこまる。結界の寿命をちぢめるわけにはいけない。

「肉より血のほつが好きか？ ほら、肉も食え。血ばっかじやうつちの身がもたねえ。肉のほつが腹ふくれるんだからよ」

螢蘭は肉を紅菜の口もとへよせる。紅菜はさしだされた肉をべろつと舐めて味をたしかめるとおおきく口をひらこた。螢蘭は「いい子だ」とこながら紅菜をなでてやる。猛獸を手なずけよつとしているよつにちみえた。紅菜が肉を口にふくもつとしたとき。

「そんなもん紅菜に食わせんじやねえ」

螢蘭は溜息をつくと「おそいんだよ」といつて紅菜から肉を奪いとつた。恍惚とした表情で食事をしていだ紅菜に不満の色がうかぶ。そして、螢蘭は紅菜の頭を撫でていた手を頬にうつすと魄氣をかける。

「紅菜、肉はおあずけだ」

紅菜はその場にしゃがみこんでしまった。螢蘭はそのすきをついて結界のなかからである。それから、肩に肉をもどして傷をなおしながら乱入してきた男にいった。

「おい、菜稚琉からきいてきたんだらう？」

「ああ」

「紅菜に2秒以上ふれるな」

昴摩はうなずくと紅菜のもとへちかづく。変わり果てた紅菜を苦しそうな目でみつめた。白い肌には紅い薫がまきついているような紋様がうかび、強く清らかで天真爛漫な紅菜の美しさは影をひそめている。いまの紅菜は獰猛な獣のもつ恐慌な美しさがあつた。

血で紅くそまつた唇、獲物を狙う鋭い目はたしかにぞくぞくするものがたりそれはそれで魅力だったが、昴摩はやはりいつもの紅菜のほうが数倍も魅力的だとおもつ。

「いいが、紅菜とおまえの両方の掌に傷をつけて手をつなぐんだ。

そして、なにがなんでもはなすな」

螢蘭の言葉に昴摩はうなずくと結界のなかにはいる。そんな息子に黒鬼魔王はいった。

「なにをするんだ」

昴摩はこたえることなく紅菜にちかづくとそつと抱きしめた。紅菜から感じるのはまぎれもなく妖氣だった。紅菜の片手をつかまえると昴摩は「ごめん」といつてその手を傷つけようとした。

「いや、わああああ

とつぜん紅菜が叫びだした。昴摩ははじきとばされて結界にたたきつけられる。紅菜は体勢をたてなおすことも許さず昴摩につかみかかった。昴摩はとっさに自分の首を腕で守る。その腕に紅菜が噛みついてきたのだ。

「チッ、破りやがった」

螢蘭は紅菜の予想外の動きに焦りをおぼえる。まだ、掌に傷することができない。昴摩ではいまの紅菜の相手は役不足にもほどがある。そして、ことの成り行きをみていた黒鬼魔王にいった。

「おい、もうだいぶん動けるだろ。結果のなかはいつて二人でおさえつけるぞ」

螢蘭はなるべく無傷で紅菜をとりもだしたかった。この期におよんでそんなことをかんがえている自分を甘いなどおもいながらも結界にちかづいていく。黒鬼魔王も従うように結界にちかづいていった。しかし、それを制したのは昂摩だった。

「大丈夫だ。だれも手だすな」

紅菜が肉を引きちぎろうとしたのを感じて昂摩は紅菜の口に自分の腕を押しこむ。牙の構造上こうされるとはなれるのだ。案の定、昂摩の腕は自由になつた。そして、昂摩は紅菜にいった。

「大丈夫だ。助けてやる」

そういうて、昂摩はありつたけの妖氣で矢をつくつた。無数の妖氣の矢にかこまれた紅菜は高揚した顔をして獲物を狩る楽しさに胸を躍らせている。それはまるで妖かしが獲物を狩るときの心理。

昂摩は自分からは動かない。妖氣の矢を操作することに集中する。どうしても体が動くと氣の操作に甘いところがでてしまつ。にらめあつたまま動かない一人を螢蘭と黒鬼魔王はしばらく見守ることにきめた。

（傷つけたくないんだ）

昂摩の咽がなる。緊張の糸がきれたように紅菜は昂摩に飛びつく。昂摩は矢を一分すると紅菜の側面を狙うようにすばやく操作する。矢の動きに紅菜は足をとめると腕をひろげ掌を矢にむけた。そして、にやりと笑う。

「ハツ」

紅菜の気合で矢は効力をうしなう。矢が完全に無効化して破裂していくのを確認しながら紅菜は昂摩に殴りかかつた。とっさに昂摩は紅菜の拳をつかむ。ありつたけの力ではなきないように紅菜の手をにぎつた。しかし、紅菜の拳が顔面にあたつた。目のしたの頬骨から鈍い音が耳に響く。それでも、つかまえた左手をはなさなかつた。

「ぐッ」

紅菜はそのまま一打田をいれよつと『のよつに腕をひく。その顔は残酷に笑つっていた。昴摩は冷静に紅菜のほつひとつ拳をみていた。弦をはなしたように腕がとんでくる。その軌道を昴摩は完全にとらえていた。そして、拳は紙一枚のすきまでとまる。紅菜の拳を阻止したのは昴摩の掌だった。

「つかまえた」

紅菜の拳が逃げなにように左手とおなじように拘束する。紅菜は暴れて拘束をほどこすとする。

（くわ。一秒钟）

昴摩は両手を一瞬、はなすと紅菜の手が逃げきるまえにつかまえて指を交差させてとらえた。はなれていかないように指と指のあいだをしめてとらえる。紅菜は苦痛の表情をうかべたが、すぐに爪をたててにぎりこめてくる。自分の手に血が流れるのをみて昴摩は自分が甘さをつぐづぐ感じた。紅菜のように拳をにぎりしめることができない。爪で傷をつけたくなかつたのだ。

（一秒）

紅菜は皮膚が裂け、肉が引きちぎれるほど爪をたてて抵抗している。昴摩は指ができるだけしめつけると紅菜の背後に氣を配る。紅菜の背後そこには一本の妖氣の矢が狙いをさだめている。側面の攻撃は田くらましでほんとうの目的はこの一本の矢だ。

「あつ」

紅菜の指が昴摩にまける。力比べでは昴摩にぶがあるのは当然のことだ。紅菜は指のしめつけに屈して体をしづめる。へばりこんだ紅菜をみて昴摩は。

（こまだ）

床にかくした矢がはなたれる。その矢は昴摩の手ごと射て貫通した。そのまま、紅菜の手をはなさず、昴摩は痛みにたえた。耳に紅菜の苦痛の悲鳴がきこえる。

「あやああああ

紅菜は悲鳴をあげて氣絶する。昴摩につかまれた腕をあげて人形のようになり、力なくした。その顔には血の氣すらない。ほんとうに白い無機質な肌をした人形のようだつた。ながい黒髪はそれでも艶々としている。

つないだ掌から紅菜の血が流れてくるのがわかる。

（いや、血じゃない。もつと・・・）

昴摩の意識が遠のいていく。かわりにどこからか声がした。それは頭のおくのもつと深いところまで侵入してきて、魂ごと深く深く犯されていくそんな感じがした。それでも、それを不快とおもうことはない。それどころか、ずっと愛おしかったものの片鱗を刻みつけられる悦楽すら感じている。

身をあずけてとけていく安心感。田蓋をあけてなにかを田にひつすといふことさえ、いや、もしかしたら息をすつて吐いての呼吸すら無意味なことのように感じる。それほど満たされているような感覚が体をとりえていた。

なにもかんがえず、なにもみず、なにもしない。これほど満たされたものはないだろ? とほんやりとおもひ。この世界は自分だけのもの。

これ以上ないほどの感覚。煩わしいこともなにもないこの世界にずっと、ずっとひたつていたい。だれもこの世界にふみいつてほしくない。それほどこの世界は自分だけで満たされている。

(なにもいらない)

なにもいらない。なにも求めない。このことが体を心を魂を自由にかるくときはなつてくれる。自分が何者かもわからないこのことが満たされていくことのすべてだとおもつた。

責任も立場も人間関係さえないこの世界は自分だけのもの。自分のおもいどおりの世界。

何か求めることはとても疲れること。心がさかれること。叶つてもそのさきが保障されないことに心は怯えるのだ。なにもわからず求めていられるほど自分は無知ではないのだ。

ほんとうにいいの?

びにからか声がした。

これだけでいいの?

声がするほうへ目をあける。いや、びにから声がしているのかわからぬけど声の人物をみたいとおもつた。その声はなんだかとても欲しかつたものに似ていた。

ほら、満足じゃない

こんどは問いかけではなかつた。田にひつたのは白い肌に黒い

髪。ながい髪がゆれてこゝちをみよつとする。黒くつよい魅力をひめた瞳に射抜かれる。

そばにいれば、満足なの？

顔もわからない自分以外の男に少女は手をひかれていく。ほそく白い体になれなれしく腕をまわし抱きしめている。

平気なの？

問い合わせてくる。平気なかど。そばにいてこんなことになつても平気なかど。

ほんとうに？

（やめてくれ）

自分はここにいたい。ここでなにもかんがえず、なにも求めず、ここにただいたいのだ。業の深さにおぼれて苦しむのはもつといやだつた。叶わないのだ。叶つたらもつともつと欲しくなる。きつと己の欲は彼女を鎖でつないで誰にもふれさせず誰にもみせないようなどじこめて、自分だけがいる世界に縛らなければつきないのだろう。いや、それでも、もし彼女の心に自分がうつっていなかつたら。

欲しいよね？誰にもわたしたくないよね？

田をおおうように顔をおおつている掌を恐る恐るほどいていく。そうだ。これ以上求めてはいけないと自分にいいきかせてきたのだ。欲しい者と自分はあまりにもちがうから、それ以上はふみこんではいけないから。

（でも、ほんとうはずっと・・・）

美しい鳥をどじこめるように檻のなかにいれてしまひたかつた。だれにもみせず、だれのもふせさせないよう檻にどじこめて鍵をかけてしまう。その心地よい轉りも美しい羽根もすべて自分だけのものにしたい。

どうしたらいいか教えてあげよつか？

声は姿をあらわした。黒い髪、黒い瞳、白い肌。ほほ笑んで耳元でささやく。

簡単だよ

首をしめるよつて鞄で拘束する。力いっぱいしめたまま螢蘭は叫んだ。

「逃げろッ」

黒鬼魔王は氣絶したまま動かない紅菜を抱えて逃げていく。外につづくおおきな穴からとびおりて外へと逃げた。安全なところへと逃がさなくてはいけない。

螢蘭のほどこした結界は予想よりはすこしながくもつたが時間切れで壊れてしまった。もともと物凄く複雑な結界だったのだ。そうながくもつわけがない。

（ほんとうに予定どおりいかねえ）

螢蘭たちの予想では三日で充分だったのだ。一日の遅れはあつたものの、はじめから一日おおく余裕をもたせていた。しかし、實際やつてみれば時間がたりなかつた。紅菜のほうは何とかなつたが、受けるほうの昴摩は時間切れという結果になつてしまつた。

「のまれてんじやねえよ」

碎かれた鞘をみながら螢蘭はつぶやいた。そして、自由になつた昴摩をおう。昴摩が追つている獲物はひとつだ。いそがないといけない。

鬼柳は外をみていた。夜叉と紅菜のことをかんがえていたのだ。視界に猛烈な勢いで落下していくものがうつった。それはまぐれもなく黒鬼魔王であった。そして、その腕に抱かれていたのは。

（あれは）

かんがえるよりもさきにそのあとを追いかけていた。追いつくよう建物をけり速度をつけながら落下する。そして、着地と同時にはしりだした。すぐに追いつくことができた。

「魔王どうしたのですか」

息も絶え絶えに鬼柳はいった。とつぜんあらわれた鬼柳に黒鬼魔王は紅菜をわたすとひきかえそとする。捨て台詞のように言葉だ

けのこして。

「夜叉にだけはわたすな」

鬼柳はなにがなんだかわからない。困惑と戸惑いで腕のなかの紅菜を見る。

「う、くつ。はあ」

紅菜がきづいた。そして、まだつづらな目まま「ど」「じ」とつぶやく。鬼柳はどうすべきかかんがえたがとりあえずまだはつきりと意識をとりもどしていない紅菜を抱えると城とは反対の方向にはじつた。

そのころ、螢蘭はなんなく昴摩においついていた。昴摩を縛りつけるように術をかける。しかし、昴摩はなんどもその術をやぶる。そして、まえに進もうとする。紅菜以外は目にはいらないとでもいうようだ。

「てめえ、紅菜が殺さないでつていわなかつたら今頃殺してるんだぞ」

男相手に手加減しなくてはいけないことに苛つきながら螢蘭はしつこく術をかける。縛つてとじこめるだけではいけないのだ。それでいいならとくの昔に封印してしまつていて。それにそれじゃ、紅菜が悲しむだらう。

「くつ」

再度、呪縛すると螢蘭はそのまま術をきつくしていく。もがいていた昴摩の動きがやつととまつた。いまは首だけをうごかしている。そこにあるわれたのは黒鬼妖王だ。しかし、紅菜がいない。

「おい、紅菜はどうした？」

「信頼のおけるやつにわたしてきましたよ」

螢蘭には心あたりがないが、この場に紅菜がいないだけましだ。

黒鬼妖王は昴摩をみながらいつた。

「あなたに任せておくと殺しかねませんからね」

そういうて、紐状の妖氣をだすと螢蘭の術のうえから縛りつける。

そして、螢蘭にいつ。

「こちらは任せください」

螢蘭は術をとくと紅菜のところへとほしつつていった。のこされた

黒鬼魔王は息子をみながらいった。

「息子よ。厄介な者に惚れたな」

それは想像以上に満足げにひびいた。

「わああああ

昴摩は妖氣をはなつ。黒鬼魔王の拘束はばらばらに千切れてしまつた。昴摩は黒鬼魔王に牙をむける。邪魔な者を排除しようとする意志を感じた。黒鬼魔王はそれによけるとすぐに体勢をたてなおして、蹴りをいれる。

横腹を碎くようにいれられた蹴りに昴摩が血を吐く。しかし、たおれず、そのまま猫のよつに身をひるがえすと首に研ぎ澄ませた爪を突き刺そうとする。

「まだまだ、負けはしないわ」

黒鬼魔王の腕を貫通して昴摩の爪が数センチのところどまつている。黒鬼魔王はそのまま貫かれた腕をのばし昴摩の側面につくと首をしめる。首をしめられた昴摩は指をぬくと両手でその腕をつかんだ。

「つ、食べばおわりだぞ」

息子に父は諭すようにいつたが肝心の息子にはとどいていない。つかまれた腕がぎりぎりと音がなる。碎かれるとおもつたが、はなすわけにはいかなかつた。碎かれるまえに動きをとめる。

黒鬼魔王は穴のあいている腕で昴摩の腹に風穴をあける。昴摩は大量の血をはいて地にひれふした。腕をひきぬけば栓がぬけたように血がふきだしていく。昴摩はさらに大量に血を吐き動こうとした。

黒鬼魔王はこれでおわつたとおもつた。体は動かないだろうが妖かしなら、いや、息子ならこれぐらいでは死なない。

昴摩を拘束していた腕の袖を口でひきはがし、出血している腕をきつくしばりつける。自己治癒には妖力をつかうのだ。この魔界で

は妖力がすべてだ。黒鬼魔王の妖力はまだ完全ではない。それなのに無茶をしてしまった。腕についた手の痕をみながらつぶやく。

「私ももう歳だな」

すわって天をあおぎみている黒鬼魔王の体に衝撃がはしる。とつぜんのこと間に田を見開きたおれしていく。

「ぐはつ」

吐いた血が顎をぬらしていく。やらうとたちあがる影は風穴を塞ぐように手をあてていてる昴摩だつた。そして、そのまま蠶蘭がむかつたほうへ消えていった。

「かつ、じほ、じほッ」

咳きこむように血をはいて昴摩をおいかけようとする。しかし、腸の一部もひきだされていてさらなる激痛で意識が飛びかけた。それでも魔王は息子が幸せ者だとおもう。これほど妖かしらしく、これほど執着できるほどものをもつたことを妖かし冥利につけると喜ばしくも誇りにおもつ。

業に溺れ、業にまみれて、汚れながら奪い去っていく。それが妖かしだ。いまの息子の姿はその本来の妖かしらしい姿をしている。息子をだれよりも誇らしいとおもうのだつた。

はじめてみたとき。自分の血をひいていることを汚らわしいとさえおもつた。誰よりも小さく細い体、王族としてはあまりにも弱々しく粗末な妖気に田にいれることさえ疎ましさを感じた。だからこそあんな名をつけて自分から遠ざけたのだ。

紅菜をつれたまま鬼柳は川まできていた魔界からだすべきなのだろつかともかんがえたがどこへ帰せばいいのかわからなかつた。紅菜にきいても虚ろな瞳をむけるだけでいつこうに返事がない。そして、困り果ててこの川まできたのだ。魔界の門はすぐそこにある。血で汚れている髪も肌もきれいにしてあげたいとおもつたのだ。竹の結界に封じこめられる彼女をみていたのは鬼柳もおなじである。あれはあれで魅力を感じたが彼女ではないことにがつかりしていた。

美しければそれでいい花とは彼女はちがつ。紅菜は紅菜らしくあるべきである。

茂みから音がした。鬼柳は紅菜をつつむようにかかえると緊張した面持ちで茂みをにらむ。夜叉にわたすなといった黒鬼魔王の言葉にしたがつての行動だった。

いつさいの説明もなしにそういうわれて一人をひきはがすためのものかとおもつたが、それにしてはおかしいともおもう。それならどうしてあんなに慌ててもどつていつたのか。疑問はのこつた。それにはのいいかた。まるで夜叉が紅菜に危害をくわえるようなそんないいかただつたのだ。

かさ、かさ、と音をさせてあらわれたのは半身裸の男だった。紅菜をとじこめた女に似ている。鬼柳は螢蘭の男姿をみるとまえにあの部屋をさつた。黒鬼魔王の愛刀をわたすようにと家臣にいわれたのだ。

黒鬼魔王の愛刀は許可のある者以外がふれるとその者を食べてしまう。黒鬼魔王の刀に触ることができるのは夜叉、鬼柳そしてあと三人の子供だけだ。

あの場で刀にふれられるものは自分しかいなかつた。しかし、刀をとりにいってもどつてくると立ち入り禁止になつていて結局、刀をわたすことはできなかつたが。

男は鬼柳を無視して紅菜をみていた。その目があまりにも優しそうに愛おしそうにみつめるので鬼柳は腕の力をゆるめる。

「かせ」

偉そうに男は「うと紅菜をうぱい」とつてしまつ。そして、そのまま川の淵までいくと紅菜をほおりなげてしまつた。紅菜の体はバシヤンと音をたてて水のなかにおちた。

「な、なんてことをつ」

おどろいてかけよろうとする鬼柳を男は制止する。そして、紅菜にいった。

「おい、こつまで寝ぼけてるんだ」

水の冷たさに完全に覚醒した紅菜は前髪をかきあげて、「

「師匠、ひどいです」

子供が拗ねるような表情をわざとしてこる。螢蘭はにやっと笑うと紅菜にいった。

「体、洗えよ。汚いからな」

その言葉に紅菜は背をむけると着ているものを脱ぐ。腰にはまだ布が巻きついているが水で紅菜の体の線がよくわかつた。それを真つ赤な顔をして鬼柳はみていた。

「ゴキ。

そんな鬼柳の首を螢蘭はへんな方向へまげる。そして、その顔に極悪な顔をちかづけておどした。

「みてんじゃねえよ」

その日は殺すとかいてある。紅菜にはきこえない特殊な声でいつているので背をむけている紅菜は螢蘭の本性をしるとはなかつた。

「師匠？ 着るもののは？」

「ああ、用意してある」

紅菜の言葉にすっかり極悪面はなりをひそめ、紅菜を水からひきあげる。紅菜の足が土で汚れないように抱きあげたのだが、自分が濡れてしまうことはかまつていないうつだ。そして、紅菜の首筋に鼻をちかづけるとくんくんと匂いをかぐ。

「よし、いい匂いだ。いつまでもあんな臭いしてたら魅力が半減しちまつ」

螢蘭は腰にまいた帯から袋状に折りたたまれた紙をだすと地面に投げた。すると紙のなかから着物と櫛と化粧台がでてきた。畳まである。そのうえに紅菜をおろすと着物をきせていく。

着替えなどしている場合かと螢蘭は自分につっこんだが、どうしてもこのまま血に汚れている紅菜をみていたくなかった。紅菜の犯した惨劇をすこしでもなかつたことにしてやりたかった。

紅菜が自分のしたことに傷ついてるんじゃないだろうか、というおもいからだつた。それに今回のことと自分で自分自身にきづいてしまつ

た紅菜の気持ちをかんがえるとどうじとも。

「師匠？ いつからいのです？」

髪をとこでもひつている紅菜は、その言葉に螢蘭は首をひねる。

（覚えてねえのか？）

しかし、きをとりなおして紅菜の髪をととのえていく。紅いの紐で髪をむすびながら紅菜にいった。

「今きたところだぞ」

「どうして、あんなに汚れていたんでしよう？」

「いいじゃんか、きにするなよ。たいしたことじゃない」

螢蘭は覚えてないほうがなにかと都合がいいとおもい。紅菜になるべく深くかんがえないようにいった。そのようすをみていた鬼柳も口をつぐむことをきめると自分で首をなおす。

春の菜の花のような紅菜の姿におもわず、目をほそめる。ほとんど肌着同然のところに表衣をさせただけの姿だが、充分美しい。

鬼柳は紅菜に師匠と呼ばれた男にすこしだけ惜気がおきる。

「よし、帰るぞ」

仕度をととのえた紅菜をだきあげて螢蘭はいった。しかも、とうぜんのように紅菜の頬に口づけもしている。これまでいいなりで大人しくしていた紅菜は抵抗をはじめた。

「だめです。師匠、昂摩をつれもどしにきたのにこのまま帰れない

「ほう。俺と菜稚琉の約束破つてでてきて。まだ、偉そうに主張するか」

ぴりぴりとした言葉がかえされているといふのに紅菜はきにしない。それどころか「約束はまもつた」とツーンとしてしまつている。

「師匠、嫌だ。絶対にかえらないー」

紅菜は腕を突つぱねできるだけ抵抗する。しかし、そこはしょせん女の力。男の螢蘭にかなうはずなかつた。それでも、紅菜は口で攻撃する。

「師匠のけち、はげ、馬鹿たれ……」

「俺ははげてねえし、けちや馬鹿でもない」

紅菜をおさえつけて歩いていく螢蘭に鬼柳はついていく。どうすればいいのかわからなかつた。紅菜に加勢するべきなのか、それとも螢蘭に加勢するべきなのか。

「女の敵、変態、痴漢」

「俺はいつも女の味方だ」

「女装趣味、姉様にいっつけてやる」

その言葉に螢蘭はしんそこ勝ち誇つた声でいう。

「俺はべつにいいけど。こんかい怒られるのは紅菜のほうだろ？？」
その言葉に紅菜はかたまる。菜稚琉の顔がうかんだ。それも、幼いとき一度だけ本気で怒られたときの顔だ。正直、恐怖がさきたつてしまつ。

「よしよし、いい子だ。大人しく帰るぞ」

そのときだつた。昴摩の気配がした。紅菜は螢蘭の顔がきゅうに険しくなつたことを不思議におもいながら首をかしげてみあげる。いつもなら、可愛い姿に胸をきゅうんとするところだが、いまはそんな余裕はない。紅菜をしつかりとかかえなおすと走りだす。

門の入り口まできたといふのにそこには昴摩がいた。相手はこちらにきづいていない。紅菜の力をおさえる石の副産物のおかげで紅菜を察知しにくいのだ。もちろんのよつに螢蘭も自分の気配をかけている。紅菜が昴摩の姿をみつける。

「あ、こいつ」

螢蘭はあわてて紅菜の口をおさえると声をださないようにする。正直まよつた。紅菜の首にある石をとくべきか、とかないべきか。だが、もしものときのことをかんがえるとどうしても解くことができない。

紅菜の首についている石はただたんに紅菜の力を封じているわけではない。でていつた紅菜の一部がもどりつとするのを阻止しているのだ。これがいちばんの目的だつた。副産物として魂気をつかえない、紅菜を察知しにくいというおまけが多数ついてきたのだ。

(せつかくここまできたのにな・・・)

よこにいる鬼柳はつかいものになりそつともないし。

(しゃあない、鬼ごっこでもするか)

そつ心のなかでつぶやきながら螢蘭はふりかえると走りだそうとした。そのときだつた。招かれざる雑魚がきたのは。あまりの間合いのわるさに目をおおう。それとともににいよいよのない殺意を覚えた。

「あれ、いいのつれてるじゃん。僕らにもちよつとかしてよ」

「なんならずつと俺たちがあずかつてあげるよ」

下卑た笑いの一人ずれの男たちに殺意のこもつた瞳で螢蘭は射る。その瞳に招かれざる客は顔を青くしてあつけなく退散する。おいかけで殺してやりたいとおもつたがそんな暢気な状況ではない。背後から枝を折る音がする。紅菜の口からは場違いなほど嬉しそうな声でそのちかづいてきた相手を呼んでいる。

「昴摩」

螢蘭は決断した。紅菜を鬼柳にわたす。紅菜は「師匠?」と不思議そうな目でみている。

(ああ、可愛いなあ)

頭がきれるようでどこか天然ボケのある紅菜を条件反射のようにどんなときでも可愛いとおもつてしまつ。紅菜のおでこに口づけると螢蘭は紅菜にいった。

「紅菜、いいか。なにかあつたら、こいつを身代わりにしてでも逃げるんだぞ」

けつこうひどいとをいつていてるのだが、表情はかぎりなくやさしい。紅菜と菜稚琉限定にむけられる慈愛にみちた表情だつた。そして、きびしい表情になると鬼柳にいった。

「いいが、死んでもいいから紅菜を守れ。もし、かすり傷でもつけてみろ・・・」

そこからさきは語らなくてもわかる。鬼柳は「はい」とこたえるとちこさな子供を抱くように紅菜をかかえて走りだした。

螢蘭を無視して紅菜をおいかげようとした。螢蘭はその足を鞭でつかまえる。しかし、昴摩はこんどは無様にこけるよつなまねはしなかつた。器用に体勢をたてなおすと、足をふり螢蘭の拘束をふりほどけた。

この鞭は花凜の変化した姿だ。螢蘭の使い魔である龍の花凜はおきにいりの龍である。聰明で賢く、美しい鱗と顔立ちをしている花凜は能力もはんぱではない。

蒼をおろしてすぐ主のもとにかえつてきた花凜はすつと螢蘭命をまつていたのだ。紅菜に自分の正体をきづかれたくない螢蘭は魂気をつかつた戦い方を避けている。そして、いまの状況でさえもその戦い方をえらんでしまう。

あつといつまに紅菜たちの姿はみえなくなつた。そのことに螢蘭は感心する。

（あいつ、逃げ足は速いんだな）

昴摩と力くらべするきのない螢蘭は足の拘束をはずす。そして、鞭をしならせながら戦闘にはいったときの冷たい冷静な顔になる。

「今度は甘くないぜ」

そういうて螢蘭は鞭をしなさせる。紅菜を守ることは古からの約束だ。一人で守つていかなければいけない約束。しかし、それはもう約束の域をこえた約束だつた。

「おりしてくれ・・・鬼柳つ」

紅菜の言葉を無視して走りつづける鬼柳に紅菜はとうとう頭に拳をいた。その衝撃に鬼柳の足がとまる。傷つけるなどいわれているので紅菜をほおりだしてしまつよつなことだけはなんとか阻止した。

「なにするんですか」

紅菜を地面におろすと鬼柳は頭をおさえて苦情をいう。しかし、紅菜は深刻な顔をしてひとつひとつのよつこいつ。

「血がながれてた」

紅菜の目が不安げで鬼柳はそれ以上、なにもいえなくなつた。しかし、あの異様な雰囲気をただよわせる昴摩に紅菜をあわせるのはためらわれる。黒鬼魔王が「夜叉にだけはわたすな」といった言葉がいまようやく肌で感じられているのだ。

走りだそうとする紅菜の手をつかまえると鬼柳はいつた。不安げな紅菜をほつておけないがやはり賛成できない。

「だめです。このまま」

予想にはんし紅菜は手をふりほどこうとはしなかつた。しかし、そのことがよけいに鬼柳の決意をにぶらせた。不安で悲しそうな目をして自分をみつめている。こんな弱い目をするような人だとおもわなかつた。

「・・・・」

しかし、もじろうとはいえなかつた。あの昴摩はまちがいなく紅菜に危害をくわえる。

「呼んでるんだ」

切なそうな苦しい声にもうこれ以上さからうことはできなかつた。手をはなしてしまつ。紅菜は裸足のままかけだしていつた。鬼柳はやはり、しんそこ昴摩が羨ましくなる。自分にはあれほどおもつてくれている人はいない。

螢蘭はおもつた以上の苦戦をしいられていた。何百年ぶりに体に傷ができていい。数日前におつた傷は螢蘭のなかでは数えられない。あれは紅菜のために自分で傷つけたから数えていないし、傷などとはちつともおもつていないので。

たしか最後に傷つけられたのは菜稚琉だ。あれは全面的に螢蘭がわるいということで一人のかなではなしがついている。

「厄介だな」

螢蘭はそいいながらいまついたばかりの手の甲の傷をなめる。生暖かく生臭い味が口にひろがる。花凜を鞭の姿から本来の龍の姿にもどす。そして、花凜に正面から昴摩をおさせた。龍の咆哮が

あたりをふるわせる。

牙を剥きだしで迫つてきた龍の口を素手で昂摩はつかむとそのまま力比べをする。螢蘭はそのすきをついて、昂摩の足の側面にもぐりこむ。

(まずは右足)

腕を剣のようにして昂摩の太ももめがけて突き刺した。しかし、寸前のところでその目標物がなくなる。昂摩は足をおもいつきりまげて飛ぶことにより、螢蘭の攻撃をよけ、花凜の下顎に攻撃をいたのだ。しかし、花凜はなんとかたえそのまま昂摩を食おうとおしゃった。昂摩の体が花凜におされて遠ざかる。

「くそつ、けつこう屈辱！」

螢蘭はおもいのほか動きのよくなつた昂摩にそう吐き捨てる花凜がなき倒してしまつた道をいた。まるでそれは田んぼの稻のなかを猪がとあつたあとのようだ。

もともとの素質が紅菜の影響で開花している。そこに、紅菜の力もくわわり予想以上の力を發揮していた。どうやら、力だけでなく肉体の質もあがつてゐるのだろう。だんだんと速度があがり、傷の治りもはやい。

しかし、腹にあいた穴はふさがつていかない。どうやらおおきな傷には手がまわらないようだ。ちまちまと傷をつけていくようでは止められないということだろう。回復に時間がかかるような大怪我をさせないといけない。そこまでかんがえると螢蘭は半殺しにするのが最良と結論づける。

螢蘭はすばやく花凜においつくと鼻先にのる。そして、昂摩の顔面に蹴りをいた。

「これで、どうだ！」

一発目をいれる。昂摩はそれでも花凜の口を押さえたまま。昂摩は腹に力をいれてふんばるとそのままズズズと一本の平行な線をかきながら花凜をとめたのだ。そして、花凜を引き裂こうとする。花凜は身をぢぢめて首をふつた。昂摩をふりはなそうとしている。

「お、おい。花凜ッ」

花凜は昴摩をふりおとしたが、螢蘭もふりおとされてしまう。しかし、花凜はふりおとしてしまった螢蘭を捕まえると空へとにげる。やはり、賢い子だからこちらが命じなくとも行動をおこしてくれる。上空で螢蘭も花凜も体勢をたてなおす必要があった。

「よしつ、いくぞ。花凜」

花凜は急降下をする。標的はもちろん昴摩だ。昴摩も大人しくまつているつもりはないのだろう花凜をみあげて下半身を曲げている。そして、間合いをみて飛びたつた。花凜の鼻に手をあてると腕の力だけでせらにとぶ。

「きたな」

螢蘭は不適に笑うと飛びついでくる昴摩の体に触れるか触れないかほどの力ですっと撫でていく。昴摩の体から自由がなくなり、そのまま重力にしたがつておちていこうとした。螢蘭はその体を片手でつかみとる。花凜はそれみると上昇していく。

「いのへんでいいだろ?」

螢蘭はそういうて手をはなした。昴摩は無抵抗のまま落下。その姿はまるで人形のようだった。この高さから落ちればいくらなんでもただではすまないだろう。螢蘭の希望は全身骨折なのだが、うまくいくだろうか。受身すらできないのはやはりやばいだろうか。

「うん?」

螢蘭が昴摩の落下をみているところとな影がふたつみえた。その影は昴摩が落下するところへちかづいてきている。ふたつの影はなにかいあつてているようだ。背の低いほつが両腕をひろげてうけとめようとしていた。

「紅菜じゃねえか!—」

螢蘭はあせつて花凜からとびおりると昴摩をおうよに落下する。花凜もおなじように落下をはじめた。術もつかえないただの人間の紅菜にこの高さから落下してくる昴摩をうけとめることは不可能だ。どうかんがえたつて紅菜の即死は目にみえている。

「くつそー。とどかねえッ」

せつかく一瞬のすきをついて魄氣で動きを完全に封じたといつのことのままではいけない。しかたなく、螢蘭は気合をとばして昴摩の体にかかっている魄氣をといた。すると、とたんに昴摩は身をまるめてぐるぐるとまわると猫のように着地する。着地と同時に紅菜を乱暴に抱き上げると攫つていこうとする。螢蘭はいまだ空中にいる。

「とめろッ」

螢蘭は叫ぶしかできない自分に苛立ちを覚えながらせまりゆく地面をいまかいまかとみつめる。

昴摩を阻止するよつにたちはだかつた鬼柳はまつたく歯がたたない。昴摩に斬りかかるうとした刹那。鬼柳の腹から大量の血が噴出した。昴摩は鬼柳が地面に完全にはいつくばるまでに紅菜を抱えて姿をけしてしまつた。

「花凜、追え」

やつとのおもいで着地した螢蘭はますますあせつた声で叫んだが、もうすでにおそかつた。昴摩は完全に気配をけしてしまい樹海のかにきえてしまつてゐる。上空にいる花凜の田でさえ見失つてゐるだろつ。

じつなるとたよりは臭いしかない。螢蘭には昴摩の血の臭いしかたどるものがなかつた。紅菜からぬきとつておいた獣笛をだすと口にふくみ、その音色を奏でた。このちかくでもつとも鼻のきく獣がいることを願つて吹いていく。

しばらぐすると草むらから一匹の妖獸がでてきた。妖獸に昴摩がながしていつた血をかがせる。螢蘭はその妖獸の背にのると鬼柳のこしてさつていく。追うのは昴摩だ。

昴摩が紅菜を殺してしまつまえにとりおさえなければならぬ。とここん予定が狂つてゐる事態に螢蘭はあせりと苛立ちしか感じなかつた。

「昂摩つ、おるせ。おまえ腹に穴があいてるだらう」

腹からはもう血はでていないようだが、衣の汚れぐあいから相当の量の出血があつたことは容易に想像できる。なんど、紅菜が腹を応急処置してやるといつても昂摩は無視してはしつっていた。力がつかえれば治癒ですぐに治すことができるのにいまそつはいかない。

「昂摩ツ」

昂摩に荷物を抱えるように運ばれている紅菜にはいつたいなにがおきているのかわからない。きがついたときには螢蘭と鬼柳がいて、なにがどうなつているかわからないあいだに昂摩と螢蘭が闘つていた。二人をとめようとあいだにはいつていつたら、拉致されるように昂摩に抱えあげられ今の状態だった。しかも、信じられないのは鬼柳に手をあげたことだ。

（どうなつてゐるのか、さつぱりわからん）

いくらかんがえてもどうしても全貌がみえてこない。紅菜はなんども記憶をたどりうとしたがどうしてもおもいだせない。まだ覚えてこるのは昂摩の母親と戦つて、黒鬼魔王があらわれたところまでだ。そこからさきがほんやりとしていてはつきりしない。

昂摩はなにも語らうとはしない。川にはいりさかのぼつていた。そして、岸にあがるとそのまま、またどこかへと走つている。そして、木々がしげり光のとおらない場所にきた。そこには人の丈ほどの縦穴があいていて奥はさらに暗くにもみえない。

奈落の穴のようなその場所に昂摩はとびこむ。紅菜は落とされないようすに昂摩の背中を強くつかんだ。奈落だとおもわれたその穴は意外とあさく、まだ奥につづく通路があるよつだつた。昂摩はなにもいわす奥へ奥へすすんでいく。

「つ・・・」

急に光がさし、眩しさに目をつぶる。そんな紅菜を昂摩は豊かな芝生のうえにほうり投げるようにしておるした。芝生のおかげで痛みはないが、昂摩にこれほど手荒にあつかわれたことはない紅菜は

戸惑いを隠せない。いつたい昴摩になにがおきているのだろうか。

「昴摩？」

紅菜はみさげてくる昴摩をみあげていった。逆光のせいで表情がわからない。なぜだかわからない恐怖を感じていて。ただ、感じるのは昴摩が昴摩ではないことだけ。

のばされた手を反射的によけてしまつ。紅菜はふるえる自分の手を押さえるように胸のうえでかさねた。紅菜らしくないあきらかに恐怖が表情にでている。そんな紅菜の手を強引に昴摩はつかみあげるとひきよせた。紅菜の体がたおれるように昴摩の胸におさまる。

「・・・ッ」

しかし、腹の傷にあたり、とまつていた血がふたたび流れだす。緑の芝生に昴摩の血が染みていく。紅菜は自分の手が濡れていることにきづくとあわてて昴摩からはなれようとしたが、昴摩がそれを許さなかつた。紅菜にも昴摩の血が染みていた。

花凜と螢蘭はふたてにわかれ昴摩と紅菜の姿をさがしていた。螢蘭は幼獣にまたがり森をぬけ、川のまえでたちつくしていた。愕然としてしまう。昴摩の血の臭いをたどりてきたといふのにここで臭いはどぎめている。妖獣は臭いがどぎめていることにいつたりきたりするばかりであるで役に立ちそうにはなかつた。

花凜に期待してもだめだろう。ここにくるまでもあり田のはいらないところばかりをつつきってきたのだ。この川ですら左右に木々が茂り、上空からはみえにくはずだ。

「おちつけ、かんがえるんだ」

もし最悪の場合、紅菜が死んでしまつていても紅菜の魂をこのままにはしておけない。紅菜の魂をしかるべき場所に納める必要があつたのだ。紅菜の魂を自然なながれのまま輪廻の輪にくわえることはできない。

桜雅族独特的輪廻の輪ではないと紅菜の魂は分解されてしまうことになる。これまで力をつくして守ってきたといふにすべてが無

駄になるのだ。やつなると紅菜がもう一度この世にあらわれるこ
とはない。

螢蘭はつぶやきながら髪を鷲掴みにする。昴摩をおつてきたこの道には迷いが感じられなかつた。一直線に移動しているのだ。しかしも、木々が茂る暗いところを一直線にむすぶようにだ。どちらには木の大きな窪みや洞窟なんかもあつたにもかかわらず、それらを無視してここまでできている。百歩ゆずつて臭いにきをつかつたとかんがえても、もつとちかくに池があつた。それに獣笛の存在もしないのにこんなに臭いをきにするだらうか。

（目的地がはつきりしている）

螢蘭はそう結論づける。いきなれた場所だからこそ、迷いなく速度をおとすこともなく走りつづけていたのだろう。特定の隠れ場所があるはずだ。だれにきくのがいちばんいい。母親か、黒鬼魔王か。かんがえるよりもさきに螢蘭は獣笛をひびかせていた。妖獸は鬼の城へ全速力ではしる。

数刻もしないうちに螢蘭は荒々しく扉を開けた。そのへんにいるやつをながば脅迫しながら目的の人物にたどりついていった。

「な、なんなんですかッ。ここをどこだと」

男子禁制のこの場所にいるのは黒鬼魔王の妻たちだ。侍女たちは薙刀を交差してたちはだかる。そのあまりにも無神経な態度に螢蘭は妖氣をはなつて威嚇する。殺意のこもつた妖氣に侍女たちの呼吸が困難になる。

「おまえが夜叉の母親だな」

ぶつきらぼうな言葉をかける螢蘭にいつも姿はなかつた。女性第一主義の螢蘭からは想像もつかない行動と言動の数々。それほどに事態は緊迫している。

「いかにも」

そうこたえた女性の口は冷たい色をしている。しかし、美しい人だつた。

「昴摩がよくいく場所や隠れ家にしてそな場所に心あたりねえか

訝しい田で螢蘭をみると昴摩の母親は「それがどうしました」とこたえた。刻一刻の事態に苛々しながら螢蘭は怒鳴った。女性に怒鳴るなど平常な螢蘭にはかんがえられない。

「つべこべいわす教えろッ！」

昴摩の母親は田をみひらいておどりき、自分には心あたりがないんだと首をふった。その姿に舌打撃すると螢蘭はその場をさる。早足で歩きながら次の策をかんがえていた。

そして、ハツとぎづく。生き物を探すのにもつとも優秀なものがいるではないか。

一本の指を口にふくむと音をなす。「一ーー」という音をなんとかならせば花凜が螢蘭のもとへおりたつ。螢蘭は花凜にとびのると「全速でいけ」と命じた。花凜は気合をこれるように吼えると飛びたつ。あたりは花凜のおこした風圧でぐちやぐちやになつてしまつた。妖かしでさえ飛ばされている。

（花凜なら一〇分でつく）

魔界の門のまえにいた柏と田融は門があきそのなかから螢蘭と螢蘭の使い魔がでてきたことにおどろく。

螢蘭はまったくこつちをみよつとしなかつた。そのことが一人におきな影をおとす。

「絶対にかあつたんですね」

そういうて、不安そうな柏に田融はこつた。

「おいかけましよう」

だが、花凜のあの異常な速度はとても追いつけるようなものではない。どこへいくかもこいつあたりのない柏は「でも」といこもる。

「せつと菜稚琉様のところでしょ」

田融はそういうてはしおだした。柏も田融にとぎづく。

花凜は一〇分もかからず屋敷にもどってきていた。舌をだしじや、と息のおおい呼吸をしている。螢蘭は花凜の体をいたわるよ

うにたたき声をかける。菜稚琉の指摘にすこし心がおちついていた。紅菜の首にかけたあの石の術の解除にはふたつある。かけた本人が自分の意志で解くこと。そしてもうひとつは術をかけられている者が死んだ場合だ。冷静になれば紅菜の術は健在だった。

「よくやつた。あとは休んでろ」

移動中に螢蘭は菜稚琉に状況を説明している。すこしでもはやく目的の物をよこしてもらおうとしたのだが、菜稚琉はそのままもどつてこいといったのだ。そして、あわてて菜稚琉のもとへいく。本堂にいるといつていった。

「菜稚琉！」

螢蘭があわただしくふみないと菜稚琉は体いつぱいに汗をながしながら神獣をおさえていた。その神獣は天界でもっとも足の速い生き物だ。神が使いとして古の昔からよき王につかいとしてつかつてきた生き物。

「・・・・・これは」

予想外の生き物がいることに困惑の瞳をむける。いかに菜稚琉といつてもこれほどの大物を使役することは難しいはずだ。しかも、この短期間でかたのつく相手ではない。

「はやく、獣笛をッ」

その声に螢蘭は菜稚琉の思惑を悟ると獣笛をふく。獣笛の音を聞いたとたん神獣は大人しくなり菜稚琉を開放した。菜稚琉はあまりの脱力感に膝をおり床にすわりこんでしまう。

「菜稚琉、大丈夫か」

そういつて駆けつけてきた螢蘭にほそい筒をわたすといった。その筒はいつも菜稚琉の髪飾りとして頭にあるものだつた。菜稚琉の管狐のなかでゆいいつ名のついた管狐をとじこめた髪飾り。

「冷静にいきましょう。まだまだ対応しきれる範囲内です」

菜稚琉はそこで言葉をきると今度は狩りの仕方を説明する。

「いいですか、道案内をこの子にさせて背にのつたまま狩りをするんです。そのほうがこの子が動くよりずっとはやいですから。それ

と・・・

自分に紅菜にしてあげたように菅狐をおさえることはできないことを螢蘭に説明しようとしたが、螢蘭はそれをさえぎつて「わかつてゐる」といった。とてもいまの菜稚琉に菅狐を遠隔操作できるだけの力はのこつていなかつた。のこつていていたとしてもそんな無理はさせたくない。

「たのみましたよ」

菜稚琉の言葉に螢蘭はたちあがると「ああ」といつて菜稚琉の用意してくれた神獸にまたがる。菜稚琉のよびだした神獸は麒麟きりんだつた。

麒麟は一瞬できえていつた。

菜稚琉は仰向けに寝ころがると肩で息をしたまま力の回復をまつ。螢蘭がさつてだいぶんたつたころ柏と円融がきた。疲労感で眠気におそわれていた菜稚琉は無理やり田蓋をあける。

「紅菜様になにがあるんですか？」

円融の言葉に菜稚琉はほほ笑みもせず、遠い田をしていう。

「ときがくればわかります」

まだ、だれも遠い昔にかわした私たちの約束をしる必要はない。遙か昔、菜稚琉と螢蘭にたくされたおもいをしる必要はないのだ。そして、そのまま菜稚琉は深い眠りにはいる。夢を見るのは楽しかつた。あのころを走馬燈のようにきれいな楽しい思い出だけを夢にみる。

昴摩の隠れ家は不思議な光につつまれている。縁にあふれたその場所は岩の壁も地面もすべて縁におおわれている。円柱のその穴は薦の蓋がされていて明るいのは茹にはえる茹のおかげだ。茹は縁から黄色の光をはなつていてあたりが田でみえるほど明るい。すこし、すきまのあいた屋根からは日の光もさしている。

昴摩の体をきづかうとどうしても強引なことはできず、紅菜はどうしたものかとかんがえる。さきほどまで抱いていた恐怖心より昴

摩の体をおもつ心のほうが勝っていた。

「昂摩」

できるだけやさしく名をよんでもやる。昂摩がどんなふうにあの城でいききたのかわかったから。だから、あんなに紅菜がつけた名前をよろこんだんだ。紅菜のだれよりもこけほんそばにいるようにつけた名前だ。

昂摩のきつく縛るような腕の力がすこしよわまる。紅菜はおなじように昂摩の名をよんだ。そつと紅菜は昂摩の体をおしかえすと昂摩の目をみた。離ればなれになつてからこいつして昂摩の目をみるのははじめてだ。

金色の瞳がすがるようにむけられていて、なんだか辛そうだった。そつと頬にふれて紅菜はいいきかせるようにこいつ。

「止血しよう」

そして、紅菜は腰紐をほどくと袴も脱いでしまつ。袴をちょうどいい大きさに破く。昂摩のきているものもとりあげると傷口に袴をおしあてて、袴の紐で縛つた。昂摩は苦痛そうに呻いたが、紅菜は力をよわめず、そのまま胴回りをしつかりと固定するように腰紐でさこじ縛る。

止血はおわったが、おもつた以上に出血がひどい。大量の血液が失われてしまつたことで昂摩の体は死人のようにつめたかった。

「全部脱げ」

紅菜はいうがはやいか行動がはやいか昂摩から濡れている衣をはぎとる。紅菜は自分の乾いている表衣とそのしたに着ていた襦袢を昂摩にきせる。表衣を昂摩にかけるとその体に自分の身をよせる。体を温めないとおもつたからだ。そして、掌を歯で傷つけると昂摩の口元によせた。昂摩は躊躇いもせずその血をすする。

「紅菜」

しばらく血をすすつていた昂摩が紅菜の名をよんだ。血はもつとまつているがまだまだ血液がたりない。紅菜は昂摩が自分の体をきづかってくれているのだとおもい。さうに手を昂摩のまえにだすと

いう。

「いいから、飲め」

しかし、昴摩はそれ以上のもつとはしなかった。さきほどの高压的な雰囲気はうすれて紅菜の目にはちいさな子供のよつこいつつ。首に手をまわすと頭をなでていつてやる。

「一人で帰ろうな」

一人で帰ろう。

その言葉に昴摩は穏やかに手をつぶる。一人でいたいのだ。一人でなくては意味がない。

（・・・・紅菜・・・・）

オレだけのものにしたかった。ずっと、ずっと。自分がだけが特別だと生きる実感があるといつてくれた。だから、昴摩はよけいにそばにいたいとずつといつしょにいたいとおもつたのだ。自分が紅菜の特別でありつけたいと。

（あ、鬼柳。はやく助けてやらないとあいつ餌になるな）

紅菜は不意に鬼柳のことをおもいだす。魔界でんなふうに腹に穴をあけてよこたわつていたら、死んでしまつ前に魔獣や妖獣に食われたりする。たぶん、動けたらどこかにかくれているとはおもつただけど。できるだけなんでもないように紅菜は昴摩にいつ。

「なにがあつたかはしらないけど、鬼柳もつれしていくぞ」

その言葉に昴摩の表情がかわる。ギリつと歯齒がなり険悪な表情をうかべた。その表情をみたものはあまりの切なさに涙がでるかもしない。しかし、紅菜がその表情をみることはない。

「・・・・オレさえいれば」

ちいさいつぶやきに紅菜は「何？」と問いかける。昴摩はなにがいいたいのか耳をすました。

「・・・・・」

しかし、なにも返事はなかつた。沈黙がながれる。

その沈黙をやぶつたのは昴摩だつた。紅菜の体を強引にひきはなす。つかまれた腕がきしむほど強く握られていて紅菜は苦痛を昴摩

にうつたえる。しかし、いつもならぬむはすの力がいまは強く握られたまま。

「昂摩」

紅菜は昂摩をみあげる。その表情はなぜか激怒している。紅菜にはまったくその意味がわからない。なにかきにさわることをいつたのか。それともいつも怒気なのか。しかし、今までこんな表情をむけられる」とはなかつた。こんな怒氣をはらんだ表情はみたことがない。

昂摩は襟元に手をかけると力まかせに左右にひらいた。紅菜はまさかこんなことをされるとはおもつてこらはず、目をみひらいて昂摩の次の行動をみているしかなかつた。どうして、こんな自分を責めるような目をしているのかわからない。

胸がすべてみえているわけではないが首、鎖骨と昂摩の目とにせりしてしまつていて。いつもならなんともおもわないこと。

「あつ・・・」

紅菜はなぜだか物凄く恥ずかしいことをしてくるようなきがして手で胸をかくそうとする。いつもなら、目をそらして赤くなるくせにいまはまつすぐと紅菜をみすえているからかもしれない。

「や、やだ」

隠そうとした手をおさえられて紅菜は抵抗する。しかし、靈力をつかえるのなら勝ち目はあるがいまはなんの力もつかえない普通の女の子なのだ。力では昂摩にまけてしまつ。

「昂摩、いやだ。やめてっ」

紅菜にこたえずただそんな紅菜の姿をみているだけだ。

「オレのだ」

昂摩はつぶやいて紅菜のむきだしになつた白い肌に顔をよせる。紅菜はなにをされるのかわからず抵抗の言葉も頼りなく弱々しいものになる。

「・・・・」

ぴちやつと濡れた音がしたとおもいと激痛がはしつた。痛みの場

所は心臓のうえの皮膚だ。容赦なく昴摩の牙がふかく突き刺さつてくる。紅菜は身をそりしてその激痛に悲鳴をあげた。

「さやああ、ツ」

昴摩は滴る血をなめとる。一滴でも逃がさないようにあふれる血を次々と舐めとつていく。紅菜の強張っていた体から徐々に力がなくなつていく。急速に自分の熱がなくなるのを感じながらぼんやりとしていた。腕にも力がなくなりだらんとたれてしまつていて。そんな紅菜のようすに昴摩は戸惑うことも後悔すらせずには血をすすつていた。このままありますことなく血をすすり、飲み干し、魂ごと心臓を食つてしまえば、紅菜はずつと血分だけのものになる。

「おらあああああ

天井がつきやぶる音と叫び声が響く。昴摩は妖氣でふつてくる木や葉、薦をはじきとばした。紅菜と昴摩に田の光がふりそそぐ。

「昴摩、てめえ」

螢蘭はあまりの光景に怒りをあらわにする。そして、昴摩の心臓を背中からひとつにしようとした。しかし、紅菜が昴摩の心臓を守るように背中に腕をまわす。そして、螢蘭をみつめながら紅菜がいった。

「殺さないで」

声はとぎれとぎれで力がなく、その表情には生氣がなかつた。白く弱々しい顔は死に顔のようだ。螢蘭はぞつとする。紅菜を田のまえでうしなつてしまつ。しかし、螢蘭がかまえたままかたまつていてと紅菜はさらりと言葉をかける。

「師匠・・・お願い・・・・」

螢蘭は鋭くのばした指を拳にかえるとそのままなにもいわず背をむけた。苦渋の選択だつた。紅菜の腕ごと昴摩の心臓を貫通することもできた。紅菜の腕はすぐに菜稚琉に治療させればいい。菜稚琉なら痕ものこらずきれいに治してくれる。では心はどうやつて治すのか。

あの惨劇の日。あの後にみた紅菜の姿は見るに耐えないものだつ

た。黒く艶やかだった髪は老いた年寄りのようになり、目にも光はなく、笑うことも怒ることも泣くこともなかつた。人形のように感情がない紅菜の姿は間違いなく自分たちの落ち度の結果だつた。

「紅菜ツ」

すがりたいのは紅菜のはずなのに昴摩は紅菜の名をよぶ。紅菜はそつと頭をつつみこむ。不思議と恐怖心がない。死への恐怖もなかつた。

「昴摩、好きなだけ飲め。おまえになら全部やる」

「うわ」とのような力のない言葉なのにその瞳は強く光をやじじいた。体が冷たくひえて指の動きがにぶつてくる。はあ、はあ、とあさい息をくりかえす言葉は体力を消耗していく。

「・・・紅菜・・・」

昴摩が紅菜をみあげてくる。皮膚に食いこんだ牙はひどく惨たらしい痕を白い肌にのこしてしまつていて。紅菜は冷たい手で昴摩の頬にふれる。ここにきたときとはちがい昴摩の頬には血色がもどりあたたかかつた。紅菜はそのことが無性にうれしくなつて、自然と涙があふれてくる。

「昴摩、よかつた」

声までふるえている自分が紅菜は不思議だ。声がふるえて涙がでるのにわるくない。

「紅菜、オレのこと好きか?」

昴摩は紅菜をみつめていた。紅菜はそんなあたりまえのことをいわれておかしそうに笑つてこたえる。どうしてそんなわかりきつたことをきくんだろう、とおかしくてしかたなかつた。

「あたりまえだ」

その声も表情も満足そうで昴摩は目から鱗があちたように後悔の念がうかぶ。そして、あわてて自分の肩にかかつた衣で紅菜をつむと労わるようだきしめる。

（ふふふ、いつもの昴摩だ）

うれしそうに心のなかで笑うとそのまま意識をなくした。力がなくなりどうしりと重くなつたことで昴摩はよけいに冷静さをうしない紅菜を抱えたままおろおろとするばかりだ。

螢蘭の存在をまったく忘れている昴摩の頭に蹴りをいれると螢蘭は一喝する。

「馬鹿やうう、落ち着け。今すぐ命がどうにかの状態じゃねえ」

そして、一人は紅菜を抱えたまま鬼の屋敷にもどる。ここから一番ちかいのは鬼の屋敷だ。

（チツ、無理してでも麒麟のこしておけばよかつたな）

ここについですぐ麒麟を自由にしたのだ。いつまでも麒麟をおさえつけることはむずかしかつたからだ。麒麟ほどになるとずつと獣笛をふきつづけていなければならなかつた。そこに管狐もいたのだ。神経をこれでもかと酷使しなければいけなかつた。

「あ、黒鬼魔王」

紅菜に負担がかからぬようにはしつてているとくたばりかけている黒鬼魔王を螢蘭はみつけた。昴摩も黒鬼魔王に大怪我をおわせたことをおもいだす。それとともに鬼柳のこともおもいだした。

「螢蘭様、鬼柳も忘れてる」

「しるか。おまえが回収しにいけ」

昴摩の言葉にそうかえす。わざわざ頭のなかで天秤にかけなくとも優先順位はわかる。こたえをみちびきだすのは呼吸をするよりも簡単だつた。

「鬼柳はあとにしましょ。あいつも妖かしのはしくれですから大丈夫です」

黒鬼魔王にいま死なれては自分が魔王の座につかなくてはいけなくなる。せつかく相思相愛の確認もできた昴摩はなるべく煩わしいことは避けたい。

「はなから心配しない」

螢蘭はそういうと昴摩の肩に黒鬼魔王をぶらさげる。そして、紅菜をひきとらうとしたが昴摩はいやがつた。威嚇しても脅してもゆ

ずらないのでしかたなくあきらめる。

(ああ、俺の紅菜がとつとつ・・・「ハハハ」)

「親父、つかまつて。おちたら拾つてやる暇はない

そういうと昴摩ははしつだした。昴摩がだれよりもなによりも優先するのは紅菜。

「誰か、医者だ。医者を呼べつ」

荒々しく城のなかにはいると黒鬼魔王をおひす。家来たちは黒鬼魔王に群がり手当でだと騒いでいる。紅菜にはとげざとのようじだれも手をかさないしきづかないようにすげていく。

昴摩は騒いでいるものたちを無視して自分の部屋にこいつとする。紅菜の体を樂にしてあげたかった。血の気がなく、青白い顔に紫の唇をした紅菜は動こつとはしない。紅菜はまだ気絶したまだ。

「ちよつとまて」

窓を「ン、ン」とたたく音にきづいた螢蘭は窓を開ける。そこには菜稚琉のよこした管狐がいた。額に×の傷がある管狐と頭に三角巾をまいている管狐だ。螢蘭はその特徴的な管狐を喜んでまねきいれる。

「昴摩、腕のいい救護隊がきたぜ」

言葉をいいきるまえに管狐たちは昴摩の腕のなかにいる紅菜にちがつく。そして、紅菜の傷をまじまじと観察して、手首をつかみ脈をみる。

「匠は互に顔をあわせるとンンンと泣きあうとつん、うん、とうなずきあう。それから包帯をとりだし、薬草を調合すると患部にぬる。さらに薬草を調合して紙につつむと昴摩にわたした。

「・・・一日三回服用？」

管狐にわたされた袋にかかれた字をよんで昴摩は疑問をつかべる。螢蘭はそのよろすに三角巾の管狐をしめあげながらすじむ。

「だが、そんなことしろつてんだ。ああん？狐料理にして花凜の餌にすんぞつ」

管狐は汗をながしながら首をふる、ふる、ふるとび「からか一通の手紙をだした。そこには菜稚琉の字がかれている。

「・・・・・なんだ?」これ!?

やつこつて螢蘭は手紙を手からおとした。昂摩はその手紙をひろいあげるとよむ。

紅菜へ

死ぬような怪我ではないのなら血力で治しながら無理をした罰です

昂摩は一杯皿もある」とひきびきぱりつとめぐる。

螢蘭へ

人は意外に丈夫にできているのです

くれぐれも管狐を脅しておもいどおつにしおなこよつに

昂摩は螢蘭に一枚目の紙をわたす。いままたに手紙にかかれているように、螢蘭は一匹の管狐に凶悪な顔をむけて握りつぶそうとしているところだった。

「なんだよ」

きがたつているのだろう。やつこつて差しだされた一枚目を乱暴につけとるとそこに手をおとした。そして、青ざめてあきらめた表情をつかべ氣の毒におもいほど肩をおとした。

螢蘭から解放された管狐は黒鬼魔王にちかよると、風穴のあいた患部に手をてる。そして、かざした手から黄緑の光をだすとあつとゆうまに傷をふさいでしまつ。黒鬼魔王は患部を押さえながら起きあがるといった。

「鬼柳を忘れているだらつ」

その言葉に昂摩は「あつ」とこつて黒鬼魔王を見るのだった。鬼柳はそのあと家来たちに捜索され城につれもどされると黒鬼魔王と

おなじように管狐たちが跡形もなく傷を治した。

結局、紅菜は一週間も高熱につなされ意識を朦朧とさせた苦しんだ。やつと一週間たちあがれるよつになつたが、動くたびに傷が痛んで苦痛の表情をうかべる。

大量につしなつた血をつくるため薬草の食事が四日ほどつづいた。そのときがもつとも苦痛そうな顔をしている。薬草がなかなかの味でしかもかなりの量があるのだ。

昴摩はつきつかりで看病し、自分の部屋をとうぜんのようになに紅菜に提供している。

紅菜の口にあう消化にいい食事をつくるのも昴摩。

調合された薬を紅菜に飲ませるのも昴摩。

さすがに着替えと体をふくのは螢蘭がやつたが、それ以外はなんでも昴摩が率先してやつた。そんな夜叉の姿にまわりはただおどろくばかりだった。紅菜のそばにいる昴摩はおどろくほど表情がかわり、子供のようにうつり。

この城での昴摩は冷静、冷徹、けつして笑うことも泣くこともない非情な夜叉。いつさいのすきをみせない優秀な時期王。けつして、笑つたりましてや人にからかわれたりするようなことはない。

昴摩はこんなところでも紅菜が安心して眠れるように紅菜が眠るときは椅子にすわって手をにぎつてやる。はじめて夜叉の権力をつかい誰もちがづかないように人払いをしてもいた。それは徹底していくて、この部屋にちかづけるのは螢蘭と昴摩だけだ。それがたとえ黒鬼魔王としてもおいかえしていたのだ。

そして、一週間がすぎ。血色も完全によくなり歩けるようになつた紅菜を昴摩はつれて自分たちの屋敷にかえつた。黒鬼魔王にも母親にも挨拶すらせずにさつさと帰つていつた。安心できるところで一刻もはやく静養させてやりたかった。

ここはしょせん魔界。紅菜が安心して休めるようなどりではない。

紅菜は昴摩をもつ使役しなくていいことを螢蘭は説明していた。紅菜にかかつっていた魔をはらう術をとりのぞいたと説明したのだ。解いた理由を螢蘭はこう説明している。

「もう自分の身は自分で守れる紅菜にそんな術は邪魔なだけだ」

表向きは紅菜の身を守るためにかかつっていたとされるその術は実は柚羅（ゆら）乃が遙か昔に紅菜にかけた術だつた。本来の効果は紅菜のなかにある昴の血を抑えることにある。しかし、今回のことでの昴の血は昴摩の体に封じこめられたのでもう紅菜には必要なくなつた。

副産物に魔をよせつけないという効果があつただけだ。両親がかけたということになつてはいるがあんな高等な術をかけられるわけがない。形だけの儀式をさせてそつおもいこませていただけのこと。

「昴摩とよんでもいいのか？」

そのことをしつた紅菜が昴摩にいちばんにいつた言葉だ。昴摩は紅菜の手をにぎると額をつけて紅菜に願うようにいつた。

「オレの名前は紅菜からもらつた昴摩だけだ」

それをきいた紅菜はうれしそうに何度も何度も昴摩と名をよんだ。そのことを昴摩も喜んでうけいれる。そして、紅菜にいつた。

「何度もよんぐれオレのゆいいつの名を」

螢蘭はそんな昴摩に殺意をむけていたが無邪気に喜ぶ紅菜に免じて半殺しで許してやると心のなかでつぶやいたのだった。

黒鬼魔王の協力もあり、こんかいあつた紅菜の騒動は他言無用になつてはいる。紅菜にも教えないということで昴摩、螢蘭、黒鬼魔王のなかではなしがまとまつていた。記憶がないのにわざわざ教えてやる必要はない。

紅菜は何者だ、と疑問をぶつけ事細かな説明を求める者もちらほらいたが、黒鬼魔王、夜叉、螢蘭の圧力にあつてはそれ以上追求する馬鹿はいない。螢蘭などこれ以上とやかくいうやつがいれば抹殺、

とこう雰囲気をかくすこともなくありありとだしていた。

「一切の他言を禁じ、これを破つたものはじきじきに処罰する。それで異論はないな」

黒鬼魔王のこの言葉でこのことは完全にかたがついた。

紅菜の傷はすっかり完治していた。傷の痕がのこつてしまつていつたが、螢蘭が首の石をとつてくれると紅菜は自分でその傷を跡形もなく治した。べつに紅菜は治すきがなかつたのだが、傷をみるたびに昂摩が苦しそうな悲しそうな顔をするので忍びなかつたのだ。

「きにするな」

何度いってもそういう顔をするので紅菜はきれいにもどりおりに治すことにしたのだ。治つた肌をみたとき昂摩は「じめん」と何度もいつてわらつていた。

「紅菜様、もう桜もほとんど散つてしまつていますね」

しばらくして柏はもう桜が散つて桜見酒ができなかつたといった。柏の言葉に紅菜はしんそこ悔しがりがつくりと肩をおとした。柏のうれしそうな声での励ましがあつたが紅菜の悔しさはさらにますばかりだ。白瞑酒はというと菜稚琉にすべて没収されてしまつていて、そのことも紅菜の落胆に拍車をかけたのだった。

そして、だらだらとした日常がもどつてきた。菜稚琉にちかじかこちらへいらっしゃいといわれているがまだとうぶんはいきたくないし、いかなくてもいいだらう。

紅菜は春の名残を一日中寝てすゞす。陽射しをあびながら昂摩を枕にして寝ていた。

「・・・ううん」

紅菜は田をこすりながら田をさます。まだ、日は高くあたたかい。

「おきたのか?」

まだぼーといている紅菜に昂摩がいった。無防備な紅菜の表情に昂摩はあたたかい気持ちになる。髪が頬にかかつて邪魔そつだからやさしくはらつてやる。

紅菜はそんな昂摩にやわらかくほほ笑んだ。そのあまりにも無邪氣

で朗らかな笑みに昴摩は顔を赤くしてしまつ。いつしてこんな笑みをむけてくれる男は自分だけなのだ。紅菜にとつての特別は自分だけ。

ぼーとしていた紅菜はおきあがると昴摩の頬にふれる。

(まだ、寝ぼけてる)

紅菜をみながら昴摩はうれしそうにみている。愛おしい人はこんなにもきらきらしてみえる。それが両想いともなればキラキラはまし、さらにほかほかした気持ちまでくわわつて頭に春がきているような感じだ。

不意に紅菜の体がのびあがり、唇が額にふれる。昴摩はそのとつぜんのでき」と一瞬、かたまると顔を真つ赤にして目をみひらいでいった。その声は裏返つていてすこしおかしい。

「なにつ、く、紅菜ッ」

紅菜は昴摩の膝のうえに横すわりになると頭を昴摩にあずける。そして、自信ありげにいう。

「また、おかしくなつたら私がとめてやるから」

紅菜にはこんかいのことはこう説明してある。

黒鬼魔王と紅菜が闘つているときいた昴摩はあわててその場にあらわれた。そこで昴摩がみたのは血まみれの紅菜の姿で、きをうしなつてぐつたりとしている姿だつた。紅菜を傷つけたことに激昂した昴摩は黒鬼魔王と刃をまじえ、戦いのなかで強く頭をうつておかしくなつた。

紅菜に教えられている事実はこれである。鬼族の記録帳にもこれとまつたくおなじことがかかれている。

「紅菜・・・」

昴摩は感動して紅菜をみつめている。その瞳がだんだんとあついものになり紅菜にそつとちかづいた。

くしゅん。

紅菜がくしゃみをしたわけではない。もちろん昴摩がくしゃみをしたわけでもなかつた。

「おあつことこらわるいですが」

そういうたのは鬼柳だ。いつのまにか廊下には鬼柳、黒鬼魔王、

螢蘭、菜稚琉が一人をみていた。

「なつ、い、いつから？」

とんだとこらをみられた昴摩は狼狽をあらわにする。螢蘭は顔半分をひきつらせながら怒りをあらわにして、紅菜を昴摩からとりあげる。小さい子供のように抵抗しない紅菜はあつとこつまに螢蘭の腕のなかにおさまる。

「そばにいる」とは認めてあげたけど、交際は認めてないのよ。昴

摩くん」

昴摩くん、といわれること自体がいいようのない恐怖をやどしている。細い肩に手をおいて紅菜は螢蘭にいつ。豊満な胸が紅菜の体をすこし圧迫している。

「師匠？ 私は昴摩と交際してないぞ」

その言葉に昴摩はもちろん、黒鬼魔王、鬼柳、螢蘭もかたまる。四人は「え？」という表情をうかべていた。四人のだいの男（ひとりいまは女装中）がこんなまぬけな表情をならべているとかなりおかしい。

（まあ）

菜稚琉は心のなかで紅菜の言葉にみじかい感想をつける。ひとりだけ平常心のままだ。

しばし沈黙。

「ぐ、紅菜、オレのこと好きだつていつたよな？」

昴摩が意を決したように指をぴくぴくさせながらいつた。紅菜はきょとんとした顔でこたえる。

「いつたぞ。好きじやなきやいつしょに住まないだろ？」

「さつき、オレに口づけたよな？」

昴摩がなにをいいたいのかわからぬ紅菜は不思議そうな顔をする。

「したぞ？ だめだったのか？」

円融や柏にしたときふたりは「そのよつなことなさらないでください」といったのだ。ふたりとおなじで口づけられるのが昴摩もいやなのだろうか。

さらに勇気をふりしほって昴摩はいった。やめておけばいいのに。

「なぜ？」

「だつて、家族には口づけして愛情表現するだら？ 師匠がそういうてた」

昴摩のつかのまの幸せは首をくずれて塵になり、さらさらと風に流されてきえていく。逆に螢蘭の勝ち誇った高笑いがあたりにひびく。それに遅れて黒鬼魔王の馬鹿にした高笑いと鬼柳の氣の毒そうな哀れみの視線が昴摩にそそがれる。

（こっち方面はやはり紅菜は鈍感なんですね）

菜稚琉がこれまでの紅菜の姿をおもいがながら心のなかでいつた。そつち関係の自分の気持ちには疎いようだ。では、昴摩が紅菜によせる好意はどうおもつていいのだろう。好奇心にかられて菜稚琉は紅案にといかける。

「昴摩は紅菜と比翼連理の契りをかわしたいとおもつてているとおもうのだけど？」

紅菜はさらによくわからない顔をすると菜稚琉にいった。その言葉は文字どおり傷に塩を芥子を唐辛子を塗るよつことになる。

「昴摩が私に恋しているのはわかつていて。だから、私はうけいれて家族としていっしょにいるんだ」

その言葉に高らかに螢蘭の笑いがふたたびあがる。馬鹿にするように笑っていた黒鬼魔王もあまりの惨劇にさすがに同情の目をむける。昴摩は口をあけてもう風化している。

「紅菜にとつては恋も家族もいっしょなのね」

菜稚琉は自分の分析の結果を素直にくちにだした。他が自分にむける好意が恋心だと認識することができるが、紅菜自身が恋心といふものを理解することはないということだ。

（紅菜のおもいも恋心だとおもつただけだ）

恋心を感じたことのない者がどうやって恋をよせる者にほんとうの意味でのおもいをかえすことができるだらうか。

「家族と男女ではなにかちがうのか？」

紅菜の無知なというよりも無邪気なといかけに螢蘭は紅菜の頬に口づける。これが、いや、ここが紅菜の認識のすれをおこせたすべての原因だ。

「こつしょよ、こつしょ。父と母と子供と友とおんなじ愛情よ」
螢蘭はさうにつよくすつこませるように紅菜にこついた。菜稚琉はそんな一人をみながらおもづ。

（まあまあ、螢蘭たらそんなことばかりこつて）

「それより、そろつて何しにきたんだ？」

紅菜の問いに鬼柳はこたえる。昴摩を憐れみながらもまだ自分にもつけるすきがあることに自然とやるきと喜びがわきあがる。昴摩はまだしらないが、黒鬼魔王は一人が帰つたあと公的に紅菜を認めている。つまり、鬼族に嫁にくることを認めたのだ。しかも、紅菜の認めた相手を夜叉にすると口ぞえもしている。つまり、紅菜の夫になれば自然とその者が夜叉になることになつたのだ。
「藤見酒でも」とこつしょにどつかとおもいまして・・・白眼酒ももつてきたんですよ

その言葉に紅菜の顔がぱああと明るくなる。そして、ほんとうにうれしそうにこつた。

「ほんとうにもつてきてくれたのか？」

「はい、城中の白眼酒をもつてきましたからたくさん飲めますよ。馬でのんびりいきましょう」

紅菜の瞳はきらきらとかがやいでいる。そんな紅菜におもわず、手をのばして鬼柳はこつた。
「お姫様、どうか私の馬で」とこつしょに

紅菜が返事をするまえに黒鬼魔王はおなじように手をむしのべるといふ。

「ただ若いだけの男より、私のような味のある男はいかがかな？」

螢蘭は紅菜をおろすと男にもどり一人にたいして膝まづいて手をさしのべた。まだまだ可愛い愛児を他のやつにわたすつもりはない。

「や、りしこじとされるからやめとけ。俺の手をとれよ、紅菜」三人に手をさしのべられている紅菜にきづいた昴摩は風化から我にかえるとあわてて手をさしのべていった。

「紅菜、オレにつッ」

昴摩がいちばん格好わるく、いちばん必死な感じがした。紅菜はそんな昴摩にくすくすとわらいつと昴摩の手をとつた。その笑いはけつして馬鹿にしているようなものではなく自然ともれてしまつたとう類のものだ。

手をとつてもらえたことにほつとすると昴摩は紅菜を抱き上げる。いまはこれだけで満足しなければいけないとおもつた。間違いなく、鬼柳や親父よりは上位にいるし、螢蘭のことは親兄弟のよつておもつていいようだから。

恋心がどんなものかわかつていないとこじとは他に宿敵があらわれる可能性をはらんでいるがいまはとりあえずこれで納得するしかない。まだ、自分にも機会はあるはずだ。そう結論づけると昴摩は藤見にむかつた。

春から梅雨に季節をわたす藤の群生はつづく。青空に紫の花をたおやかにゆらしている。吹く風は爽やかに過ぎなつていて、やさしい日との調和を樂しませる。そんな、春の最後の宴の場で六人はそれぞれに楽しんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4761d/>

導乎草子～草子シリーズ2～

2010年10月8日14時17分発行